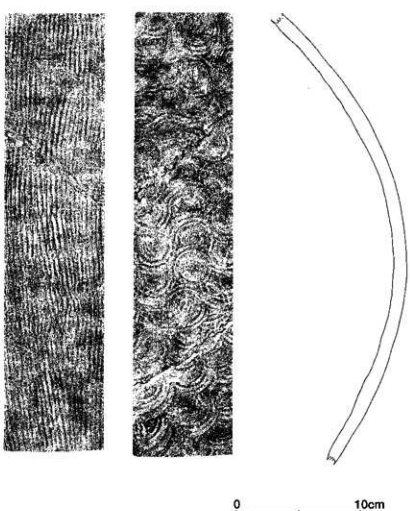
や不良で白っぽい。坏身3も色調・焼成が同じで、口径12.2㎝、最大径14.4㎝で、受部径は13.6㎝を測るから坏蓋2とセットであろう。受部から口縁端部までは1.8㎝と高い立ち上がりをみせ、底部は丁寧な回転ヘラ削りを施す。

他の蓋坏は、8・9のセットが焼き歪みが大きく正確でないものの、坏蓋が屑部の稜線を沈線2条で挟むようにして作り出し、口径は13㎝、器高は4.3㎝程度のもの、坏身が口径11.5～11.7㎝、最大径13.7～14㎝で、受部径は12.5～13㎝程度のものである。受部から口縁端部までは1.2～1.5㎝ほどの高さで立ち上がる。また、坏蓋の口縁端部の調整は坏蓋3とほぼ同様でβ類に属するものである。ただし、6・7のセットは、他と比べて天井部や底部の回転ヘラ削りが浅く削り残しが多い。また、坏蓋6の口縁端部内面は沈線上位の帯状の膨らみがなく、坏身7の器高が3㎝と非常に扁平であることも、他と異なるところである。なお、坏蓋1と坏身5は重ねられて出土しているが、色調が全く異なり、セットで焼かれたものとは考えがたい。

蓋坏にはヘラ記号を持つものがあり、坏身5底部と坏蓋8天井部に「×」印のヘラ記号、坏身9に横1本線のヘラ記号が認められる。

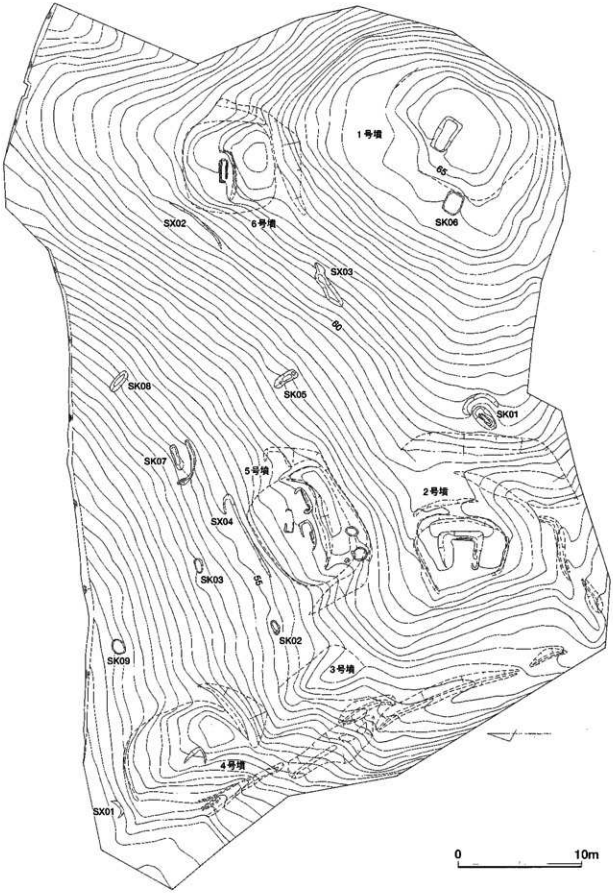
11は須恵器の短頸壺で、口縁部を全く欠いているが、出土状況からみて意図的なものであろう。胴部最大径は13㎝を測り、焼成は不良。内面から外面にかけて回転ナデ、底部外面は回転ヘラ削りを施す。



第75図　岩屋遺跡Ⅰ区SK06出土遺物実測図（S=1／3）

10は土師器の壺で、口径9㎝、器高9.6㎝、胴部最大径10.9㎝とやや小型である。口縁部は広がり、胴部はまるい。胴部は内面にヘラ削りを施し、外面にはナデ後不定方向にハケメを入れる。

これらの遺物は11を除けば全て棺内副葬品である。遺物の時期は、坏蓋を参考にすると、口縁端部の様相はどれも同じだが、2だけは口径が大きく高さもあり、これと対応する坏身3の受部の立ち上がりも高いことから、大谷編年の出雲3期と併行する時期に遡る可



第76図　岩屋遺跡Ⅰ区墳丘盛土除去後地形測量図（S=1／300）

能性を持つ。しかし、それ以外は大谷編年の出雲４期と併行するとみてよいだろう。また、そのなかでも蓋坏６・７のセットは回転ヘラ削りの在り方が新しい様相をみせ、これが棺の西側から出土していることを考えると、棺蓋が一度開けられた際に入れられた可能性も想定できよう。そうであるなら、坏身３・４が重ねられて棺の南西隅に立てかけられていたのは、その際に片づけられたものであろうか。

16. SX02（第68図、73図）

６号墳墳裾の北西隅から0.6mほど離れた斜面に、加工段状の遺構SX02が検出された。ただし検出時、地山は10㎝ほど浅く掘り窪められていたものの、それが平坦面を形成する状況にはなく、そのままやや急な斜面となっていた。遺物なども検出されず、地山にこうした加工がなされた理由や時期等については不明である。ただし、５号墳の前面からも加工段状の遺構SX04が確認されたことを考えると、ここも６号墳にともなうもので、急斜面のため平坦部は流れ落ちてしまった可能性も考えられよう。

17. SX03（第74図）

１号墳西側の斜面標高61m付近に、地山を溝状に掘り込んだSX03が検出された。遺構は最大１mの幅で、東西に4.1mの長さで蛇行しながら走る。その深さは0.3mほどで、遺構内には溝状に掘り込んだ地山内部に淡灰褐色土（４層）が堆積し、それがさらに小規模な溝状に掘り窪められていた。そして、その小規模な溝の壁面は火を受けた痕跡が認められ（３層）、さらにその内部には焼土や炭が多く混入していた。遺構の性格は明確でないが、あるいは炭焼きの痕跡であろうか。

第３節　岩屋遺跡Ⅱ区の調査

Ⅱ区はⅠ区の東側下方の標高52.5mから40mの緩斜面に設けた調査区である。ここから検出した遺構は互いに切り合う加工段４棟と、掘立柱建物１棟、土抗１基、道状遺構２条、遺物は奈良時代の須恵器・土師器と、玉の未成品や制作途中に生じた大量の水晶や碧玉のチップ、砥石などが主なものである。このなかでも特に、当調査区において奈良時代の玉作工房址が確認されたことは注目される。これらのほとんどは、表土を浅く剥いだ程度で地中から現れてきた。ただし、調査区東端の標高の高い地点に黒灰褐色の堅い土が厚く堆積する状況が観察されたので、トレンチを設けて１～２mほど深く掘り下げたが、底は黄赤褐色の地山で、遺物・遺構などは検出されていない。

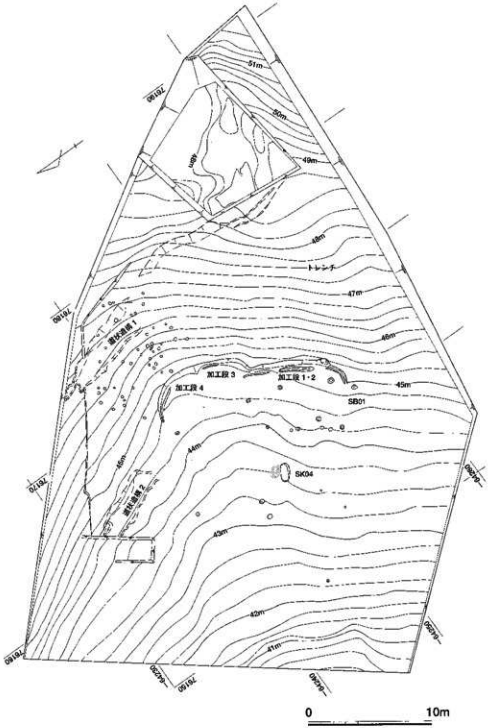
また、調査区内からは関連遺構は検出されなかったものの、遺物では縄文時代の黒曜石の鏃や旧石器時代のナイフ形石器などが採集されている。

１．加工段１・２（第78図）

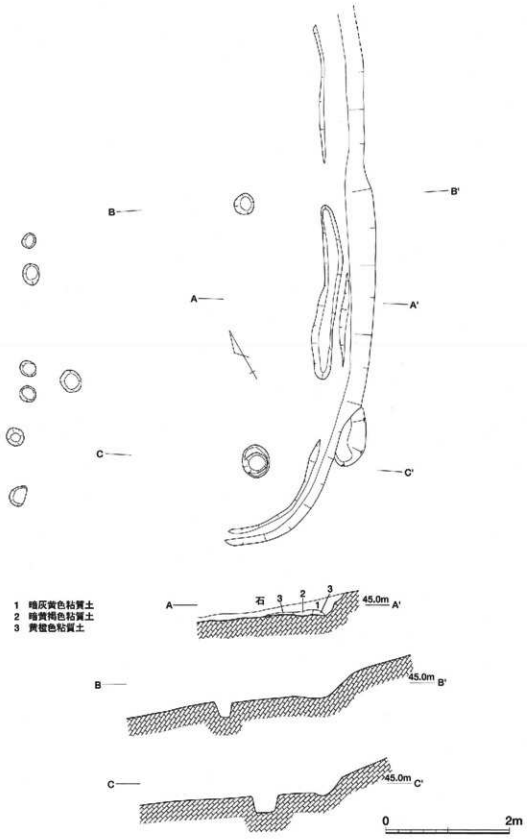
加工段１と２はほぼ同じ場所に築かれている。加工段１は壁体溝のみの検出だが、加工段２は壁面が最大約40㎝ほどの高さで遺存していた。それによると、加工段２の奥壁は８m以上の長いものであったと推定され、壁面に沿ってその内側に浅い溝がめぐる。この加工段２の壁体溝のすぐ内側には、それと平行してもう１条の溝がめぐるが、A－A´の位置で土層の堆積状況をみると、加工段２の壁体溝が使用されていた段階で、すでにそこには２層が堆積しており、床面となっていたことが確認された。したがって、この溝は加工段２以前のもので、これを加工段１の壁体溝の痕跡と判断した。すなわち、加工段２は加工段１の築かれた場所とほぼ同じ位置、同じ方位で掘り直されていたとみられる。加工段１の壁体溝はC－C´付近では確認できないが、B－B´よりも北東側では加

T段2のものと重なり、幅広の溝となって検出された。

また、この加工段内には複数のピットが検出されたが、その配置に規則性を見出し難く、加工段にともなう柱穴であるかは明確でない。しかし、B－B′とC－C′にかかるピットはその位置からみて柱穴の可能性があろう。なお、C－C′にかかるピットは後述するSB01の柱穴の一部ともなっているが、このピットだけは掘り返しの痕跡が認められ（第82図）、矛盾しない。ここからは、床面に接する遺物は検出されなかった。



第77図　岩屋遺跡Ⅱ区遺構配置図（S=1／300）

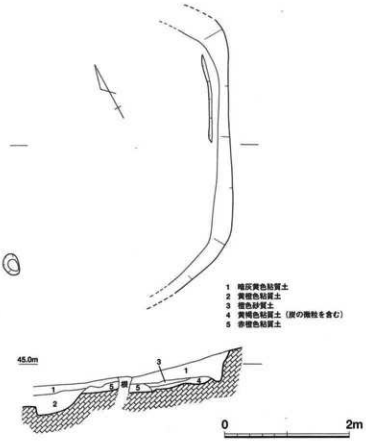


第78図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段１・２実測図（S=1／60）

2．加工段３（第79図）

加工段３は、加工段２の奥壁の一部を切るようにその北東側に設けられている。50cmほどの高さで遺存する奥壁の長さは3.2mほどと小規模なもので、やはりその内側に浅い溝がめぐる。土層堆積状況からは、４層が壁体溝によって一部切られていたこと、３～５層の堆積する上面が水平を示していることなどが窺われ、これらを貼り床と判断した。また、その北西側ではそれらを切って第２層が堆積するが、これは明確な遺構にならない。木の根や倒木などによる撹乱を受けたのであろうか。

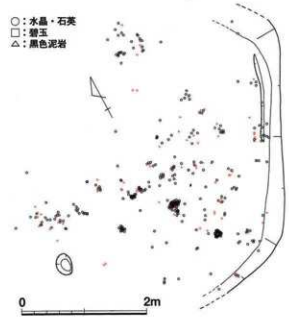
また、これにともなう柱穴は明確でなく、少なくとも大きく地山を掘り込む柱穴があったとは考え難い。加工段３には屋根が無いか、あっても非常に簡単な構造のものであろう。



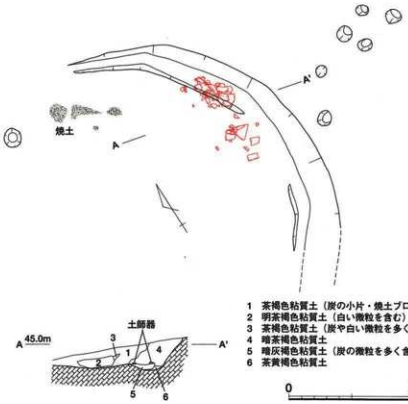
第79図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段３実測図（S=1／60）

さらに、床一面には玉の未成品と、それら石材の剥片が散乱しており、ここが玉作工房として使用されていたことを示している。それらの出土状況については以下で説明を加えることにしたい。

出土した石材は水晶・石英、碧玉、黒色泥岩である。これらのうち、未成品・剥片の別、重さなどを無視したドット数だけでみても、水晶・石英は77%、碧玉は14%、泥岩は９%と、水晶・石英を使用した玉作が非常に多かったことが窺われる。なお、後述するように、遺跡から採取した未成品・剥片の総重量でも水晶・石英は70%を越えていた。また、未成品・剥片の散乱は基本的に床面全体に及んでいるが、加工段南西寄りにはこれらが重なるように特に集中する地点が数か所あり、それらが実際に玉作の作業を行った場所であろう。なお、



第80図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段３玉未成品・剥片出土状況実測図（S=1／60）



第81図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段４実測図（S＝1／60）

加工段北側の未成品・剥片の一群は、ここが後述の加工段４と床面が重なっているため、加工段４のものである可能性も残されるが、これら以外、加工段４からは玉の未成品や剥片の散乱が確認されていないので、加工段３のものとした。

３．加工段４（第81図）

加工段４は加工段３の北側に接し、両者に切り合っているが、その先後関係は明確でない。ただし、加工段３の方が奥壁がやや山側に入り込んでいること、先述のように加工段３の玉の未成品・剥片が加工段４の床面付近まで広がっている可能性があることなどから判断すると、加工段４、加工段３の順であったのではなかろうか。

加工段４は弧を描いて湾曲する北東隅の壁面が50㎝前後の高さを持って一部遺存する程度で、その内側には壁体溝がめぐっていた。また床面からは壁に接して須恵器の鉢（第91図－６）と移動式竈の一部（第92図）が重なるように押しつぶされた状態で出土した。床面の一部は火を受けた痕跡が確認できることから、ここで煮炊き行為が行われていたことはほぼ確実である。ただし、ここでも北側に小ピットが確認できる以外、精査にもかかわらず柱穴らしき痕跡を検出することができなかった。したがって、ここに屋根があったとしても、やはり非常に簡素なものを想定せざるを得ない。なお、出土遺物の詳細については、他のⅡ区出土遺物のものと一括して後述することにする。

４．SB01（第82図）

SB01は加工段１・２の南西にある１×１間の小規模な掘立柱建物である。柱穴の中心を基点とする柱間は長辺3.3m、短辺２mを測り、長軸方向はN－38°－Wであった。土層観察の結果、東隅の柱穴は掘り直された痕跡があり（１層）、これが先述した加工段１・２いずれかの柱穴の痕跡であ

る可能性がある。その場合、SB01は加工段１・２以前のものということになる。

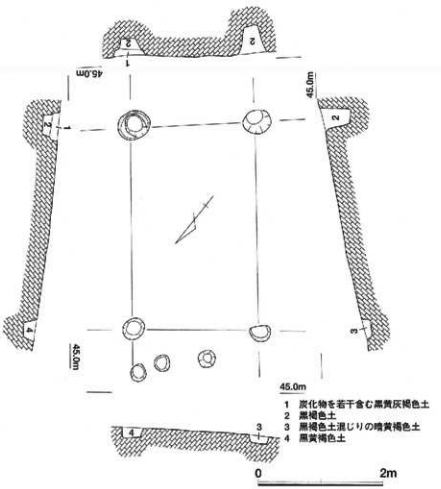
５．SK04（第83図）

SK04は加工段１・２の奥壁からは谷側へ7.8mほど離れた緩斜面に位置する土坑である。平面形はやや長方形に近い楕円状を呈し、検出時の上面は長径1.48m、短径0.7m、底面は長径1.38m、短径0.58mで、深さは最大で0.46mを測る。また、土坑内の堆積土上層は小規模な炭焼きや木の根による撹乱を受けていた。底面中央にも根が地山に穴を空けていたが、そこには人頭大の石（第84図）が落ち込んでいた。

出土遺物（第84図）　出土した石は上面と下面が割れたままの状態で楕円状の扁平なものであるが、第84図断面図左側面と右側面上部がわずかに腕状に摩滅し、もともと砥石であったことを示している。これが根の撹乱によって移動しているとしても、土坑底部からの出土であることから、SK04も玉作とかかわる可能性は否定できない。しかし、底部の土から玉の剥片や、砥屑らしきものは確認できなかった。

玉未成品・剥片集中出土地（第83図）　土坑のすぐ北東側には玉の未成品・剥片が10㎝以上の厚さで密集して堆積する地点があった。その範囲は長径1.2m、短径0.86mほどの不定形の楕円状に広がる。土坑がサブトレンチによって確認されたため、両者の先後関係を上層によって確認できなかったが、土坑内の堆積土の比較的上層付近に若干水晶、石英、碧玉などの剥片が含まれている以外、土坑内に玉の未成品・剥片などが流れ込んだ形跡がない。この両者が遺構として一体のものであるか、あるいは土坑が後に掘られたのであれば、土坑に接してこれだけ厚く堆積する玉の未成品・剥片の一部が土坑内の底面付近に流入しないのは不自然である。したがって、土坑は玉の未成品・剥片の密集以前のものであると理解した方が自然であろう。

玉の未成品・剥片がここに集中する理由については判然としないが、窪地でもないのにこの部分だけに小山状に密集するのは、人為的なものと考えざるを得ない。ここが

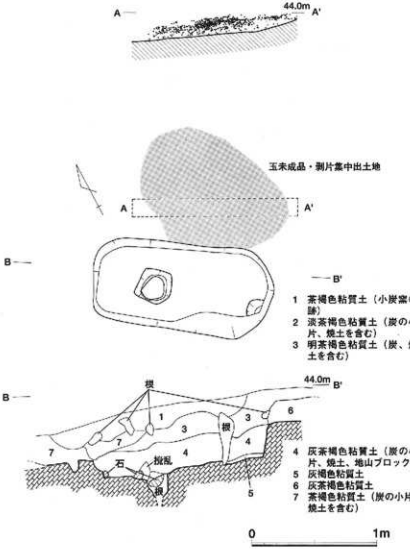


第82図　岩屋遺跡Ⅱ区SB01遺構実測図（S=1／60）

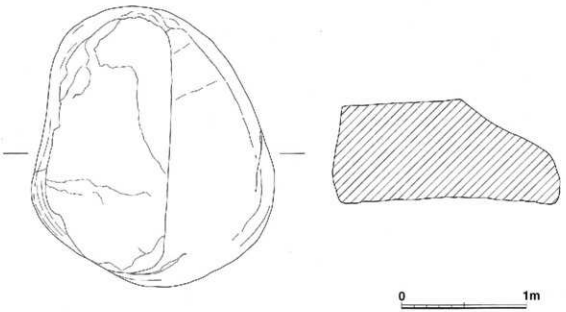
玉作の作業場そのものであるか、玉作の作業過程で生じた剥片や未成品を集中的に廃棄した場所かのいずれかであろう。

6．道状遺構（第85図～87図）

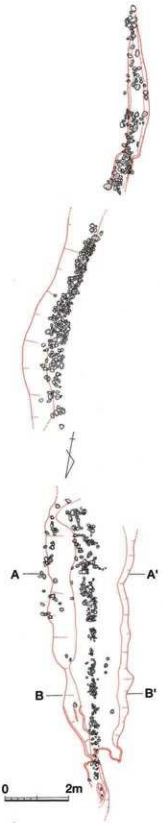
Ⅱ区の調査区内で南北に走る二条の道状遺構を検出した。道状遺構1と道状遺構2は近接しながら、その方向は平行関係にあり、時期が異なるとみられる。特に溝状遺構2は、加工段方向に延びながら、その手前で途切れており、それより以前か同時期の可能性もある。ただし、いずれも遺構の時期を示す遺物等は出土していない。道状遺構1は幅2m前後で溝状に掘り込んだ地山に、砂



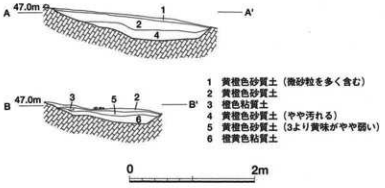
第83図　岩屋遺跡Ⅱ区SK04実測図玉未成品剥片集中出土状況実測図
（S=1／30）



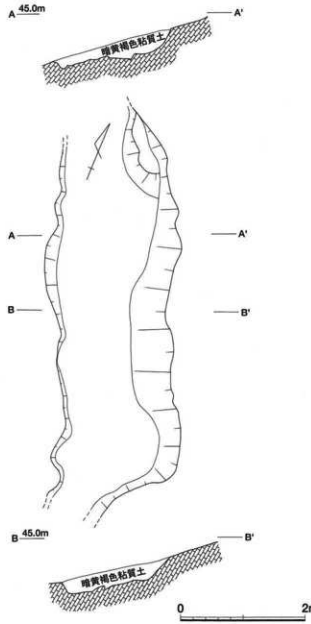
第84図　岩屋遺跡Ⅱ区SK04出土遺物実測図（S=1／3）



第85図　岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構１実測図（S＝1／120）



第86図　岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構１土層断面図（S＝1／60）



第87図　岩屋遺跡Ⅱ区道状遺構２平面図及び土層断面図（S＝1／60）

質土などを三層詰め込み、その上面中央部分に礫を敷いたいわば「舗装」された状態であった。一方、道状遺構２は地山に同じく２mほどの幅の溝が掘り込まれながら、その内部の土は暗黄褐色粘質土が一層堆積するのみで、道状遺構１のような水捌けのよいものではない。しかもその堆積土は加工段上に堆積している土とも大きな差異が認められない。したがって、道状遺構２は溝状のまま使用されたもので、道状遺構１とその構造は大きく異なっていたとみられる。

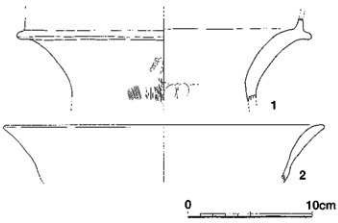
7．岩屋遺跡Ⅱ区出土遺物

岩屋遺跡Ⅱ区からは、碧玉・石英・黒色泥岩などの平玉未成品と砥石を中心とする玉作関連遺物の他に須恵器・土師器を始め、旧石器・縄文時代の石器、弥生土器、中世土器等が見られる。

土器　第88図に示したものは弥生土器である。岩屋遺跡Ⅱ区からの弥生土器の出土は図示した２点しか確認しておらず、大型の石鏃を除けば、他に弥生時代の遺物は見られない。

88－１は弥生土器壺である。頸部から上の小片で口縁部先端を欠くが、複合口縁を持ち口縁部が直立するものと思われる。複合部の稜は強く外側に突出し、口縁部はやや薄く作られる。口縁部周辺はヨコナデされるものと思われ、文様は見えない。頸部外面に縦方向のハケメを密に施している。内面調整は磨滅のため明瞭でないが、頸部内面に指頭圧痕が強く残る。草田編年の４～５期(註9)のものと思われる。88－２は鼓形器台であろう。復元口径約26cmを測る口縁部の破片で、磨滅のため文様等は見えない。草田編年の６期前後のものであろう。岩屋遺跡Ⅰ区からは弥生土器は出土していないが、隣接する平床Ⅱ遺跡からは少量の弥生土器片が出土している。

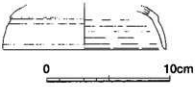
岩屋遺跡Ⅱ区からは古墳時代の遺物はほとんど出土していない。89は須恵器蓋である。復元口径約13cmを測り、口縁部内面に僅かに段の痕跡を残すものである。肩部は下側に太い沈線を入れることで稜とし、破片の範囲内ではケズリは見えない。大谷分類のA3型と思われ出雲３期のものであろうか。周辺の同時代の遺構としては岩屋２号墳がある。岩屋２号墳は横穴式石室を持つ古墳であるが、天井は崩落しており、追葬が行われた形跡もある。



第88図　岩屋遺跡Ⅱ区出土弥生土器実測図（S=1/3）

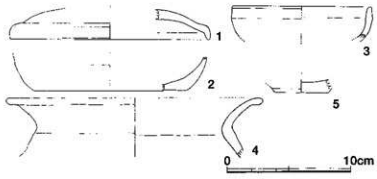
第90図に図示したものは、玉作工房と考えられる平坦面である加工段３付近から出土したものである。

90－１は須恵器蓋である。口縁部付近の小片で、つまみの形状は不明である。口縁端部を直角に折り曲げるもので、カエリはない。復元口径は約16cmあり、国庁編年の第２～３形式に含まれるもの(註10)と思われ、８世紀前半台の年代が与えられる。

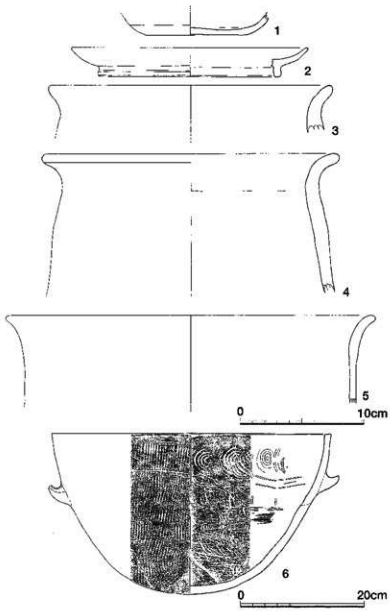


第89図　岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図（1）（S=1/3）

90－３は須恵器底部の破片であるが、大型の坏であろうか。内外面ともナデ調整され、底部の回転糸切り痕もナデ消そうとした痕跡が見られる。90－３は須恵器坏である。比較的小型で内湾する体部を持ち、口縁部外面にナデによるアクセントを付ける。



第90図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段３出土遺物実測図（S=1／3）



第91図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段４出土遺物実測図（1）
（S=1／3、6のみS=1／6）

90－４は土師器の甕である。体部の器壁が厚く頸部から口縁部にかけては薄く引き延ばされ、口縁端部を厚く作る。90－５は土師器坏底部である。底径４㎝程の小さいもので、回転糸切り痕を残し、体部は直線的に延びるものと思われる。古代末～中世のものと考えられる。

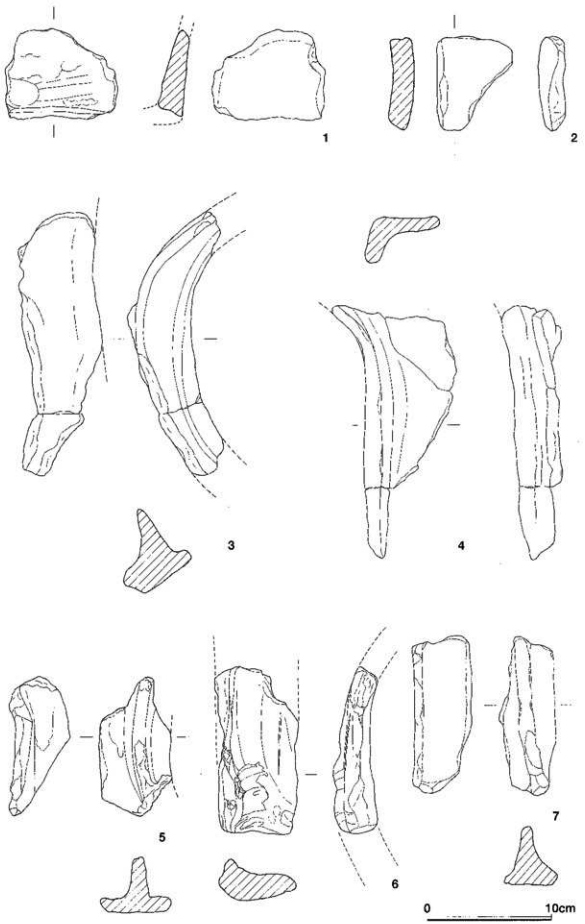
加工段３から出土した遺物の内、時期の推定が可能な遺物は須恵器類しか見られない。90－１が８世紀前半台と見られるが、90－２の回転糸切り痕にナデ消そうとした痕跡が見られ、その年代観に矛盾しないものと思われる。

第91・92図は、加工段４から出土した土器・移動式竈を図示した。加工段４も加工段３から連続する加工段で、加工段３に先行するものと見られる。

91－１は須恵器坏である。回転糸切り痕を残し、体部は内湾する。

91－２は土師器皿である。小片であるが、20㎝近い口径に復元でき、太い高台を持つ。内面に赤色顔料の付着が見られる。91－３～５は土師器甕である。いずれも肩の張らないプロポーションで、口縁部は短く外反する。91－３・４は内面に煤が付着している。

91－６は取手の付く須恵器鉢である。多くの破片が集中して出土しており、完形に近い所まで復元できた。口径約45㎝、器



第92図　岩屋遺跡Ⅱ区加工段４出土遺物実測図（2）（S=1／3）

高約26cmと大きなもので、器壁も1cm以上ある。箱形となった口縁部はヨコナデされ、口縁から約7cm下方に取手を付けている。取手より下方の口縁より11cmの位置に粘土のつなぎ目が見える。口縁部より約5cm下方の外面には、ヘラ描き状の沈線が引かれているが、口縁部と平行になっており、口縁部成形時の工具痕であろうか。外面に平行タタキ痕を、内面に同心円文の当て具の痕跡を残しているが、内面には横方向にヘラ状工具の痕跡が残り、当て具痕を消そうとしているように見える。全体に暗黄褐色を呈しているが、底部周辺のみ明黄褐色になっており、被熱痕と思われる。熱に対する須恵器の耐用度は疑問であるが、鍋として使用されたとしか思えない。

第92図に示したものは加工段4で出土した移動式竈の破片である。92－1は正面上側の破片で、庇が剥離した部分と思われる。92－2は体部である。92－3～7は正面の庇部分の破片である。全体の大きさは不明であるが、1～2個体程度の破片であると思われる。

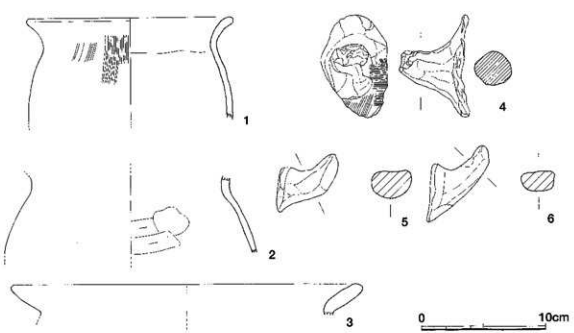
加工段4で出土した遺物は、91－1・2から8世紀中頃を前後する時期のものと思われる。遺構の状況からは、加工段4が加工段3に先行すると見られるが、数少ない土器の年代からの判断は微妙であり、両者は近い時期に機能したものと想像するに留める。

第93～96図は遺構に伴わない土器である。93－1・2は土師器甕である。短い口縁部を持ち肩があまり張らず、加工段4出土遺物に似るが、器壁がやや薄い。93－3も土師器甕の口縁部であるが、厚手の口縁を頸部を折り曲げて作るもので、中世の鍋に近い形態を持つものと思われる。古代末～中世初頭のものであろう。93－4・5は、土師質の甑の取手である。

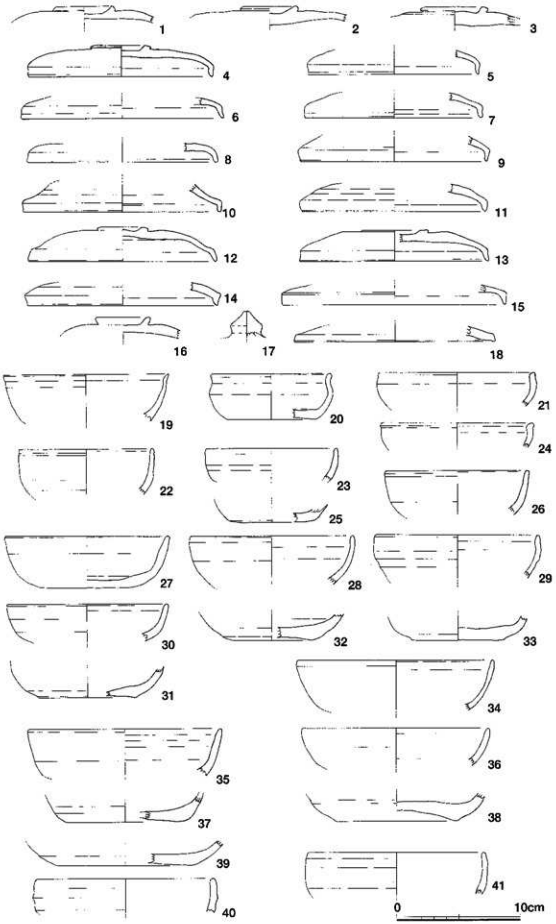
94－1～18は須恵器蓋である。口径15cm前後のものが多く、器高の高いものは見られない。

いずれもカエリは無く、輪状つまみを持つものが多い。94－17は宝珠つまみの破片である。94－18は直線的な体部を持ち、口縁端部の垂下がほとんど見られないものである。

94－19～41は須恵器坏である。底部が残るものはいずれも回転糸切り痕を残しており、ヘラ切りのものは見られない。体部が丸みを持って立ち上がるものばかりで、直線的な体部を持つものは無



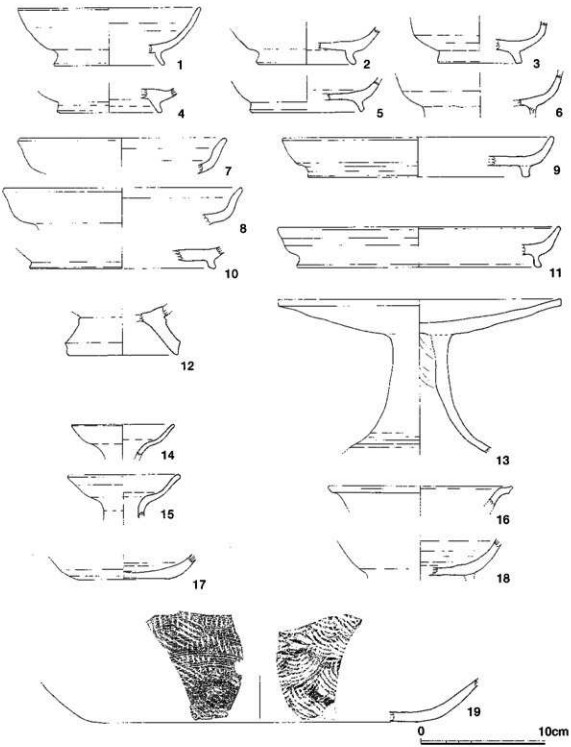
第93図　岩屋遺跡Ⅱ区出土土師器実測図（1）（S=1／3）



第94図　岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図（2）（S=1／3）

い。94－19は口縁端部を外反させるものである。94－20～26は口縁部外面にアクセントを持つものである。他はいずれも口縁端部を丸く納めている。

95－1～6は高台を持つ須恵器坏である。いずれも体部が内湾しながら立ち上がるもので、口縁端部を丸く納める。高台は僅かに外傾し丸みを持つもの（95－1・2）と、直線的に強く張り出すもの（95－3～5）がある。多くのものが高台端部を台形か丸く納めているが、95－3は端部に面



第95図　岩屋遺跡Ⅱ区出土須恵器実測図（3）（S=1／3）

を持ち、沈線状に窪ませる。底部を完全に残すものが無く切り離しは不明である。

95－7～11は須恵器皿である。体部は直線的に延びた後、折れ曲がるように口縁部を外反させるもので、95－7・8は口縁端部に面を持つ。高台を残すものはいずれも台形に近い形状を呈し、高台端部に明瞭なアクセントを持つものは見られない。95－9は底部に回転糸切り痕を残している。

95－12は須恵器高坏の脚台部である。低脚のもので坏部の形状は不明である。脚台部は直線的に張り出し、端部外面に面を持つ。スカシは確認できない。

95－13は長脚の付く須恵器皿である。高い脚台部は皿部からほぼ垂直に延び、裾を大きく開くもので、下方で沈線状のアクセントを持つ。脚台部内面には絞り目を残している。筒部の状況よりスカシは開けていないものと思え、脚端部の形状は不明である。皿部は僅かに内湾する体部が口縁端部まで続き、口縁部外面には幅6㎜の面を持つ。皿部内面はナデ、他の面は回転ナデ調整している。類例の少ない器形であるが、松江市狐谷横穴墓群[第11]や東出雲町島田4号横穴墓出土[第12]の大型高坏などと同じ系譜のものと思われる。

95－14・15は須恵器甕である。口縁部付近の破片で、屈曲した口縁を持ち、口縁端部を丸く納めるものである。口縁端部の形状から別個体であることは確実であるが、他の部位は確認できなかった。いずれも器壁が薄い。

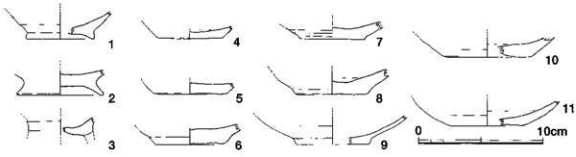
95－6～18は壺と考えられるものである。95－17は無高台で底部外面に回転糸切り痕を残し、周囲をヘラケズリしている。95－18は、高台の剥離痕が見られる。

95－19は、甕か鉢の底部付近と思われるものである。外面には、平行タタキを消すようにカキメが入る。内面の同心円当て具痕は、深く刻まれており、大型の鉢に見られるナデ消しの痕跡は無い。器壁は5～8㎜とやや薄い。

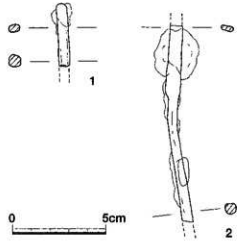
第94・95図に示した須恵器はいずれも8世紀前～中頃を中心とした時期のものと思われ、94－18など9世紀に入る可能性のあるものがごく僅かに含まれると思われる。この年代観は加工段出土遺物の年代と矛盾しない。

第96図に示したものは土師器坏である。底部の小片のみで、口縁部の形状が判るものはない。いずれも平安時代中頃以降のものと思われ、須恵器類の年代とは一致しない。須恵器類に比べ個体数も少なく、後世の流れ込みと思われる。

96－1～3は高台の付くものである。96－1は断面三角形に近い、低く短い高台を持つものである。底部から高台端部まで緩やかに連続させ、端部は丸く作っている。口縁部の形状は不明であるが、体部は直線的に延びるようで、体部外面に強い回転ナデの痕跡を残す。96－2はやや長い高台



第96図　岩屋遺跡Ⅱ区出土土師器実測図（2）（S＝1／3）



第97図　岩屋遺跡Ⅱ区出土金属器実測図
(S=1/2)

を横方向に直線的に延ばすものである。底部までナデ調整され切り離しの痕跡を残さない。96－3は張り付けた高台が剥離したものである。底部の器壁が薄く、底面が大きく湾曲している。

96－4～11は高台の無いもので、底部の磨滅を免れたものはいずれも回転糸切り痕を残している。底径5㎝前後の小型のもの（96－4～7）と6㎝前後のもの（96－8～11）がある。96－7・8は体部外面と底部の境にアクセントを持ち、体部外面に強い回転ナデを施す。

金属器　第97図に示したものは岩屋遺跡Ⅱ区から出土した金属器である。いずれも断面長方形の棒状のものである。97－1は一端を薄く扁平に作るもので、マイナスドライバーのような形状を持つものである。97－2は図上上半を扁平に潰し、幅を広げたもので、図上下半はシャフトに見えるものである。いずれも用途は不明であるが、玉作に関わる工具であろうか。

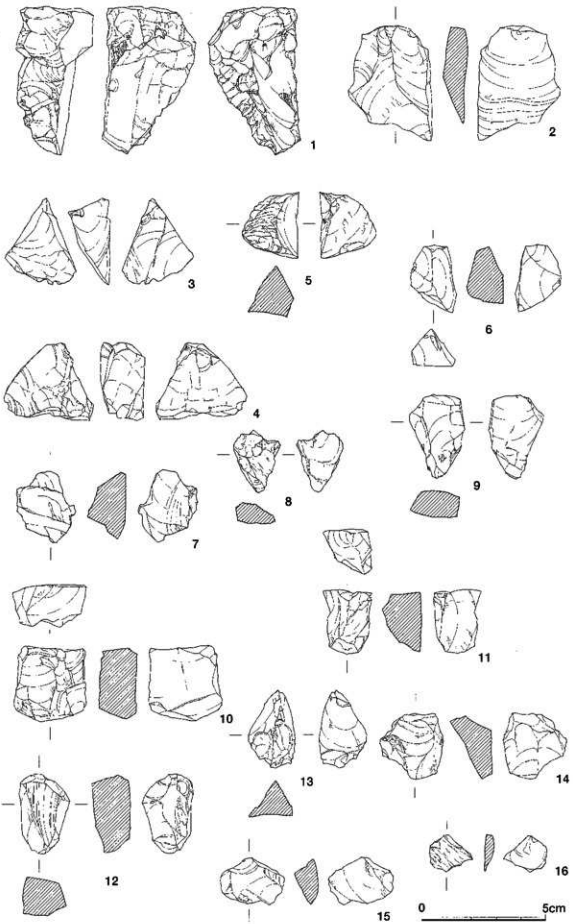
玉作関連遺物　第98～106図に図示したものは、平玉未成品と考えられるものである。完成品に近いものはいずれも直径2㎝以下の平面円形を呈したもので、穿孔されるものはなく、現代の碁石と全く同様の形状を呈す。平玉未成品には3種類（碧玉・黒色泥岩・石英）の石材が使用されている他1点のみであるが、黒色を呈した砂岩質と思われる調整剥片（109－8）が見られた。同様の平玉を生産している蛇喰遺跡では、碧玉・黒色泥岩・石英の他、少量ながら黒色桂質頁岩が含まれている。黒色桂質頁岩は那智黒と呼ばれ、現代の碁石に使用される石材であり、その形状を加味し製品の使用目的を示唆するように思える。

碧玉製平玉未成品　碧玉は古墳時代の玉類に多く使用される緑色の石材で、出雲石と呼ばれることもある。花仙山で産出する石材で、同様の石は現在玉湯町周辺の土産物店でも勾玉に加工された土産物を見かける。通称としてはこの石を「青メノウ」と呼ぶ場合もあるが、分析の結果、岩屋遺跡の平玉に使用される石の主成分は石英であり、オパールが主成分であるはずのメノウの名称はふさわしくないとの指摘[注13]があったため碧玉と呼ぶ。

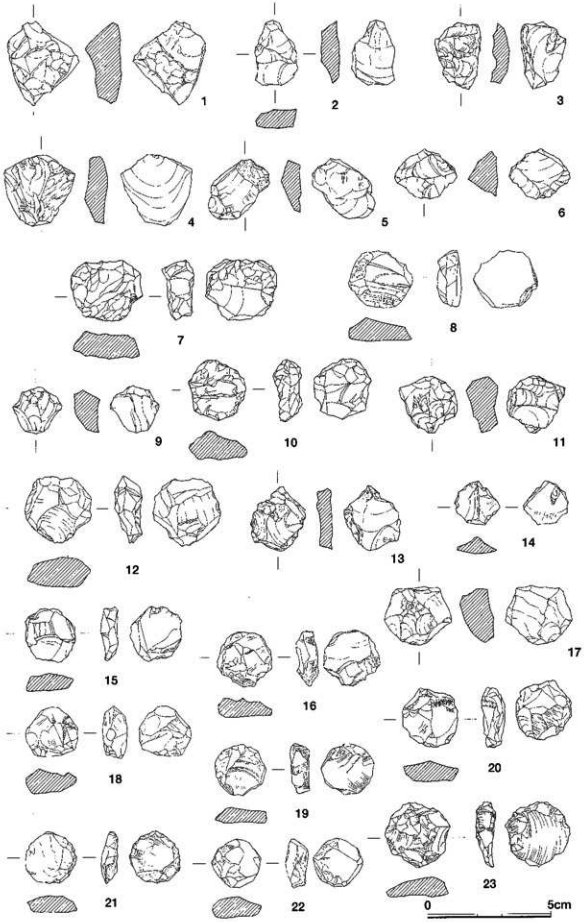
第98～101図は、碧玉製の平玉未成品である。素材剥片以前の大きな剥片から仕上げ研磨段階での破損品と見られるものまであるが、原石と呼べるような大きな塊や、最終工程を終えた完形品は見られない。

98－1は石核である。原石は拳大程度の大きさと思われ、薄い板状の剥片素材を剥り取ったものと思われる。

98－2～99－7は剥片素材である。素材として意図している形状は、98－2のような厚さ10㎜以下の薄い板状の剥片と思われるが、実際に割り出されている多くの剥片は12㎜以上の直方体が中心となっている。また98－4・13等のように断面三角形を呈す素材剥片も多く見られることから、ある程度は偶然に起因した剥片素材剥離が行われていたようである。99－6は断面三角形の剥片素材に調整剥離を始めた段階と思われ、様々な形状の剥片素材を、取りあえず加工し始めた様子がうか



第98図　岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未成品実測図（1）（S=2／3）



第99図　岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未成品実測図（2）（S=2／3）

がわれる。

99－7～100－21は調整剥片と考えられるものである。素材剥片は両方体が中心であるため、板状に剥離された面をそのまま生かし、周囲の角を落として平面円形に近づける努力が最初に払われている。99－17等のように平面円形に近い形状を呈していても12㎜以上の厚みを残すものが見られ、薄くするための努力はあまり払われていない。素材剥片には、石核から板状に剥離していった事によるネガ面・ポジ面が明瞭に見られるが、側面の打撃の方向をどちらかの面から一定して行うという様子は見られず、両面から不規則に行われるようである。調整剥離の最終段階（100－17・20）と思われるものは平面円形を呈しているが、断面形は半円に近い形状で、片面に素材剥離時の大きな剥離面を残すものが多く見られる。100－20は調整剥離中に破損したものと思われるが、研磨行程のものに比べ目立たず、調整剥離中の破損は比較的少なかったものと思われる。

100－22・23は研磨行程に入ったものと思われる。調整剥片と形状は大差ないが、飛び出した部分に研磨痕が見られる。この段階でも、厚さ10㎜前後あり、研磨のみによって薄く小さく仕上げていく様子がうかがわれる。

第101図に示したものは、碧玉製平玉の破損品である。直径16～18㎜、厚さ8㎜前後に仕上げようとしているように見え、いずれも一部が破損している。断面形状はレンズ状ではなく、必ず周囲を面取りしており、側面図では明瞭な面が見える。玉作工房であるため完形品は見られないが、最終段階での破損品は多く見られ、この段階での破損が比較的多かったものと思われる。

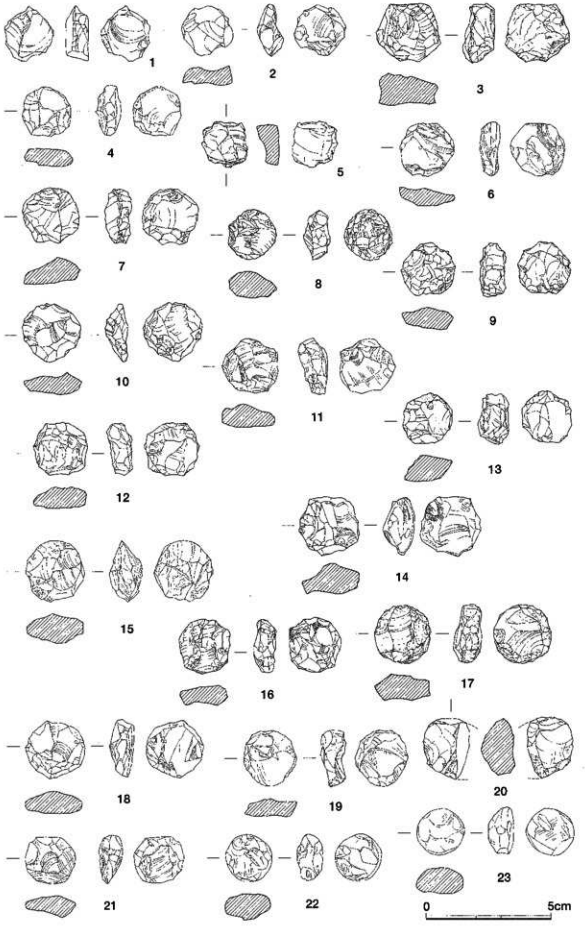
岩屋遺跡での碧玉製平玉は、①石核から板状の素材剥片を剥り出し、②その平面形を円形に近づける調整剥離が行われ、③厚みを残したままの調整剥片を研磨によって薄く仕上げる。と言った行程を復元できるが、各工程内の細部では意図せずに偶然得られたと思われる剥片も使用されている。

黒色泥岩製平玉未成品　黒色泥岩は断面黒灰色の石材であるが、表面は酸化して橙色を呈す。蛇喰遺跡で兵岩と呼称される石と同じものと見られ、「出雲国風土記」島根郡に「玉結濱。廣さ一百八十歩あり。碁石あり。」[注14]の記載が示す石の事と考えられている。黒色泥岩は島根半島では一般的に見られる石材で、原石の産地という事であれば玉結濱のみに特徴的に見られるものではない。石材としてはやや軟質で節理が見え、板状に剥離する性質があるものと見られる。岩屋遺跡Ⅱ区で見られる3種類の玉材の中では最も出土量が少ない。

第102～104図に黒色泥岩製平玉未成品を図示した。碧玉と同様に原石は見られないが、104－10は完形品と呼んでも差し支えないものと思える。

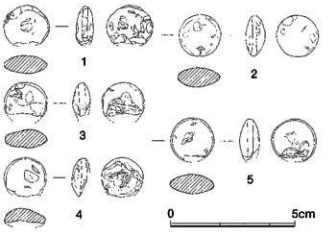
102－1～8は石核である。102－1は比較的大きな塊で、この塊から板状の素材を割り出すことができる。102－2～8は板状に加工された石核で、厚さ1㎝前後に不定型な板状を呈す。102－8は、板状を呈した石核から剥片素材を割り出す途中と考えられるものである。板状の石核の中程を側面から打撃することによって幅3㎝程の剥片素材を割り出そうとしているように見える。片面からの剥離で薄くした後には、剥片素材を折り取ったものと思われる。

102－9～103－7・9～11・13は剥片素材と考えられるものである。平面長方形を呈し厚さ1㎝前後の板状を呈すものが多いが、碧玉製平玉未成品と同様に断面三角形を呈す不定型なもの（102－9～11）も多く含まれる。板状の石核から幅の狭い剥片素材を剥り出す際には、片面のみを剥離し、薄くした後に折り取ったものと見られることから、長方形の剥片素材の片面は1回の大きな剥離しか見られない。



第100図　岩屋遺跡Ⅱ区出土碧玉製平玉未成品実測図（3）（S＝2／3）

103－8・12・14－18は調整剥片である。板状に加工された剥片素材の周囲を打撃し、平面円形に近づける作業を行っている。碧玉と同様に打撃方向は一定しない。剥片素材が必ずしも板状でないために立面が三角形を呈するもの（103－15）も調整剥離が行われる。黒色泥岩そのものが板状に剥離する性質を持っているため、剥片素材への加工が容易だったと思われ、碧玉製平玉未成品の調整剥片に比べ薄いものが多い。



第101図　岩屋遺跡Ⅱ区出碧玉製平玉未成品実測図（4）
(S=2/3)

103－19～104－11は仕上げ研磨の工程のものである。103－19～29は剥離痕を残すもので、研磨を始めた段階のものと考えられる。両面の研磨はいずれも比較的進んでいるが、側面まで充分な研磨が及んでおらず、側面にのみ明瞭な剥離痕を残すもの（103－21・23）が見られる。逆に両面の研磨が進んだもの（103－27・104－1）は、側面がほとんど無くなっており、断面レンズ状に近い形状になる。ほぼ完成品と思われる104－10には、明瞭な面取りが施されており、研磨の最終工程で、周囲の面取りが行われるようである。

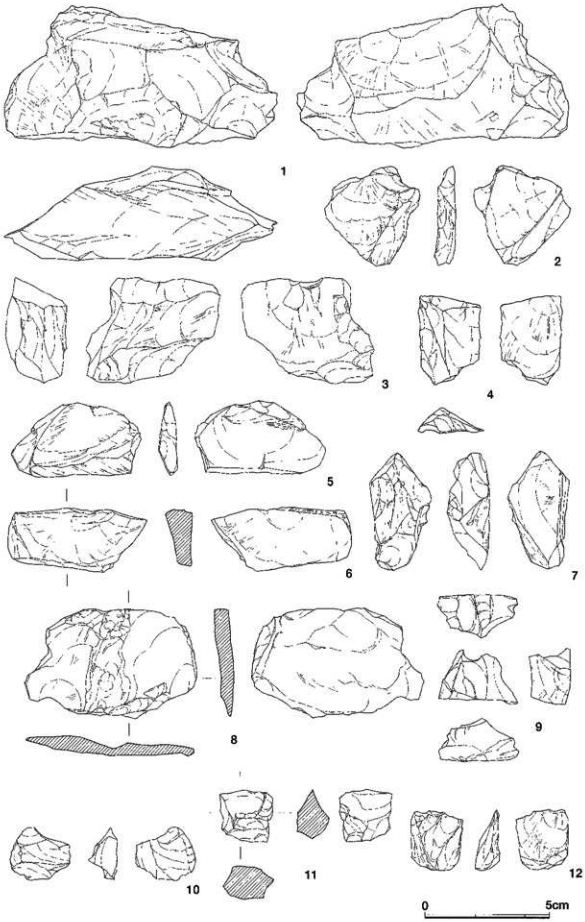
黒色泥岩の平玉製作は、①原石から大きな板状の石核を剥り出し、②その中ほどに剥離を行い薄くした後に剥片素材を折り取り、③その周囲を調整剥離し、④仕上げ研磨を行うという、碧玉とほぼ同様の工程が復元される。④仕上げ研磨については、a：両面を研磨して仕上げた後に、b：周囲の面取りを行っていることが想定された。

石英製平玉未成品　石英・水晶は、岩屋遺跡Ⅱ区で出土する玉材では大半を占めるものである。石英質の玉材としては、古墳時代以来透明度の高い水晶が多く使用されているが、岩屋遺跡Ⅱ区で出土するもののほとんどは不純物が多く白濁しており水晶とは呼べないものである。小さな剥片には透明度の高いものも多いことから、岩屋遺跡Ⅱ区で平玉に使用される石材には透明度の低いものをあえて選んでいるように思える。岩屋遺跡Ⅱ区で僅かに見られる水晶製品（109－1～5）は、いずれも平玉ではない。

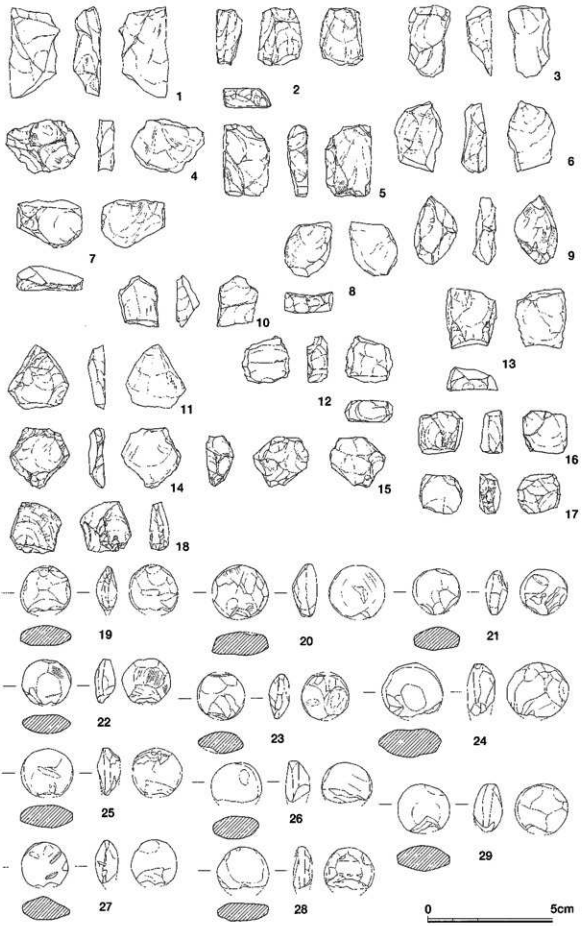
第105・106図には石英製平玉未成品を図示した。

105－1は石核である。1面に石英結晶の自然面を残しており、六角柱状になった結晶を縦方向に割ったものと思われる。剥片素材の多くにも自然面が残るものが多いが、いずれも側面に自然面を残しており、石英結晶の多面体を縦方向に割ることによって、薄い板状の剥片素材を剥り取ろうとしたものと思われる。

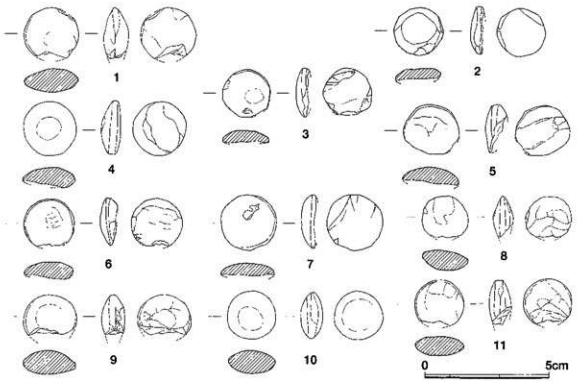
105－2～9は剥片素材と考えられるものである。長軸方向の側縁に自然面を残すものが多く見られるが、105－6・7は石英結晶の多面体を輪切りにするように分割した剥片素材も見られる。概ね断面台形を呈するもの（105－6～9）が多く、一面は最初の剥離によるポジ面と思われる大きな1枚の剥離面をそのまま残す。石英は碧玉や黒色泥岩に比べ割りにくかったと思われ、剥片素材の形状や大きさにばらつきが大きく、厚みのあるものが多い。



第102図　岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未成品実測図（1）（S=2／3）



第103図　岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未成品実測図（2）（S=2／3）



第104図　岩屋遺跡Ⅱ区出土黒色泥岩製平玉未成品実測図（3）（S=2／3）

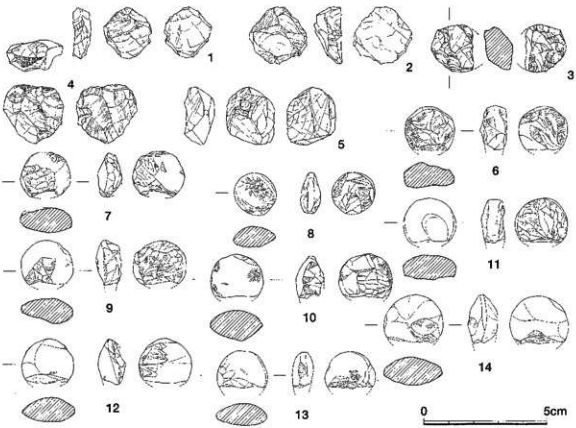
105－10～106－5は調整剥片と考えられるものである。剥片素材にほとんど手が加えられていないもの（105－10～25）からほぼ平面円形に近いもの（106－5・6）まで見られる。板状になった剥片素材にはポジ面をそのまま残すものが多く見られ、板状のものについてはポジ面側から周囲を削り落とし、平面円形に加工（105－20・21・106－1～3）している。平面円形に近い形状に加工された後には、飛び出した部分について敲打によって調整（106－1・4）される。石英の場合、調整剥離の最終段階は細かい敲打による調整を中心に行われるようであるが、その間の工程は必ずしも一定ではない様で、105－13・14には不定型な剥片素材に近い形状であるにも関わらず既に敲打痕が見られる。

106－6～13は仕上げ研磨の工程のものである。碧玉製平玉未成品と同様に調整剥離工程で薄くする努力がほとんど払われておらず、厚みのあるものが多い。また、黒色泥岩と同様に周囲の面取りは最終段階で行われるようである。

石英の平玉製作は、①結晶を縦方向に割り板状の石核を得、②その周囲を調整剥離し、③敲打によって形を整えた後に、④仕上げ研磨を行うという工程が復元される。石英の場合、石核と剥片素材の区別が明瞭でない。④仕上げ研磨については、a：両面を研磨して仕上げた後に、b：周囲の面取りを行う黒色泥岩と同様の工程が想定された。

砥石　第107～108図には砥石を図示している。未成品の総量は40kgを越えるが、砥石の数は多くはない。砂岩質の筋砥石（107－1～3・5・6）、棒状の桂化木（108－1・2）、硬質の石材を使用した砥石（107－4・108－3・4）、小型で不定型な砥石（108－5・6）が見られる。この内玉砥石と考えられるものは、砂岩質の筋砥石（107－1～3・5・6）、棒状の桂化木（108－1・2）である。

第105図　岩屋遺跡Ⅱ区出土石英製平玉未成品実測図（1）（S=2／3）



第106図　岩屋遺跡Ⅱ区出土石英製平玉未成品実測図（2）（S=2／3）

107－1～3・5・6は淡橙褐色を呈した砂岩質の脆い石材を使用した砥石である。図示したのは5点であるが、同様の石材の小片も多く出土しており、岩屋遺跡Ⅱ区で最も多い砥石である。現状では風化が進み、手を触れただけでも砂が散るほど劣化している。いずれも筋砥石として使用されており、107－6の図上右面は様々な方向に不規則に使用され、筋が一定しない。各砥石とも、筋のない部分も使用されているが、表面の劣化により使用方向は不明である。

107－4は明灰色を呈す硬質の石材を使用した砥石である。2面が破断面となっており、当初は人頭大の直方体に近い形状であったものと思われる。破断面以外の4面はいずれも平滑で所々に直線的な擦痕が見られる。擦痕の状況より玉砥石に使用されたとは思い難く、工具等の研磨に使用されたものと思われる。

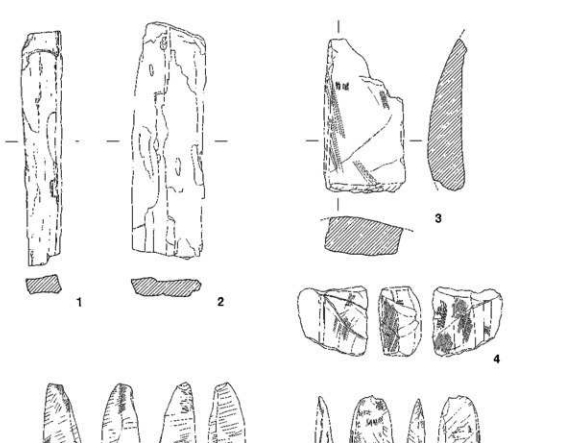
108－1・2は、桂化木である。表面は光沢が見られ平滑になっており、砥石として使用されたものと思われるが、明確な擦痕は残しておらず使用頻度は少ないものと思われる。

108－3は灰色を呈し多孔質の石材を使用した砥石の破片で、残存する使用面は1面のみである。金属製の刃物によると思われる深い擦痕が多く見られ、工具等の研磨に使用されたものと思われる。

108－4は青灰色で硬質の石材を使用した板状の砥石の破片と思われるもので、3面に使用面が残存する。工具等の研磨に使用されたものと思われる。

108－5・6は不定型な自然石を砥石として使用したものと思われ、いずれも各面に横方向の擦痕が残る。擦痕はいずれも平行した直線を主体としたもので、玉の研磨に使用されたものではない。

第107図　岩屋遺跡Ⅱ区出土砥石実測図（1）（S=1／3）



第108図　岩屋遺跡Ⅱ区出土砥石実測図（2）（S=1／3）

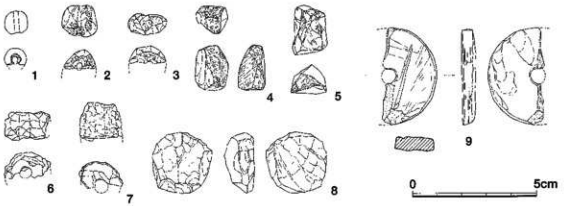
平玉以外の玉作関係遺物　第109図に示したものは、平玉以外の玉作関係遺物である。

109－1は水晶製の丸玉の完成品と考えられるものである。破断面は無色透明であるが、表面は細かい凹凸があり白く見える。穿孔後に破損したものと思われるが、穿孔方向は不明である。

109－2・3は水晶製の玉未成品で、穿孔されるものである。いずれも透明度の高い水晶を使用している。109－2は高さのある調整剥片の両面から穿孔するもので、ほぼ全面に敲打による細かい打痕が見られる。丸玉の未成品であろうか。109－3はやや扁平な調整剥片に両面から穿孔するものである。細かい調整剥離が中心となったもので、僅かに敲打痕が見られる。大型の臼玉か平玉の未製品と考えられるが、岩屋遺跡の平玉に穿孔するものは見られない。

109－4・5は水晶製の玉未成品である。結晶の角柱を縦に割ったものに敲打を加え調整を行っているものである。形状や大きさからナツメ玉であろうか。109－4には敲打痕が多く見られ、剥離の稜線を落としている一方、自然面も1面残している。109－5は敲打痕が少なく、比較的大きな剥離で留めている段階と思われる。いずれも透明度の高い水晶を使用している。

109－6・7は暗橙褐色を呈し軟質の玉材を使用した未成品である。破断面は白色に近い色調を呈しており獣骨等であろうか。いずれも外周は凹凸が多く見られ、自然面と思われる。棒状の素材



第109図　岩屋遺跡Ⅱ区出土玉関係遺物実測図（S=2／3）

を切断し、片面から穿孔したものと思われる。

109－8は半玉未成品と考えられるものであるが、石材は砂岩であろうか。目の粗い黒灰色の石材を使用した調整剥片段階のものである。研磨や穿孔の痕跡は見られない。岩屋遺跡での半玉未成品に同様の石材は無く、1点のみの検出である。

109－9は紡錘車である。光沢のある硬質の石材を使用しており滑石であろうか。片面は荒い研磨痕が無数に残るが、他面は板状に剥離した剥離面をそのまま使用しており研磨されていない。側面は円周方向に擦痕が多く残る。岩屋遺跡Ⅱ区の玉未成品の内、最も多く見られる半玉には穿孔が行われておらず、水晶製丸玉等（109－1～3）に伴うものであろうか。

石器　第110図には岩屋遺跡Ⅱ区で出土した石器を図示した。

110－1・2はナイフ形石器である。110－1はサヌカイトと考えられる安山岩製で、翼状剥片を使用している。先端の一部を欠く。国府型ナイフであろうか。110－2は先端の尖らないナイフ形石器である。赤みを帯びて透明感のある瑪瑙を使用している。先端を尖らせない平面長方形を呈するもので、上端に平坦な打面を持つ。刃部の上半は内湾しており、使用痕ではない細かい剥離がある。ブランディングは側縁は腹側から、基部は背側から行われる。

110－3は黒曜石製尖頭器である。先端と刃部の一部を欠くもので、舌はない。基部の形状が僅かに斜めになっており、破損に伴う再加工の可能性が高い。基部に僅かに擦痕が見られる。

110－5は黄褐色を呈す玉髄製の石器である。

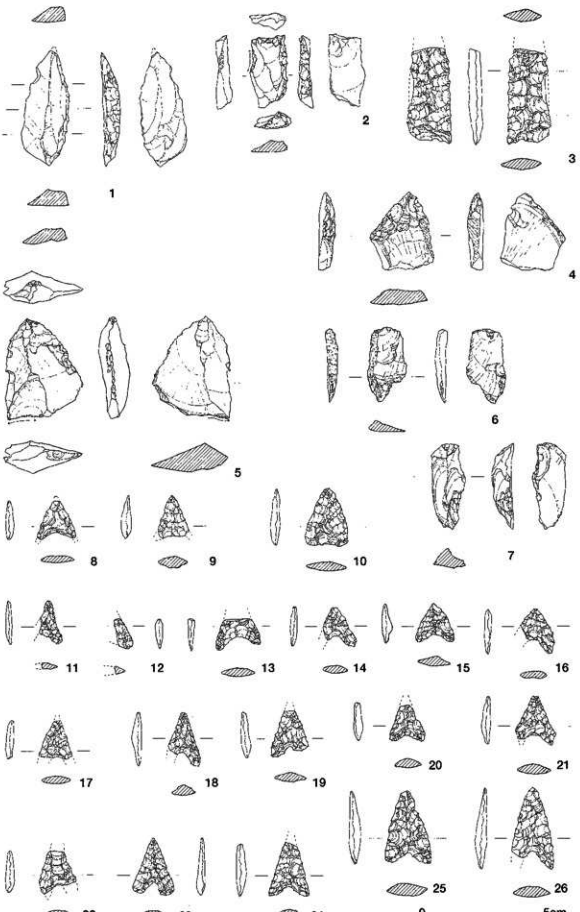
110－6は黒曜石製の二次加工剥片である。下端を刃部として二次加工しており、1側片に自然面を残す。110－7も同様のものである。

110－4は黒曜石製の石鏃未成品である。刃部の片面の成形を終えた段階で、他面には自然面を残している。

110－8・9は安山岩製の石鏃である。110－8は灰色に風化しており、各端部を欠く。

110－10～26は黒曜石製の石鏃である。110－22～26はやや大型のものである。

110－1・2は旧石器時代のものであり、110－5も玉髄製であることから旧石器時代のものである可能性がある。また、110－3は縄文草創期のものであろうか。



第110図　岩屋遺跡Ⅱ区出土石器実測図（S=2／3）

岩屋遺跡出土土器　観察表

挿図番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・胎土	焼成	備考
10−1	皿	(15.0)	(8.0)	(3.0)	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ヨコナデ	SK−06	淡灰色 2mm以下の砂粒を含む	やや不良	須恵器
2	壺 (口縁部)				外面：回転ナデ、波状文8条 内面：回転ナデ	SK−06	青灰色 1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	須恵器
17−1	坏 (蓋)	(13.5)		4.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.1 970612	淡灰白色 1mm以下の砂粒をわずかに含む	やや不良	須恵器
2	坏 (身)	(12.0)		4.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ヨコナデ	2号墳　石室内　No.2 970708	淡白灰褐色 1mm以下の砂粒を含む	不良	須恵器
3	坏 (蓋)	(14.0)		4.75	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.6 970612	灰褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	不良	須恵器
4	坏 (身)	11.6		5.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.7 970612	白灰褐色 2mm以下の砂粒を多く含む	やや不良	須恵器
5	坏 (蓋)	13.3		4.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.7 970612	淡灰褐色 1mm以下の砂粒を少量含む	やや不良	須恵器
6	坏 (蓋)	11.8		3.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.9 970612	淡灰色 2mm以下の砂粒を含む	良好	須恵器
7	坏 (蓋)	(14.6)		3.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.3 970612	(外面) 淡灰色 (内面) 青灰色 1mm〜2mmの砂粒を少量含む	良好	須恵器
8	坏 (蓋)	(13.6)		4.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.12 970708	暗灰色 2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	須恵器
9	坏 (蓋)	14.3		4.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.15 970708	(外面) 暗灰色 (内面) 青灰色 1mm〜2mmの砂粒を多く含む	良好	須恵器
10	坏 (蓋)	(14.1)		5.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.17 970612	淡灰褐色 2mm以下の砂粒を少量含む	良好	須恵器
11	甕				外面：平行タタキ 内面：ナデ	2号墳　石室内　No.5	暗灰色 砂粒は含まない	良好	須恵器
12	短頸壺	7.7		10.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.11 970612	灰黒色 2mm以下の砂粒を少量含む	良	須恵器
13	坏 (身)	12.0		4.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	2号墳　石室内　No.4 970612	淡灰色 1mm程度の砂粒をわずかに含む	良	須恵器
14	坏 (身)	12.0		5.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2号墳　石室内　No.13 970612	青灰色 3mm以下の砂粒をわずかに含む	良	須恵器
15	坏 (身)	11.3		4.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2号墳　石室内　No.14 970612	青灰色 1mm以下の砂粒を多く含む	良好	須恵器
16	坏 (身)	12.8		5.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2号墳　石室内　No.16 970612	青灰色 3mm以下の砂粒をわずかに含む	良	須恵器
17	高坏	11.3	9.3	15.5	外面：櫛描波状文、カキメ、ナデ 内面：ナデ	2号墳　石室内　No.10 970612	青灰色 3mm程度の砂粒を少量含む	良好	須恵器 スカシ3方あり
18	短頸小型壺	(9.2)	9.3	11.5	外面：カキメ後回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面回転ナデ	2号墳　石室外　墓道埋土 No.71, 72　970514	青灰色 1mm程度の砂粒を少量含む	不良	須恵器
21−1	坏 (蓋)	11.9		3.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK−01　No.56, 57 970512	(外面) 淡黄灰褐色 (内面) 灰褐色 1mm以下の砂粒を少量含む	良	須恵器
2	坏 (蓋)	14.0		5.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK−01　No.5	淡灰褐色 1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	須恵器
3	坏 (蓋)	14.6		5.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK−01　No.6 970528	淡灰黄色 1mm以下の砂粒を少量含む	不良	須恵器
4	坏 (身)	13.1		5.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK−01　No.4 970528	淡白灰色 2mm以下の砂粒を少量含む	不良	須恵器
5	碗	9.2		4.0	外面：手づくね 内面：手づくね	SK−01　No.1 970528	淡褐色 3mm以下の砂粒を多く含む	良	土師器
6	小型壺	6.2		5.0	外面：手づくね 内面：手づくね	SK−01　No.2 970526	淡褐色 2mm以下の砂粒を少量含む	良	土師器
7	短頸壺	(9.2)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK−01　No.3	青灰色 2mm以下の砂粒を多量に含む	良好	須恵器
8	小型壺	(7.0)		7.05	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK−01　黒褐色土 970516	暗灰色 3mm以下の砂粒を多く含む	良	須恵器
24−1	坏 (蓋)	(11.9)			外面：回転ナデ、沈線 内面：回転ナデ	3号墳　墳丘表土　PNo.214 970327	灰色 砂粒をほとんど含まない	良好	須恵器
2	坏 (蓋)	(12.9)			外面：回転ナデ、沈線 内面：回転ナデ	3号墳　墳丘 970609	灰色 1mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	良好	須恵器
25	横瓶	(14.8)	【胴径】 40.2	38.5	外面：回転ナデ、平行タタキ後カキメ 内面：回転ナデ、当て具痕をなで消す	4号墳	暗青灰色 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	良好	須恵器
29−1	坏 (蓋)	(12.8)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4号墳　墳丘直下方、石室下方 970606〜970618	淡灰色 1mm程度の砂粒を多く含む	良好	須恵器
2	坏 (蓋)	(13.8)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4号墳　墳丘西　PNo.795 970723	灰色 1mm以下の白色の砂粒を少し含む	良好	須恵器
3	坏 (蓋)	(12.8)		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4号墳　南側周溝　PNo.387 970625	暗灰色 2mm以下の砂粒を少量含む	良	須恵器
4	坏 (蓋)	12.9		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4号墳　墳丘 970616〜970618	暗灰色 2mm以下の砂粒を少量含む	良	須恵器
5	坏 (蓋)	(15.7)		3.35	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4号墳　墳丘西側　赤色土、3層内 970606	淡灰色 1mm程度の砂粒を多く含む	良好	須恵器
6	坏 (蓋)	(6.4)		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4号墳　墳丘内側　PNo.3126, 3128	(外面) 灰色 (内面) 淡灰色 1mm程度の砂粒を多く含む	良好	須恵器
7	坏 (身)	(11.6)		(3.5)	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4号墳　墳丘　西側赤色土 970621	灰褐色 1mm程度の砂粒を少量含む	良好	須恵器
8	坏 (身)	11.0		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4号墳　北側墳丘　PNo.4008 970606	青灰色 1mm以下の砂粒を多く含む	良好	須恵器
9	坏 (身)	(13.0)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4号墳　墳丘　PNo.322 970617	青灰色 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	須恵器
10	坏 (身)	(6.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4号墳　墳丘　PNo.322 970617	淡青灰色 1mm以下の砂粒を少し含む	良好	須恵器
11	坏 (身)				外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4号墳　すそ北側 970714, 971023	淡灰色 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	須恵器
31−1	坏 (蓋)	(6.5)		4.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SX−01　黒色土 970820	青灰色 1mm以下の砂粒を少量含む	良好	須恵器
2	坏 (蓋)	(13.5)		3.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SX−01　黒色土 970820	淡灰色 1mm〜2mmの砂粒を多量に含む	良好	須恵器
3	坏 (身)	(11.0)		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SX−01　黒色土　PNo.4043, 4056 970820	灰色 1mm〜2mmの砂粒を少量含む	良好	須恵器
4	坏 (身)	(11.4)		3.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SX−01　黒色土　PNo.4064, 4129 970820	淡灰色 1mm程度の砂粒を少量含む	良好	須恵器
5	坏 (蓋)	(11.6)		3.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	SX−01　黒色土　PNo.4048〜4074 970820	淡青灰色 1mm程度の砂粒を多く含む	良好	須恵器
6	甕	【頸径】 12.0	【胴径】 26.0	【現高】 26.6	外面：回転ナデ、平行タタキ後カキメ 内面：同心円タタキ	SX−01　黒色土　PNo.4048, 4065他 970820〜970821	淡青灰色 1mm以下の砂粒をやや含む	やや不良	須恵器
7	広口壺	10.0		10.0	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SX−01 970820	淡黄灰色 2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	須恵器
34−1	坏 (蓋)	13.2		3.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳　1号石棺　No.11 971206	暗灰色 2mm以下の砂粒を含む	良	須恵器
2	坏 (身)	11.5		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳　1号石棺　No.10 971205	(外面) 青灰色 (内面) 暗灰色 1mm程度の砂粒を少量含む		須恵器
3	坏 (蓋)	13.0		3.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳　1号石棺　No.8 971205	灰色 2mm以下の砂粒を少量含む	良	須恵器
4	坏 (身)	11.9		3.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳　1号石棺　No.7 971205	灰色 2mm以下の砂粒を少量含む	良好	須恵器
5	𤭯	(11.3)		14.0	外面：突帯、回転ヘラケズリ、沈線、刺突文 内面：回転ナデ	5号墳　1号石棺　No.9 971205	青灰色 1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	須恵器
6	坏 (蓋)	13.2		3.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳　1号石棺　No.2 971205	青灰色 2mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	須恵器
7	短頸壺	4.8		14.4	外面：回転ナデ、タタキ痕 内面：回転ナデ、ナデ痕	5号墳　1号石棺　No.3 971205	淡黄灰色 2mm程度の砂粒を少量含む	良好	須恵器

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・胎土・焼成	備考
44-8	坏(身)	11.5		3.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 1号石棺 No.4 971205	青灰色 良好 1mm程度の砂粒をごくわずかに含む	須恵器
9	坏(蓋)	13.3		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 1号石棺 No.5 971205	灰色 良 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
10	坏(身)	11.9		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 1号石棺 No.6 971205	灰色 良 1mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
49-1	坏(身)	12.1		3.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 2号石棺 No.6 971205	青灰色 良好 1mm程度の砂粒を多量に含む	須恵器
2	坏(身)	12.2		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 2号石棺 No.5 971205	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
3	坏(身)	11.3		3.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 2号石棺 No.4 971205	青灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
4	坏(身)	12.1		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 2号石棺 No.2 971205	(外面)淡灰色 (内面)淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
5	坏(蓋)	13.6		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	5号墳 2号石棺 No.3 971205	淡灰色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
6	提瓶	11.5		28.1	外面：タタキ後カキメ、カキメ、回転ナデ 内面：ナデ消後回転ナデ、回転ナデ	5号墳 2号石棺 No.1 971205	淡灰色 良好 1mm～2mmの砂粒を多く含む	須恵器
53-1	坏(蓋)	13.2		3.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳 3号石棺 No.2 971205	淡灰色 良好 2mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
2	坏(蓋)	11.7		3.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳 3号石棺 No.1 971205	(外面)淡灰色 (内面)淡黄灰色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
3	坏(身)	12.4		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳 3号石棺 No.3 971205	淡灰色 良好 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
4	坏(身)	11.7		3.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5号墳 3号石棺 No.4 971205	青灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
36	甕			50.0	外面：平行タタキ、波状文、カキメ 内面：回転ナデ、同心円タタキ	SK-05	(外面)暗青灰色 (内面)淡青灰色 良好 0.5mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
59-1	直口壺	8.9	3.7	10.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK-03 No.2 970912	淡灰色 やや不良 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
2	坏(身)	11.3		4.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-03 No.1 970912	淡灰色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	須恵器
61-1	坏(蓋)	13.2		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK-05 No.2 971025	(外面)黄灰色 (内面)淡黄灰色 良好 1.5mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
2	坏(身)	10.5		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK-05 No.1 971025	淡黄灰色 良好 1mm程度の砂粒を多く含む	須恵器
3	坏(蓋)	(14.0)		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-05 3層 PNo.7247、7251 971022	(外面)淡灰色 (内面)灰色 やや不良 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
4	高坏	(13.5)		(12.8)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-05 PNo.7251、7252 971022	淡灰色 不良 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
5	壺	5.0		11.1	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-05 PNo.7216～7254	淡灰色 不良 3mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
64-1	坏(蓋)	12.6		4.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-07 No.1 971225	淡灰色 良 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
2	坏(蓋)	11.4		3.9	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-07 No.2 971225	淡灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
3	直口壺	8.8		10.7	外面：カキメ 内面：ナデ、ヘラケズリ	SK-07 No.3 971225	淡黄褐色 良 1mm～2mmの砂粒を少量含む	土師器 朱塗り
66-1	高坏	15.1			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	SK-08 No.1 971025	淡灰色 不良 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
2	坏(蓋)	(13.7)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	SK-08 3層 PNo.7236	灰褐色 良 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
72-1	坏(蓋)	13.0		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.6 971205	暗灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
2	坏(蓋)	(13.7)		5.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.10 971205	淡灰褐色 不良 2mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
3	坏(身)	12.2		4.7	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.5 971205	淡灰褐色 不良 3mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
4	坏(身)	11.5		4.2	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.4 971205	暗青灰色 良好 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
5	坏(身)	(11.7)		4.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.7 971205	暗青灰色 良好 2mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
6	坏(蓋)	12.9		4.3	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.3 971205	暗青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
7	坏(身)	11.5		2.05	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.2 971205	暗灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
8	坏(蓋)	ゆがみある為不明		4.4	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.8 971205	暗灰色 良好 2mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
9	坏(身)	ゆがみある為不明		4.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺内 No.9 971205	暗青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
10	小型甕	9.0		9.6	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ、ヘラケズリ	6号墳石棺内 No.10 971205	淡赤褐色 不良 3mm以下の砂粒を多く含む	土師器
11	短頸壺				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	6号墳石棺外 No.11 971205	淡灰色 不良 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
75	甕(胴部)				外面：タタキ 内面：アテ具痕	SK-06	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
84	砥石	【長さ】22.5	【幅】19.6	【厚さ】8.4		不明	淡黄白色	石製品
88-1	壺				マメツ	不明 970516	明褐色 やや不良 1mm程度の白色、赤色の砂粒を少し含む	弥生土器
2	器台	(26.0)			マメツ	不明 970902	黄褐色 良 1mm～2mmの砂粒を少量含む	弥生土器
89	坏(蓋)	(13.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	不明	青灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
90-1	坏(蓋)	(16.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	不明 970922	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
2	壺(底部)		(12.0)		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	不明 970929	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	須恵器
3	坏(身)	(11.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	不明 971110	淡青灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
4	甕(口縁部)	(20.4)			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	不明 970929	淡赤褐色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
5	坏(底部)	—	(12.0)		マメツ	不明 970910	黄褐色 良 1mm以下の砂粒をわずかに含む	土師器
91-1	坏	(3.2)			外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	加工段4 PNo.7134 970930	茶褐色 良好 1mm程度の白色の砂粒を少量含む	須恵器
2	杯(高台付)	(14.8)			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	加工段4 PNo.7035 970929	淡黄褐色 良好 1mm程度の黒色の砂粒を少量含む	土師器
3	皿(口縁部)	(13.0)			外面：ヨコナデ 内面：マメツ	加工段4 PNo.7058 970929	(外面)黄橙色 (内面)淡黄色 良 1mm～2mmの砂粒を多く含む	土師器
4	甕(口縁部)	(24.0)			外面：マメツ 内面：ヘラケズリ	加工段4 PNo.7068、7079 970929	淡赤褐色 良好 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器
5	甕(口縁部)	(30.0)			マメツ	加工段4 PNo.2077 970929	赤褐色 良好 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器
6	鉢				外面：タタキ 内面：アテ具痕	加工段4 PNo.7039～7058 970929	暗黄灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
92-1	移動式 竈(焚口上側)				マメツ	加工段4 PNo.1791 970706	淡黄褐色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	土師器
2	移動式 竈(体部)				マメツ	加工段4	淡橙褐色 良 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	土師器
3	移動式 竈(体部)				マメツ	加工段4 PNo.7078 970929	淡橙褐色 良好 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器
4	移動式 竈(体部)				マメツ	加工段4 PNo.7057 970929	淡橙褐色 良好 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器

挿図番号	器 種	法量(cm) 口 径	底 径	器 高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・胎土・焼成	備 考
92−5	移動式 竈 (体部)				マメツ	加工段4 PNo.7059 970929	淡褐色 良好 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器
6	移動式 竈 (体部)				マメツ	加工段4 PNo.7073 970929	(外面) 暗褐色 (内面) 淡橙褐色 良 1mm～2mmの砂粒を多量に含む	土師器
7	移動式 竈 (体部)				マメツ	加工段4 970908	淡橙褐色 良好 1mm程度の砂粒を多量に含む	土師器
93−1	甕 (口縁部)	(16.6)			外面：ヨコナデ、ハケメ 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	S3−B 焼土炭混層 PNo.6588 970909	(外面) 淡橙褐色 (内面) 淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を多量に含む	土師器
2	壺				外面：マメツ 内面：ヘラケズリ、ナデ	S3−B 焼土炭混層 PNo.6588 970909	暗黄褐色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	土師器
3	甕 (口縁部)	(28.4)			外面：ヨコナデ 内面：マメツ	SK−01 PNo.7028 970930	暗黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を多く含む	土師器
4	甑 (取手)				マメツ	上坑 焼土炭混層 970726	淡黄褐色 良好 1mm以下の砂粒を多く含む	土師器
5	甑 (取手)				マメツ	下集中	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を多く含む	土師器
6	甑				マメツ	不明	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を多く含む	土師器
94−1	蓋 (輪状つまみ)				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	不明	青褐色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
2	蓋 (輪状つまみ)				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2段内 北側斜面 970527	青灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
3	蓋 (輪状つまみ)				外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	3B 西側すそ部 970801	淡青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
4	蓋 (輪状つまみ)	(14.8)		2.6	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	3B 西側すそ部 970801	暗灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
5	蓋	(13.8)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S4−B 地山上層 970918	灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
6	蓋	(16.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	北側斜面 すそ部 焼土炭混層	青灰褐色 良好 2mm以下の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
7	蓋	(14.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	北内側 焼土炭混層 PNo.6571 970901	青灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
8	蓋	(15.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S2−B 焼土炭混層 970907	青灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒を少量含む	須恵器
9	蓋	(9.8)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	JT−南側	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
10	蓋	(19.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	サブトレンチ 970609	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
11	蓋	(15.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S2−B 焼土炭混層 970908	赤褐色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
12	蓋 (輪状つまみ)	(15.2)		2.8	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	S2−B 焼土炭混層 970708	淡灰色 良好 2mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
13	蓋 (輪状つまみ)	(15.2)		2.5	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	不明	青灰色 良好 2mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
14	蓋	(15.4)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	サブトレンチ 黒色土 970512	青灰色 良好 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
15	蓋	(18.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S1−B 焼土炭混層 PNo.6463 970902	淡褐色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
16	蓋 (輪状つまみ)				外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	SI−04 直上 PNo.6909 970929	(外面) 青灰色 (内面) 赤褐色 良好 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
17	宝珠つまみ				外面：ナデ 内面：ナデ	S2−B PNo.880 970723	淡褐色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
18	蓋	(16.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S3−B アゼ 970922	灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
19	坏	(13.6)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S3−B 西周り 970801	暗灰褐色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
20	坏	(9.8)	(7.2)	(3.7)	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	S2−B 3層 PNo.552 970725	青灰色 良好 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
21	坏	(12.8)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	トレンチ4 表土中 970516	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
22	坏	(12.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	表土 970509	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
23	坏	(11.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	北側JTぞい 焼土炭混層 970909	淡黄灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
24	坏	(11.0)			外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	北 3層内 PNo.479 970218	淡灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
25	坏		(6.8)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	西側下降斜面 970522	淡灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒を少量含む	須恵器
26	坏	(11.6)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	北側JTぞい 焼土炭混層 970909	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
27	坏	(13.4)	(5.0)	4.2	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	不明	淡灰色 良好 2mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
28	坏	(13.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南4−B 3層 PNo.1837 970729	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
29	坏	(13.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	南4−B 3層 PNo.1874 970729	淡青灰色 良好 2mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
30	坏	(13.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	JT東側 SI A アゼ	灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
31	坏		(7.6)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	トレンチ 表土中 970516	青灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
32	坏		(8.0)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	S1−B 3層 PNo.5268 970826	青灰色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	須恵器
33	坏		7.2		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	北 3層 PNo.308 970718	青灰色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
34	坏	(16.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S1−B 焼土炭混層 PNo.6454 970902	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
35	坏	(15.5)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	西側下降斜面 970523	(外面) 青灰色 (内面) 淡灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
36	坏	(5.0)			外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	S3−B 3層 PNo.5101 970826	淡青灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
37	坏		(9.2)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	S3−B 西側すそ部 970801	淡青灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒を多く含む	須恵器
38	坏		9.8		外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	トレンチ2 地山直上 PNo.66、67 970514	青灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
39	坏		(11.2)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	3層内 970516	青灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒を少量含む	須恵器
40	坏	(14.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S2−B 3層 PNo.498 970826	淡青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
41	坏	(14.2)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S3 B 西 包含層 970828	青灰色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
95−1	坏 (高台付)	(11.8)	4.7	(5.8)	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	サブトレンチ内 黒色土 970512	青灰色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
2	坏 (高台付)				外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	サブトレンチ内 970509	青灰色 良好 3mm以下の砂粒を多く含む	須恵器
3	坏 (高台付)		7.0		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	トレンチ3 地山直上 PNo.69 970524	(外面) 青灰色 (内面) 褐色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
4	坏 (高台付)		(8.2)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	西側下降斜面 970523	青灰色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
5	坏 (高台付)		(8.8)		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	北側斜面 2層 970527	灰色 良好 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	須恵器
6	坏 (高台付)				外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	S2−B 焼土炭混層 PNo.6636 970724	灰色 良好 2mm以下の白色の砂粒を少量含む	須恵器
7	皿	(16.6)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	トレンチ 表土中 970509	淡青灰色 良好 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	須恵器

挿図番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	出土場所・年月日	色調・胎土・焼成	備考
95−7	皿	(16.6)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	トレンチ 表土中 970509	淡青灰色 良好 1mm以下の砂粒をごくわずかに含む	須恵器
8	皿	(9.7)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S3−B 西側すそ部 970809	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
9	皿 (高台付)	(21.9)	(17.8)	3.2	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	S2−B 南 焼土炭混層 970828	淡褐色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	須恵器
10	皿 (高台付)		(15.0)		外面：回転ナデ 内面：マメツ	南4−B すそ部 970818	青灰色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	須恵器
11	皿 (高台付)	(23.0)	(19.8)	3.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ、ナデ	不明	青灰色 良好 1mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
12	坏 (脚台部)		(8.8)		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	不明	淡灰色 良好 砂粒を含まない	須恵器
13	盤 (長脚付)				外面：回転ナデ、沈線1条 内面：ナデ	S3−B 西側すそ部 970801	淡青灰色 良好 2mm以下の砂粒を多量に含む	須恵器
14	瓶	(8.4)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	不明 970516	暗黒褐色 良好 1mm程度の白色の砂粒を少量含む	須恵器
15	瓶	(8.6)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	S3−B アゼ 焼土炭混層 970924	淡青灰色 良好 2mm以下の砂粒をわずかに含む	須恵器
16	壺 (口縁部)	(15.0)			外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	北側斜面 970905	暗灰色 良好 1mm程度の白色の砂粒をわずかに含む	須恵器
17	壺 (底部)		7.4		外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ、ナデ	南1−B 3層 P№1833〜1836 970729	淡青灰色 良好 2mm以下の砂粒を多量に含む	須恵器
18	甕 (胴部)				外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	不明	青灰色 良好 1mm程度の砂粒を多量に含む	須恵器
19	甕または鉢 (底部)		(25.6)		外面：平行タタキ後ヨコ方向カキメ、ナデ 内面：同心円文押え	不明 970730	淡青灰色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	須恵器
96−1	坏 (高台付)		(5.3)		マメツ	北側 焼土炭混層下 970911	明褐色 やや不良 1mm以下の砂粒を少量含む	土師器
2	坏 (高台付)		7.0		外面：ヨコナデ 内面：マメツ	S2−B 3層 P№9409 970701	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
3	坏 (高台付)				マメツ	北側斜面 上部 焼土炭混層 970908	淡黄色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
4	坏		(3.6)		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	S1−B焼土炭混層 970829	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒をわずかに含む	土師器
5	坏		(5.0)		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	S1−02 P№7143 970930	赤褐色 良好 2mm以下の砂粒を少量含む	土師器
6	坏		5.8		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	北側斜面 地山直上 970703	淡赤褐色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
7	坏		(5.2)		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	S3−B 3層 P№5062 970821	淡灰褐色 良 1mm程度の砂粒をわずかに含む	土師器
8	坏		(5.6)		外面：回転糸切り、ナデ 内面：ナデ	S1−B焼土炭混層 P№6456 970902	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
9	坏		6.0	2.3	マメツ	表土中 P№6364 970908	淡黄褐色 良好 1mm以下の白色の砂粒を少量含む	土師器
10	坏		(6.2)		外面：マメツ 内面：ナデ	北側 焼土炭混層下 970911	淡黄褐色 良好 1mm程度の砂粒を少量含む	土師器
11	坏		(5.8)		マメツ	表土中 P№6334 970908	淡褐色 良好 1mm以下の砂粒を少量含む	土師器

Ⅰ区　金属製品　観察表

単位（cm）

挿図番号	器種	全長	刃部長	刃幅	茎部長	刃部厚	茎厚
18−1	鉄鏃	11.0	5.3	2.7	0.7	0.2	0.7
2	刀子	6.8	2.7	1.4	0.9	0.7	0.4
3	鉄鏃	13.4	1.6	1.0	0.6	0.2	0.3
4	刀子	5.7	4.0	1.3	0.6	0.3	0.4
5	鉄鏃	5.0	3.0	0.7	0.3	0.3	0.4
6	鉄鏃	6.7	1.3	1.0	0.6	0.2	0.3
7	鉄鏃	7.0	3.7	0.7	0.5	0.2	0.2
45−1	棒状工具	10.9					
2	鉄鏃	12.9	5.2	1.2	0.5	0.4	0.2
3	鉄鏃	11.4	4.3	1.5	0.6	0.5	0.4
4	鉄鏃	11.0	4.2	1.5	0.6	0.5	0.2
50−1	耳環	【長径】3.0	【短径】2.7	【厚さ】0.5			
2	耳環	【長径】3.1	【短径】2.6	【厚さ】0.6			
62−1	平根式鉄鏃	8.5	0.7	2.6	0.7	0.3	0.4
2	平根式鉄鏃	9.6	5.5	2.5	0.6	0.2	0.4

Ⅱ区　金属製品　観察表

単位（cm）

挿図番号	器種	全長	刃部長	刃幅	茎部長	刃部厚	茎厚
97−1	不明	3.5					
2	不明	10.5					

Ⅰ区　玉類観察表

単位：(cm)

挿図番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	厚さ	出土場所・年月日
19−1	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.60	0.20	0.45	2号墳　石室内　PNo.250
2	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.60	0.25	0.45	2号墳　石室内　PNo.250
3	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	—	0.20	0.45	2号墳　石室内　PNo.252
4	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.60	0.20	0.40	2号墳　石室内　PNo.253
5	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.50	0.50	0.25	0.50	2号墳　石室内　PNo.254
6	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.20	0.40	2号墳　石室内　PNo.255
7	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.50	0.15	0.40	2号墳　石室内　PNo.257
8	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.60	0.20	0.35	2号墳　石室内　PNo.258
9	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.35	0.15	0.40	2号墳　石室内　PNo.283
10	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.15	0.50	2号墳　石室内　PNo.287
11	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.20	0.50	2号墳　石室内　PNo.290
12	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.35	0.15	0.45	2号墳　石室内　PNo.291
13	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.20	0.45	2号墳　石室内　PNo.292
14	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.45	0.15	0.40	2号墳　石室内　PNo.293
15	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.45	0.20	0.40	2号墳　石室内　PNo.294
16	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.40	0.15	0.35	2号墳　床下の土フルイ
17	ガラス小玉	ガラス	黄緑色	0.50	0.50	0.15	0.15	2号墳　床下の土フルイ
18	管玉	碧玉	淡緑色	1.60	0.50	0.15	0.15	2号墳　床下の土フルイ
19	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.50	0.20	0.20	2号墳　石室内フルイ
20	ガラス小玉	ガラス	青色	0.65	0.60	0.20	0.20	2号墳　石室内フルイ
21	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.40	0.20	0.20	2号墳　石室内フルイ
22	ガラス小玉	ガラス	暗灰青色	0.60	0.60	0.15	0.15	2号墳　石室内フルイ
23	ガラス小玉	ガラス	青色	0.55	0.55	0.15	0.15	2号墳　石室内フルイ
24	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.55	0.25	0.25	2号墳　石室内フルイ
25	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.20	0.45	2号墳　石室内フルイ
26	ガラス小玉	ガラス	青色	0.55	0.50	0.15	0.40	2号墳　石室内フルイ
27	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.55	0.20	0.45	2号墳　石室内フルイ
28	ガラス小玉	ガラス	青色	0.80	0.70	0.20	0.50	2号墳　石室内フルイ
29	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.50	0.10	0.40	2号墳　石室内フルイ
30	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.45	0.10	0.35	2号墳　石室内フルイ
31	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.50	0.20	0.30	2号墳　石室内フルイ
32	ガラス小玉	ガラス	青色	0.45	0.40	0.15	0.30	2号墳　石室内　フルイ土中
33	ガラス小玉	ガラス	暗灰青色	0.55	0.55	0.20	0.40	2号墳　石室内フルイ
34	ガラス小玉	ガラス	暗灰青色	0.55	0.55	0.10	0.50	2号墳　石室内フルイ
35	ガラス小玉	ガラス	灰青色	0.60	0.50	0.30	0.30	2号墳　石室内フルイ
36	ガラス小玉	ガラス	青色	0.55	0.50	0.10	0.40	2号墳　石室内フルイ
30−1	ガラス小玉	ガラス	青色	0.80	0.70	0.15	0.40	4号墳　墳丘西側2層内　PNo.361
2	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.65	0.15	0.50	4号墳　墳丘西側2層内　PNo.362
3	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.60	0.20	0.50	4号墳　石室前方　崩落土フルイ
4	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.65	0.15	0.50	4号墳　石室前方　崩落土フルイ
5	ガラス小玉	ガラス	青色	0.70	0.70	0.15	0.50	4号墳　石室前方　崩落土フルイ
6	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.55	0.20	0.30	4号墳　石室前方　崩落土フルイ
32−1	不明	碧玉	暗緑色	4.00	1.50	0.30	1.00	SX−01　PNo.4036
2	不明	碧玉	淡黄緑色	3.00	1.70	0.20	0.50	4号墳　北側下方　表土下
46−1	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.35	0.15	0.10	5号墳　1号石棺　No.15
2	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　No.16
3	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　No.17
4	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.35	0.35	0.15	0.30	5号墳　1号石棺　No.18
5	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.40	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　No.19
6	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.40	0.15	0.20	5号墳　1号石棺　No.20
7	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7295
8	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7296
9	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.9297
10	ガラス小玉	ガラス	青色	0.35	0.30	0.20	0.25	5号墳　1号石棺　PNo.7298
11	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.40	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7301
12	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.40	0.15	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7302
13	ガラス小玉	ガラス	青色	0.35	0.35	0.15	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7303
14	ガラス小玉	ガラス	青色	0.35	0.35	0.15	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7301
15	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.40	0.15	0.30	5号墳　1号石棺　PNo.7303
16	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.40	0.15	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7298
17	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.40	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7301
18	ガラス小玉	ガラス	青色	0.40	0.35	0.10	0.30	5号墳　1号石棺　PNo.7302
19	ガラス小玉	ガラス	青色	0.35	0.30	0.10	0.25	5号墳　1号石棺　PNo.7303
20	ガラス小玉	ガラス	青色	0.30	0.30	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7301
21	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.25	0.10	0.20	5号墳　1号石棺　PNo.7303
22	ガラス小玉	ガラス	青色	0.30	0.30	0.10	0.30	5号墳　1号石棺　PNo.7298
23	ガラス小玉	ガラス	青色	0.30	0.30	0.10	0.15	5号墳　1号石棺　女性頭骨左側付着
24	ガラス小玉	ガラス	青色	0.50	0.40	0.15	0.40	5号墳　1号石棺　No.22
25	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.60	0.20	0.40	5号墳　1号石棺　No.23
26	ガラス小玉	ガラス	青色	0.60	0.60	0.20	0.40	5号墳　1号石棺　No.21
27	丸玉	瑪瑙	淡褐色	1.20	0.90	0.30	0.90	5号墳　1号石棺　No.24
54−1	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.30	5号墳　3号石棺　No.5
2	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.30	5号墳　3号石棺　No.6
3	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.10	0.30	5号墳　3号石棺　No.7
4	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.40	0.35	0.15	0.20	5号墳　3号石棺　No.8
5	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.30	0.30	0.15	0.30	5号墳　3号石棺　1号人骨床石側壁間内
6	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.35	0.35	0.15	0.30	5号墳　3号石棺　1号人骨周辺
7	ガラス小玉	ガラス	淡青緑色	0.35	0.30	0.15	0.30	5号墳　3号石棺　1号人骨周辺

Ⅱ区　玉類観察表

単位：(cm)

挿図番号	器種	材質	制作工程	長さ	幅	厚さ	出土場所・年月日			
98−1	平玉	碧玉	石核	5.8	3.5	3.0	S−1−A	3層	PNo3759	970811
2	平玉	碧玉	剥片素材	4.7	3.3	0.9	V区	縦断トレンチ		970509
3	平玉	碧玉	剥片素材	3.5	2.9	1.5	SI−04床上		PNo6907	970929
4	平玉	碧玉	剥片素材	3.1	2.9	1.8	V区	縦断トレンチ		970509
5	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	2.2	1.8	S−2−B	3層	PNo6203	970829
6	平玉	碧玉	剥片素材	2.7	1.8	1.5	S−2−B	3層	PNo3607	970829
7	平玉	碧玉	剥片素材	2.9	2.5	1.5	南4−B	すそ部		970818
8	平玉	碧玉	剥片素材	2.5	1.9	0.9	S−2−B	3層	PNo3609	970808
9	平玉	碧玉	剥片素材	3.0	2.2	1.0	SI−01	床直上	PNo1480	970725
10	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	3.0	1.5	玉集中		PNo6505	970902
11	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	2.0	1.6	南4−B	すそ部		970818
12	平玉	碧玉	剥片素材	3.2	2.1	1.5	北3層内		PNo488	970718
13	平玉	碧玉	剥片素材	3.1	1.9	1.4	S−1−B	黒色土		970902
14	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	2.6	1.6	S−2−B	3層	PNo5759	970827
15	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	1.9	1.0	S−2−B	焼土炭混層		970905
16	平玉	碧玉	剥片素材	1.7	1.5	0.4	S−1−A	SI−02北		970904
99−1	平玉	碧玉	剥片素材	3.4	2.9	1.4	S−1−B	3層	PNo5299	970826
2	平玉	碧玉	剥片素材	2.6	1.7	0.8	表土			970509
3	平玉	碧玉	剥片素材	2.7	1.8	0.8	北3層内		PNo443	970826
4	平玉	碧玉	剥片素材	2.9	2.9	0.9	S−3−B	3層	PNo3680	970808
5	平玉	碧玉	剥片素材	2.4	2.4	0.9	S−2−B	玉集中西下		970828
6	平玉	碧玉	剥片素材	2.1	2.5	1.2	S−3−B	内側すそ部		970801
7	平玉	碧玉	調整剥片	2.5	2.9	1.3	S−1−B	アゼすそ部		970826
8	平玉	碧玉	調整剥片	2.3	2.6	1.0	S−2−B	玉集中	PNo6511	970828
9	平玉	碧玉	調整剥片	1.9	2.0	1.0	西斜面地山上			970614
10	平玉	碧玉	調整剥片	2.5	2.3	1.2	南4−B	3層	PNo1779	970725
11	平玉	碧玉	調整剥片	2.3	2.4	1.3	S−3−B	焼土炭混層		970909
12	平玉	碧玉	調整剥片	2.7	2.7	1.1	S−2−B	3層	PNo2280	970731
13	平玉	碧玉	調整剥片	2.6	2.7	0.6	排土中			970910
14	平玉	碧玉	調整剥片	1.8	1.9	0.8	西側下降斜面			970523
15	平玉	碧玉	調整剥片	2.7	2.4	0.7	S−2−B	3層	PNo4444	970825
16	平玉	碧玉	調整剥片	2.3	2.3	0.9	表土			970509
17	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.7	1.4	V区	縦断トレンチ		970509
18	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	2.1	0.8	Ⅱ区	縦断トレンチ		970514
19	平玉	碧玉	調整剥片	2.1	2.1	0.8	S−1−B	焼土炭混層		970924
20	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.2	1.0	南1−B	3層	PNo700	970723
21	平玉	碧玉	調整剥片	2.1	2.1	0.7	S−2−B	玉集中	PNo6309	970908
22	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	2.0	0.9	S−3−B	焼土炭混層		970909
23	平玉	碧玉	調整剥片	2.6	2.7	0.9	S−2−B	3層	PNo6205	970829
100−1	平玉	碧玉	調整剥片	2.2	2.0	0.9	トレンチ表土中			970509
2	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	2.1	1.0	S−2−B	玉集中	PNo6512	970908
3	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.6	1.3	S−3−B	サブトレ内		970911
4	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	2.0	1.1	北西側	焼土炭混層		970909
5	平玉	碧玉	調整剥片	1.8	1.9	0.9	S−2−B	3層	PNo4303	970829
6	平玉	碧玉	調整剥片	2.1	2.2	0.9	SI周辺			970523
7	平玉	碧玉	調整剥片	2.3	2.3	1.1	不明			970930
8	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	1.9	1.1	S−2−B	西側	焼土炭混層	970926
9	平玉	碧玉	調整剥片	2.1	2.2	1.1	土坑セクション内	焼土炭混層		970926
10	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.4	0.9	表土			970509
11	平玉	碧玉	調整剥片	2.2	2.2	1.2	S−2−B	3層	PNo3665	970808
12	平玉	碧玉	調整剥片	2.1	2.2	1.0	SI-02	トレンチ		970828
13	平玉	碧玉	調整剥片	2.0	2.0	1.2	玉集中		PNo6430	970901
14	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.4	1.3	南3−B	サブトレンチ内		970725
15	平玉	碧玉	調整剥片	2.5	2.4	1.4	玉集中		PNo6510	970908
16	平玉	碧玉	調整剥片	2.2	2.1	0.9	S−1−B	玉集中	焼土炭混層	970829
17	平玉	碧玉	調整剥片	2.3	2.3	1.1	SIセクション内	包含層	PNo6645	970926
18	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	2.4	1.0	玉集中	PNo6429		970901
19	平玉	碧玉	調整剥片	2.2	2.1	1.1	S−2−B	玉集中	PNo6515	970908
20	平玉	碧玉	調整剥片	2.4	1.9	1.4	SI−05	包含層		970930
21	平玉	碧玉	調整剥片	1.9	2.0	1.0	表土			970509
22	平玉	碧玉	仕上げ研磨	2.3	1.9	1.0	玉集中		PNo6465	970902
23	平玉	碧玉	仕上げ研磨	1.9	1.9	1.0	S−1−B	焼土炭混層		970902
101−1	平玉	碧玉	破損品	1.6	1.8	0.7	玉集中		PNo6550	970908
2	平玉	碧玉	破損品	1.7	1.7	0.8	2層内			970516
3	平玉	碧玉	破損品	1.7	1.6	0.8	S−3−B	西側すそ部		970801
4	平玉	碧玉	破損品	1.5	1.7	0.7	S−3−B	3層	PNo3693	970801
5	平玉	碧玉	破損品	1.6	1.7	0.7	S−1−B	アゼすそ部		970922
102−1	平玉	黒色泥岩	石核	5.7	11.2	3.7	S−2−B	3層	PNo4910	970825
2	平玉	黒色泥岩	石核	3.9	3.9	0.9	玉集中		PNo6486	970902
3	平玉	黒色泥岩	石核	4.2	5.3	2.5	玉集中		PNo6548	970908
4	平玉	黒色泥岩	石核	3.6	2.5	1.0	S−2−B	3層	PNo6054	970829
5	平玉	黒色泥岩	石核	3.0	5.3	0.7	SI−02		PNo7133	970930
6	平玉	黒色泥岩	石核	2.6	5.7	1.1	S−3−B	焼土炭混層		970909
7	平玉	黒色泥岩	石核	4.7	2.5	1.7	玉集中		PNo6493	970902
8	平玉	黒色泥岩	石核	4.5	7.0	0.7	S−2−B		PNo6518	970829
9	平玉	黒色泥岩	剥片素材	2.7	3.2	1.7	S−2−B	アゼ		970922
10	平玉	黒色泥岩	剥片素材	2.1	2.4	1.7	SI−02		PNo7133	970828
11	平玉	黒色泥岩	剥片素材	2.2	2.2	1.3	不明			970827
12	平玉	黒色泥岩	剥片素材	2.4	2.1	1.0	S−1−A	SI−01北側		970905

単位：(cm)

掲載番号	番	類	材	質	製作工程	長 さ	幅	厚 さ	出土場所・年月日			
103－1	甲主		黒色泥岩		剥片素材	3.6	2.0	1.1	S－2－B	西側	後土房混層	970691
2	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.3	1.7	1.0	S－2－B	玉集中		970606
3	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.9	1.7	1.0	北側斜面			970628
4	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.1	3.0	0.7	S－2－B	後土房混層		970626
5	甲下		黒色泥岩		剥片素材	3.0	1.8	0.8	S－3－B	3層	P№3681	970608
6	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.8	2.0	1.0	S－3－B			970604
7	甲下		黒色泥岩		剥片素材	2.0	2.7	1.0	S－1－B	3層	P№2132	970731
8	甲主		黒色泥岩		調整剥片	2.2	2.0	0.9	S－3－B	3層	P№4091	970626
9	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.8	1.7	1.0	表土			970612
10	甲下		黒色泥岩		剥片素材	2.1	1.7	0.9	SI－04	地山面上	P№7190	971001
11	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.5	2.3	0.7	SI－02	後土房混層		970901
12	甲下		黒色泥岩		調整剥片	1.9	2.0	0.8	S－1－B	後土房混層		970829
13	甲主		黒色泥岩		剥片素材	2.5	2.0	1.0	北側丘陵	後土房混層		970910
14	甲下		黒色泥岩		調整剥片	2.5	2.3	0.6	北側丘陵	後土房混層		970910
15	甲主		黒色泥岩		調整剥片	2.0	2.2	1.1	SI－04	地山面上	P№7153	970829
16	甲主		黒色泥岩		調整剥片	1.7	1.8	0.9	S－1－B	玉集中北側	後土房混層	970829
17	甲下		黒色泥岩		調整剥片	1.6	1.7	0.8	SI－04	地山面上	P№6880	970829
18	甲主		黒色泥岩		調整剥片	2.0	2.1	0.8	S－3－B			970904
19	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	1.8	2.1	0.8	S－2－B	3層	P№5302	970626
20	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	2.2	2.2	1.0	玉集中		P№4526	970906
21	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.8	1.9	0.9	S－2－B	玉集中北側	P№6590	970829
22	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	1.8	2.0	0.8	南2－B	3層	P№915	970724
23	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	1.9	0.8	玉集中	北側 後土房混	P№6421	970901
24	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	2.2	2.5	1.1	玉集中	層		970908
25	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	2.1	1.0	玉集中		P№6442	970902
26	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	1.6	2.0	0.5	SI－04		P№6905	970929
27	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.8	1.9	0.9	玉集中	地山面上	P№6443	970902
28	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.7	2.1	0.8	S－2－B			970902
29	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	2.0	2.1	1.2	S－2－B	玉集中	P№6244	970829
104－1	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	2.0	2.2	1.1	S－2－B	3層	P№5859	970829
2	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	2.0	0.7	SI－03	3層		
3	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	2.0	0.6	SI－02		後土房混層	970901
4	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	2.2	2.1	0.8	S－1－B	西下	P№6901	970911
5	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	2.1	2.2	0.8	南2－B	3層	P№772	970723
6	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	2.0	0.7	南2－B	3層	P№1916	970731
7	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	2.3	2.3	0.7	北側斜面	3層		970829
8	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.7	1.9	0.8	SI－02	トレンチ2	後土房混層	970901
9	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.7	2.1	1.0	S－2－B	西下		970622
10	甲下		黒色泥岩		仕上げ調整	1.9	1.9	0.9	3層	アゼ	P№4172	970825
11	甲主		黒色泥岩		仕上げ調整	1.8	2.0	0.9	玉集中			970909
105－1	甲下		石英		石核	4.3	2.2	1.7	北側斜面上部			970625
2	甲主		右英		剥片素材	2.5	2.4	1.6	S－3－B	後土房混層		970911
3	甲主		石英		剥片素材	3.2	2.3	1.0	S－1－B	後土房混層		970622
4	甲下		右英		剥片素材	2.8	1.8	0.9	SI－05	アゼ		970630
5	甲主		右英		剥片素材	3.0	2.2	1.6	南5－B	包含層	P№1859	970729
6	甲下		石英		剥片素材	2.5	1.8	1.1	S－2－B	3層		970828
7	甲主		右英		剥片素材	2.4	1.9	1.1	北側斜面下部	後土房混層		970908
8	甲主		石英		剥片素材	2.3	1.9	0.9	北側斜面上部	後土房混層		970908
9	甲下		右英		剥片素材	2.5	2.5	1.5	北側丘陵	後土房混層		970910
10	甲主		右英		調整剥片	2.6	2.3	1.1	北側丘陵	後土房混層		970910
11	甲下		石英		調整剥片	1.8	1.9	1.3	SI－03	後土房混層	P№144	970623
12	甲主		右英		調整剥片	1.9	2.3	1.4	北側斜面			970905
13	甲主		石英		調整剥片	2.4	2.1	1.6	北側丘陵			970910
14	甲下		右英		調整剥片	2.3	2.0	1.5	S－1－B	後土房混層		970922
15	甲主		右英		調整剥片	2.3	1.9	1.1	SI－05	アゼ		970930
16	甲下		石英		調整剥片	2.2	2.0	1.2	S－3－B	包含層		970909
17	甲主		右英		調整剥片	2.0	2.1	1.3	S－1－B	後土房混層	後土房混層	970829
18	甲主		石英		調整剥片	2.2	2.0	1.2	S－1－B	玉集中北側	後土房混層	970829
19	甲下		右英		調整剥片	2.5	2.1	1.1	打北側	玉集中北側		970903
20	甲主		右英		調整剥片	1.9	2.3	1.5	S－2－B	3層		970922
21	甲下		石英		調整剥片	2.6	1.8	1.1	S－1－B	アゼ		970922
22	甲主		右英		調整剥片	2.2	2.4	1.2	S－2－B	アゼ		970922
23	甲主		石英		調整剥片	1.9	2.2	1.1	北側斜面	アゼ	後土房混層	970902
24	甲下		石英		調整剥片	2.3	2.0	1.0	北側丘陵	西下土層		970910
25	甲主		右英		調整剥片	2.6	2.1	0.8	玉集中	後土房混層		970902
106－1	甲下		石英		調整剥片	2.0	1.9	0.7	北側丘陵			970909
2	甲主		右英		調整剥片	2.3	2.3	1.1	南2－B	後土房混層		970725
3	甲主		石英		調整剥片	1.9	1.2	1.1	北側丘陵	サブトレンチ内		970909
4	甲下		石英		調整剥片	2.4	2.4	1.2	縦断トレンチ	後土房混層		970926
5	甲主		右英		調整剥片	2.3	2.0	1.2	SIセクション	西側下方斜面		970926
6	甲主		石英		仕上げ調整	1.8	2.0	1.1	北西側	包含層	P№6575	970909
7	甲下		石英		仕上げ調整	1.6	2.0	0.9	玉集中	後土房混層	P№6481	970902
8	甲主		右英		仕上げ調整	1.7	1.7	0.8	S－2－B		P№6992	970909
9	甲下		石英		仕上げ調整	1.8	2.1	1.0	玉集中	玉集中	P№6958	970908
10	甲主		右英		仕上げ調整	1.8	2.1	1.1	北側	後土房混層	P№6612	970911
11	甲主		石英		仕上げ調整	1.7	2.1	1.0	S－2－B	3層	P№4464	970825
12	甲下		石英		仕上げ調整	2.3	2.1	1.1	北側斜面	SIトレ01	後土房混層	970908
13	甲主		右英		仕上げ調整	1.5	2.0	0.8	SI－04	地山面上	P№6993	970929
14	甲下		石英		仕上げ調整	1.4	2.4	1.2	玉集中	S－2－B	P№6839	970902
107－1	黒石					14.7	7.2	4.8	SI－03		P№7145	970930

単位：(cm)

挿図番号	器種	材質	制作工程	長さ	幅	厚さ	出土場所・年月日			
107−2	砥石			10.3	5.1	2.7	S−2−B	3層	PNo.6173	970829
3	砥石			11.5	6.8	3.2	S−1−B	玉集中北側	焼土炭混層	970929
4	砥石			13.2	9.2	9	SI−03	PNo.7144		970930
5	砥石			10.8	7	4	SI−04	地山直上	PNo.6884	970929
6	砥石			13	10.7	4	S−1−B	玉集中北側	焼土炭混層	970929
108−1	砥石	珪化木		18.7	3.3	1.7	赤土(根の周り)			970502
2	砥石	珪化木		19	5.1	1.5	赤土(根の周り)			970502
3	砥石			12.3	6.5	3	トレンチ4	表土中		970516
4	砥石			5.6	5.7	3.5	北側斜面	西すそ部	焼土炭混層	970902
5	砥石			9.9	3.2	3.5	表土			970514
6	砥石			8.5	3.6	1.6	北側斜面			970528
109−1	丸玉	石英		0.9	0.9	0.7	SI−02	西下	PNo.6424	970901
2	丸玉	石英		1.3	1.4	0.7	S−2−B	玉集中	PNo.6564	970909
3	丸玉	石英		0.9	1.6	0.7	南2−B	3層	PNo.1000	970724
4	ナツメ玉	石英		1.8	1.4	1.1	北側	3層	PNo.3807	970811
5	ナツメ玉	石英		2	1.4	1.2	南1−B	3層	PNo.1954	970703
6	不明	軟質の玉材		1.1	1.8	1	S−1−B		PNo.6603	970911
7	不明	軟質の玉材		1.5	1.6	1	北側	3層	PNo.6593	970909
8	平玉	砂岩		2.4	2.5	1.2	北側斜面	トレンチ2		970529
9	紡錘車	滑石		3.8	2.3	1.6	3層			970522
110−1	ナイフ形石器	安山岩		4.7	1.8	0.7	2層			970516
2	ナイフ形石器	瑪瑙		3	1.5	0.6	S−1−B	焼土炭混層		970908
3	尖頭器	黒曜石		3.8	1.7	0.5	大溝			970609
4	石鏃	黒曜石		3.2	2.6	0.7	北側斜面	表土内		970820
5	石斧	玉髄		4	3.1	1.2	S−1−B	焼土炭混層		970908
6	二次加工剥片	黒曜石		3	1.6	0.5	不明			970501
7	二次加工剥片	黒曜石		3.4	1.4	0.8	トレンチピット内			970514
8	石鏃	安山岩		1.6	1.5	0.4	下溝トレンチ、No.5トレンチの間			970606
9	石鏃	安山岩		1.7	1.3	0.4	黒色土層			970506
10	石鏃	黒曜石		2.3	1.7	0.4	表土			970509
11	石鏃	黒曜石		1.7	0.9	0.3	玉集中北側	焼土炭混層		970901
12	石鏃	黒曜石		1.3	0.7	0.3	JT南側	3層		970528
13	石鏃	黒曜石		1.3	1.7	0.3	北東隅			970820
14	石鏃	黒曜石		1.6	1.3	0.3	北側斜面(道路跡下部)			970820
15	石鏃	黒曜石		1.5	1.6	0.5	S−1−B	地山上層		970819
16	石鏃	黒曜石		1.8	1.3	0.3	北	3層内	PNo.410	970718
17	石鏃	黒曜石		1.5	1.4	0.3	S−2−B	3層	PNo.3664	970808
18	石鏃	黒曜石		2.1	1.3	0.5	北側斜面	焼土炭混層		970908
19	石鏃	黒曜石		1.8	1.5	0.4	北	3層内	PNo.484	970718
20	石鏃	黒曜石		1.4	1.4	0.4	SI−05	直上	PNo.7036	970929
21	石鏃	黒曜石		2	1.6	0.4	表土			970512
22	石鏃	黒曜石		1.7	1.5	0.4	トレンチ内			970514
23	石鏃	黒曜石		2.4	1.7	0.4	南4−B	3層	PNo.1831	970729
24	石鏃	黒曜石		2.1	1.7	0.4	大溝内	3層		970610
25	石鏃	黒曜石		2.9	1.9	0.5	S−1−B	下方	PNo.6652	970929
26	石鏃	黒曜石		3.3	1.6	0.5	トレンチ4	地山直上	PNo.99	970522

註1　『山曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会1989年

註2　『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』宍道町教育委員会1983年

註3　島根県立工業技術センター所長井上多津男氏、資源科長永島晴夫氏のご教授による。

註4　島根県立工業技術センター所長井上多津男氏、資源科長永島晴夫氏のご教授による。

註5　以下、大谷編年については大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』1994年を参照。

註6　山本清「出雲の古代文化」Ⅱ編5章　六興出版1989年、勝部智明「宍道湖周辺の来待石製舟形石棺について」『宍道町歴史叢書1』宍道町教育委員会1996年

註7　『島田池遺跡・鶴貫遺跡』島根県教育委員会1997年

註8　本報告書所収の永島正春「岩屋遺跡の古墳群から出土した赤色関係資料について」を参照。

註9　赤澤秀則『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5』鹿島町教育委員会1992年

註10　坪井清・町田章「遺物」『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会1970年

註11　『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅶ集』島根県教育委員会1977年

註12　『島田遺跡・岸尾遺跡』島根県教育委員会1997年

註13　島根大学総合理工学部教授赤坂正秀氏のご教授による。

註14　島根大学総合理工学部教授赤坂正秀氏のご教授による。

第4章　平床Ⅱ遺跡

第1節　調査の経過と概要

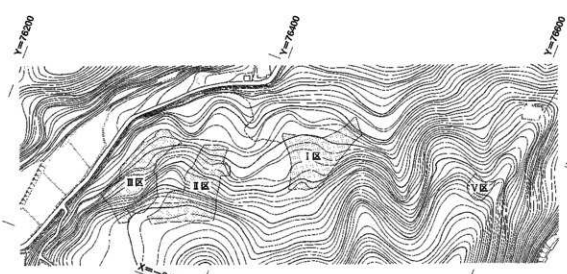
平床Ⅱ遺跡は、八束郡玉湯町平床1443番地外に所在する。玉湯町中心部から、玉湯川の小支流に沿って南西へ入り込む谷の、北西向き斜面を中心に立地する。遺跡の標高は約40m～60mである。

玉などの石材産出地である花仙山、国指定史跡の出雲玉作跡から西へ約1㎞、第3章に記載された岩屋遺跡は、谷をはさんで北西側に隣接する。

平床Ⅱ遺跡は、平成8年12月に範囲確認調査、平成9年4月～12月に全面調査を実施した。範囲確認調査では、調査地を地形によりⅠ区からⅣ区に区割りしたのち、52カ所のトレンチを設定して掘り下げを行った。その結果、Ⅰ～Ⅲ区から弥生時代～中世にかけての土器や、碧玉などの玉作関係の遺物が出土したため、これらの地区は全面調査が必要と判断し、Ⅳ区についてはトレンチ調査のみとした。

全面調査は4月14日にⅠ区から開始し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出して7月4日に終了した。6月からはⅡ区・Ⅲ区にも着手し、Ⅱ区では玉作関連遺構とみられる掘立柱建物跡など、Ⅲ区でも玉作関連とみられる竪穴住居跡などを検出し、12月16日に空中写真撮影を行って調査を終了した。また7月には、東に玉湯川を望む丘陵頂部をⅤ区としてトレンチ調査を実施し、須恵器などの遺物が出土したため、引き続き全面調査を行ったが遺構は検出できず8月20日に調査を終了した。

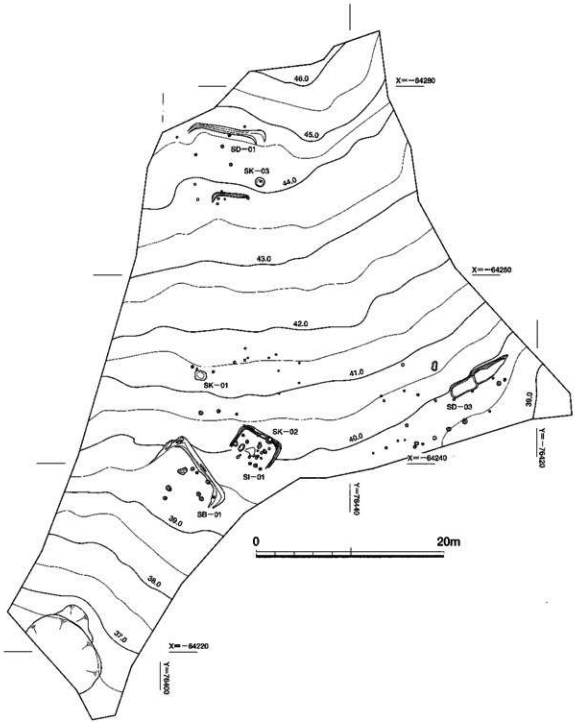
全面調査の方法は、基本的に重機による表土掘削の後、人力による掘り下げ・清掃を行って遺構を検出した。遺物の取り上げ、実測には主として遺跡調査システム「SITE」を使用し、調査員による補正を行った。調査前、調査後の遺跡全体写真撮影はリモコンヘリコプターにより実施し、地形測量についても、Ⅰ区の調査後地形測量を除きリモコンヘリコプターによる空中写真をもとに図化を行った。



第111図　平床Ⅱ遺跡　調査区位置図（S=1／3000）

第２節　Ｉ区の調査（第112図）

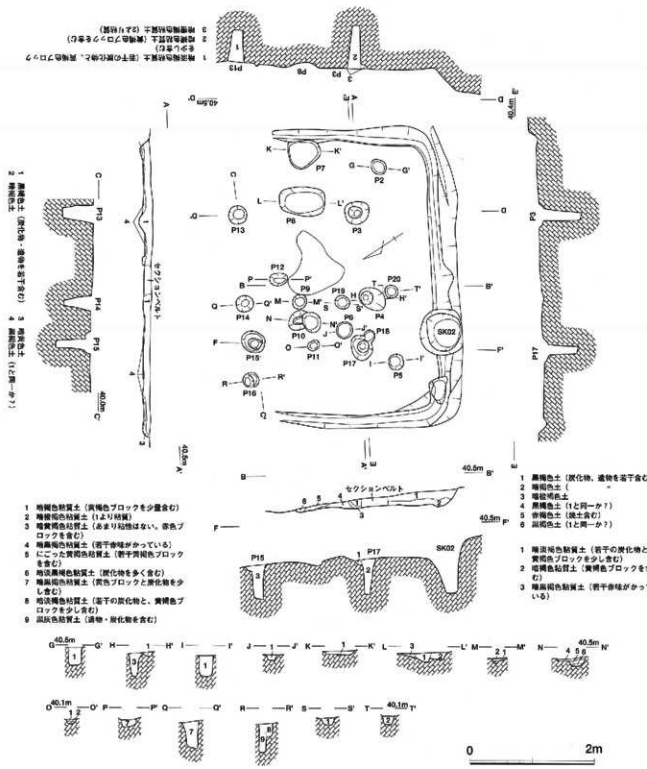
Ｉ区は、北へ延びる２つの尾根に挟まれ谷状地形となっている緩斜面に位置する。標高は37m～47mである。検出した遺構は、竪穴住居跡１、掘立柱建物跡１、溝３、土坑２、ピット多数である。遺構の時期は古墳時代中期から平安時代まで幅広い。また、ピットについては、一定の範囲に集中する傾向があるが、建物などを推測させるような配置になっているものは認められなかった。遺物は、土器、石器のほか、勾玉や平玉の未成品、砥石などの玉作関係遺物が出土している。



第112図　Ｉ区遺構位置図（S=1／400）

SI－01（第113図）

Ⅰ区の北東部、標高40m付近で検出した竪穴住居跡である。平面形は隅丸方形を呈し、斜面の下方側を除いて壁体溝がめぐる。規模は壁体溝内側で東西約５m、南北約３mであるが、柱穴の位置から考えると、斜面下方側は土砂の流出などにより壁体溝が消滅している可能性もある。壁の高さは40㎝、壁体溝は幅20㎝、深さ５㎝である。



第113図　Ⅰ区SI－01実測図（S=1／60）

床面から検出したピットは、計20基である。ピットの位置や規模から、この遺構の主柱穴は少なくとも2群が存在すると考えられる。1つはP3－P17－P15－P13で、径30cm～40cm、検出面からの深さは50cm～70cmである。もう一つはP2－P5－P16であるが、住居北東隅では対応するピットが検出できなかった。ピットの径は20cm、深さは30cm～50cmである。ほかにP4、P14も主柱穴となる可能性があり、住居の建て替えを示すものと見られる。床面中央付近などに焼土が存在したが、いわゆる中央ピットは検出できなかった。このほか、南西側の壁と切り合って土坑1基（SK－02）を検出したが、これについては後述する。

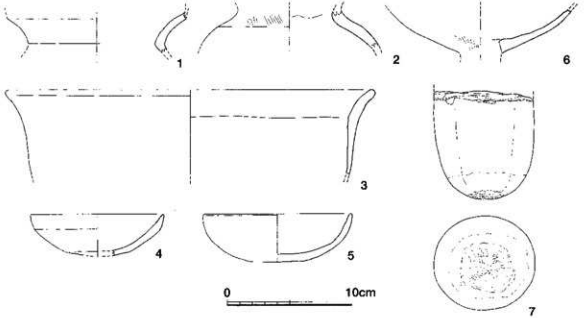
SI－01出土遺物（第114図）

SI－01からは、土師器、石器、玉作関連遺物が出土しているが、玉作関連遺物については後述する（第124図）。土師器はいずれも風化が著しく、調整の詳細については不明である。

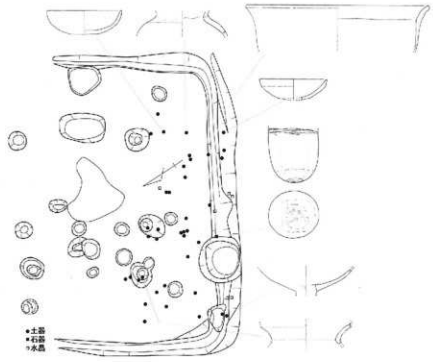
1は、複合口縁の甕と考えられるが、口縁部を欠くため、その形状は不明である。2は甕の頸部～屑部付近で、タテ方向のハケメが認められる。3は甑形土器と思われる。口径を復元すると29.8cmで、風化が激しいため調整は不明である。4、5は坏である。4は復元口径10.7cm、器高は約4cmと推定される。底部付近と口縁部付近にわずかな稜をもち、口縁端部が上方にのびる。5は口径11.8cm、器高3.9cmで、口縁端部は丸く仕上げられる。底部は平底気味につくられている。6は高坏で、坏と脚の接合部付近である。坏部外面に稜はなく、タテ方向のハケメ調整が認められる。7は敲石と考えられる。中途で欠損しているが砲弾形を呈し、現存長8.7cm、断面は長径8.1cm、短径7.6cmでほぼ円形である。端部には敲打痕が認められる。遺構の時期については、1が古墳時代中期[1]、4・5が古墳時代中期以降と考えられるが、須恵器が出土していない点や住居跡の平面形などを考慮すると、概ね古墳時代中期に位置づけられる。

SI－01遺物出土状況（第115図）

遺物は、土器、石器、玉作関連遺物とも住居跡の南西部（斜面上側）から出土し、北東部（斜面下側）からはまったく出土していない。また、覆土中からの出土がほとんどである。



第114図　I区SI－01出土遺物実測図（S=1／3）



第115図　Ⅰ区SI－01遺物出土状況（遺構S＝1／40、遺物S＝1／6）

SB－01（第116図）

Ⅰ区の北東部、SI－01の北東に隣接して検出した掘立柱建物跡と見られる遺構で、標高は約40mである。平面形は斜面上側を削平して、「コ」の字形につくりだしている。規模は8.6m×5.0mであるが、柱穴の位置から考えると、斜面下方側に若干広がるものとみられる。斜面上方の壁沿いには浅い溝が掘り込まれているが、側面の壁沿いでは自然に消滅する。壁の高さは40cmである。床面から検出したピットは9基で、径20cm程度、深さ20cm程度のものがほとんどである。ピットの配置からは建物の柱穴となるような並びは確認できなかった。

SB－01出土遺物（第117図）

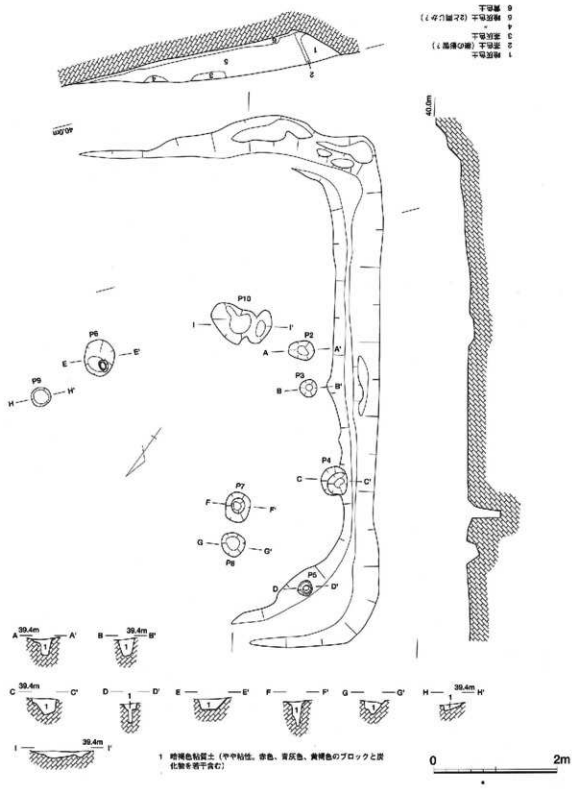
SB－01からは、土師器、土師須恵器、石鏃が出土している。1は、複合口縁の痕跡を残す甕の口縁部と見られるが、器台などの脚部の可能性もある。口径は13.8cmで、風化が著しく内外面とも土器の表面が剥落している。2は坏である。小片のため口径の推定は困難であるが、14cm程度と考えられる。胎土は緻密で、内外面とも回転ナデを施す。3は高台付きの坏である。風化が著しく調整は不明である。4は高坏である。外面にタテ方向のハケメが認められる。

5は東播系の捏鉢である。口縁端部はあまり肥厚せず、外面は丸く仕上げられる。6は黒曜石製の石鏃である。凹基無茎で、かなりの部分が欠損している。

遺物の時期は、1、4など古墳時代中期と見られるものと2、3、7の奈良時代～平安時代と考えられるものと2つに分かれ、SB－01がどの時期に相当するのかは特定できない。

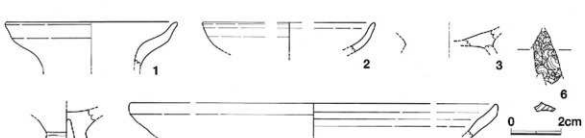
SD－01（第118図）

Ⅰ区南東部、標高45m付近で検出した溝状遺構である。等高線にほぼ平行して掘り込まれ、長さ8.2m、上端幅30cm～70cm、深さ約10cmである。東西両端は斜面下方側にわずかに折れ曲がり、自然に消滅する。周辺にいくつかのピットが検出されており、加工段ないし掘立柱建物跡に伴う溝であ

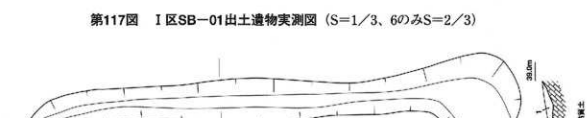


第116図　Ⅰ区SB－01実測図（S=1／60）

る可能性も考えられたが、明確な平坦面は存在せず、またピットの位置関係も建物を想定させるようなものは認められなかった。この遺構に伴う遺物は出土していない。



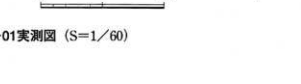
第117図　Ⅰ区SB－01出土遺物実測図（S=1／3、6のみS=2／3）



第118図　Ⅰ区SD－01実測図（S=1／60）

SD－02（第119図）

SD－01の北側約６mに位置し、標高は約44mである。ほぼ等高線に平行し、長さ4.0m、上端幅10cm～20cm、深さは約10cmで、両端部は斜面下方側に折れ曲がる。ここでも周辺でピットを検出しているが、建物が想定されるような位置関係は認められない。



第119図　Ⅰ区SD－02実測図（S=1／60）

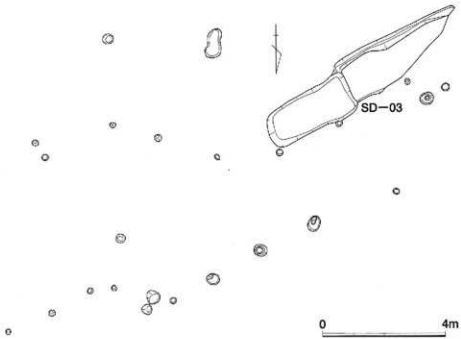
遺物は、めのう製の垂玉ないし勾玉と考えられる未成品１点が出土しているが、これについては後述する。（第124図）

SD－03周辺ピット検出状況（第120図）

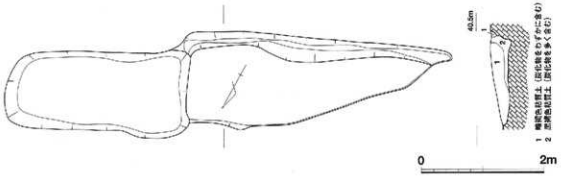
Ⅰ区北西端部、標高39m～41mでピット多数を検出した。ピットはSD－03の北～東にかけて確認された。規模は、径・深さとも15cmの小さなものから径40cm、深さ30cmのしっかりしたものまであるが、建物を想定させる位置関係が認められるものは存在しなかった。また、SD－03と切り合っているピットも存在するが前後関係は明らかにできず、ピット群とSD－03の関係についても不明である。

SD－03（第121図）

Ⅰ区の北西部で検出された溝状遺構で、標高は約40mである。全体の長さは7.1mであるが、東側と西側では様相が異なる。西側は斜面をわずかに掘り込んで長さ4.0m、幅最大1.2mの平坦面をつくりだし、斜面上方側に幅10cm～20cmの溝をもつ。この溝は東端でわずかに斜面下方側へ折れ曲がるが、東側の落ち込みと切り合いがあり消滅する。東側は2.4m×1.2m、深さ0.2m前後の浅い土坑状で、底面では西側とのレベル差が約10cmである。範囲確認調査時のトレンチが存在したため、東側部分と西側部分との前後関係は明らかにできなかった。



第120図　Ⅰ区SD－03周辺ピット検出状況（S=1／40）



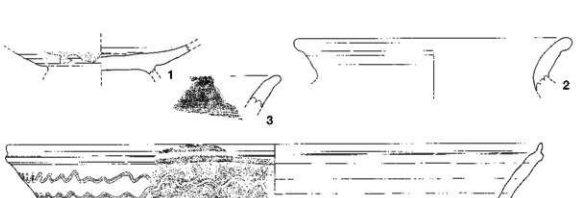
第121図　Ⅰ区SD－03実測図（S=1／60）

SD－03出土遺物（第122図・123図）

SD－03からは、須恵器、土師質土器、磁器、玉未成品が出土しているが、玉未成品については後述する。（第124図）

第122図は須恵器である。1は高坏ないし高台付坏の破片である。調整は内外面とも回転ナデであるが、内面と外面の一部に墨と見られる付着物があり、内面が磨滅していることから、転用硯として使用されたと考えられる。2～4は甕の口縁である。2は文様はなく、口縁端部がわずかに肥厚するもので、内面には自然釉が付着する。口径21.8cmである。3は口縁端部がわずかに外へ屈曲するもので、外面には櫛状工具による波状文が施され、調整は回転ナデである。4は甕の口縁で口径43.2cmと大形のものである。口縁は直線的に外傾して、端部が上方に突出する。口縁部外面には2条単位の工具による波状文が2組施され、調整は回転ナデもしくは横方向のナデであるが、断面では粘土紐の接合痕が観察される。

第123図1～27は土師質土器である。1～4は口縁部が確認できるもので、1、3、4が皿、2は坏と見られる。1は口径9.0cm、強い回転ナデのため内外面とも器壁に凹凸が見られる。2は口



第122図　Ⅰ区SD－03出土遺物実測図（1）（S=1／3）

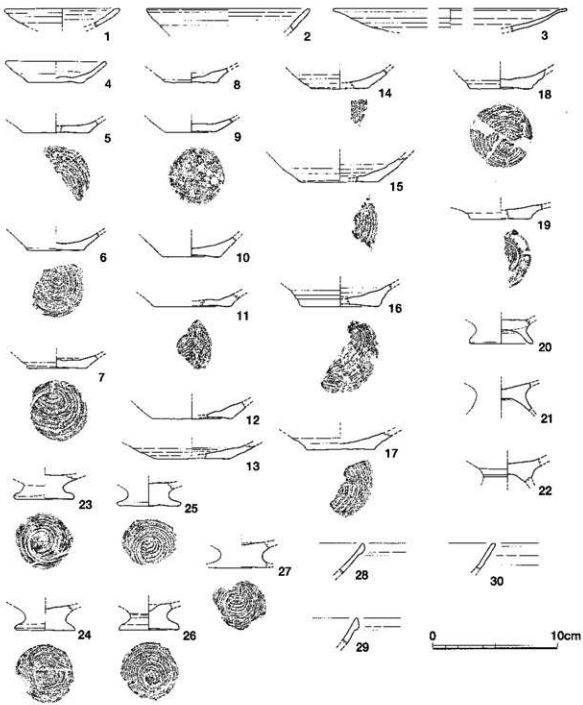
径12.9cmで、体部から口縁部へ直線的にのびる。回転ナデ調整で、内外面ともわずかに凹凸が見られる。3は小片のため口径は不明で、わずかに外反する口縁をもつ。器壁が極めて薄く、最大でも3㎜である。胎土は緻密で、調整は内外面とも風化しているため不明だが、手捏ねで成形されている様子がうかがえる。京都系土師器皿の影響を受けている可能性もあるが、胎土は在地のものと考えられ、詳細は不明である。4はSD－03で唯一完形のものである。口径は8.0cm、底径4.3cm、器高1.8cmである。底部内面に回転ナデの痕跡が見られるが、他は風化が著しく、調整は明らかでない。

5～19は底部である。調整が不明なものを除くと、全て回転糸切りである。底部から体部へ直線的に続くもの（5～15）、一旦上方に立ち上がって外傾するもの（16～19）がある。5は底径5.5cmで、調整は回転ナデである。6～12はわずかに上げ底となるものである。このうち6～8は底部と体部の間にアクセントがつくもので、6は底径4.5cm、7は4.7cm、8は4.3cmである。調整は6、7が回転ナデ、8は風化が激しく調整不明である。9は底径4.1cm、10は4.8cm、11は6.0cm、12は6.2cmである。調整は、9の内面と12の内外面に回転ナデが認められるほかは、風化のため不明である。13～15は平底で、体部に強いナデによる凹凸が認められる。底径は13が6.0cm、14が4.7cm、15が6.4cmで、調整はいずれも回転ナデである。16はやや上げ底となり、底径は6.4cmである。17は底径5.5cm、18は上げ底となり、底径は5.2cm、19は底径4.9cmである。調整は17の体部外面、18の内外面に回転ナデが認められるほかは、風化のため不明である。なお19は体部が外傾が大きく、他とは器形が異なると見られる。

20～22は足高高台の高台部である。20は底径4.9cm、21、22については高台部も欠けているため底径が不明である。調整は20と21の内面が風化のため不明で、回転ナデである。

23～27は柱状高台皿の高台部である。いずれも高台下端部に稜をもつものである。また、24、26は皿部中央にくぼみをもち、24では深さ2㎜、26では同5㎜である。底径は23が4.6cm、24が4.9cm、25が5.2cm、26が4.9cmで27は端部が欠損しているため不明である。調整は底部外面が回転糸切り、他は回転ナデである。

28～30は白磁である。28、29は小片であるが、体部から緩やかに内湾しながら口縁端部に至り、



第123図　Ⅰ区SD－03出土遺物実測図（2）（S=1／3）

口縁部に小さな玉縁を持つ。30は口縁部が直線的にのび、肥厚せず丸くおさめるものである。28、29は大宰府編年[2]の白磁Ⅱ類、30は同Ⅴ類と考えられる。

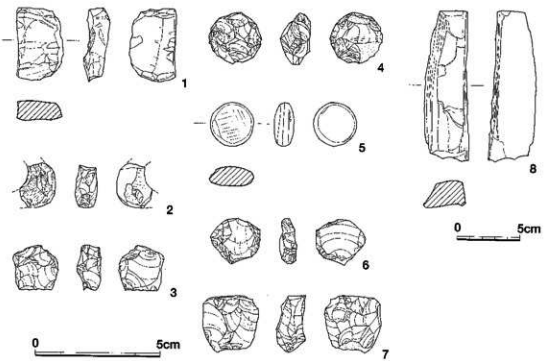
遺構の時期は122－4など、8世紀後半～9世紀初頭[3]に比定されるものもあるが、柱状高台が存在することや、白磁の時期から概ね12世紀に位置づけられる。

Ⅰ区SI－01、SB－01、SD－02・03出土玉作関係遺物（第124図）

Ⅰ区では4つの遺構から玉作関係遺物が出土している。玉未成品の呼称については、福富Ⅰ遺跡で行われた分類[4]に準じるが、このうち原材、石核については明らかに判別できるものがなく、

分類基準に含めていない。また、調整剥片と調整剥離完了品についても判別が難しかったため、全て調整剥片としている。このほか、石材のうち石英と水晶の区別については、肉眼観察で不純物が多く透明感のないものを石英、不純物が少なく透明感のあるものを水晶とした。出土した遺構は、1・2がSI−01、3・8がSB−01、4・5がSD−02、6・7がSD−03である。

1・2はめのう製の勾玉未成品である。1は表・裏面と側面には大きな剥離が残るが、上端と下端には調整剥離が施され、半月状を呈す調整剥片である。2は上端、下端とも欠損しているもので各面には小さな剥離が残るものの全面に研磨が及ぶ。丁寧な研磨であるが、わずかな稜も残るため、一次研磨工程品と考えられる。3は碧玉製の平玉未成品で調整剥片である。平面形は多角形で、側面には比較的大きな剥離が認められる。4は水晶製の平玉未成品で小さな剥離が施されるが、裏面には自然面も残る。敲打調整は認められず、調整剥片である。5は平玉の未成品で石材は頁岩ないし黒色珪質頁岩である。かなり丁寧な研磨を施すが、側面の稜線に歪みが見られることから一次研磨品とした。6は碧玉製の平玉未成品で、調整剥片である。平面形は多角形であるが、側面には小さな剥離が施される。7も碧玉製平玉の未成品で、調整剥片である。下端は自然面が残る。8は砥石と見られる。擦痕は明確でないが、表・裏面が平滑になっている。材質は珪化木とみられる。



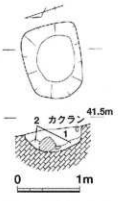
第124図　Ⅰ区SI−01・SB−01・SD−02・03出土玉作遺物実測図（S=2／3、8のみ：S=1／3）

SK−01（第125図）

Ⅰ区の北東部、SI−01の南東8mで検出された土坑である。標高は約41mである。平面形は東西方向に長軸をとる隅丸長方形で、東西2m、南北1.0m、深さ0.4mである。底面に接して自然石が出土したが、土器などの遺物は出土していない。なお、SK−01の北側および西側で比較的多数のピットを検出したが、ここでも建物などを想定させる位置関係にあるものは認められない。

SK－02（第126図）

SI－01の壁面と切り合う土坑である。検出面はSI－01の床面と同一で、SI－01との前後関係は不明である。平面形は円形に近く、長径0.8m、短径0.7m、深さは0.7mである。土層は５層に分かれるが、このうち第４層は均質な白黄色粘土で、30～50㎝の厚さをもつ。

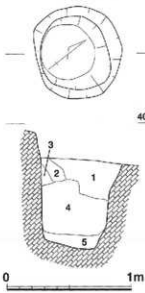


1 暗灰褐色土・褐褐色土混合土（砂粒を多く含む）
2 暗褐色粘質土

第125図　Ⅰ区SK－01実測図（S=1／60）

SK－02出土遺物（第127図）

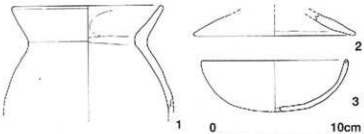
SK－02では１～３層から土器が出土している。１は土師器甕で口径は11.7㎝である。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部内面はヘラケズリと見られる。２は土師器高坏の脚部と見られ、脚端径は12.6㎝である。３は土師器の坏である。口縁端部がわずかに欠損している可能性もあるが、口径は約12㎝、器高は約４㎝で、底面はやや平坦である。SI－01からもこれと同一個体の可能性をもつ土器が出土しているが、小片のため図示できなかった。



1 黒褐色粘質土（遺物・炭化物を含む）
2 暗灰褐色粘質土（遺物・炭化物を含む）
3 黒褐色粘質土（遺物・炭化物を含む　1と同一か）
4 白黄色粘土（遺物・炭化物・砂粒を含まない。淡青灰色粘土ブロックを含む）
5 褐灰色粘質土（炭化物を多く、地山ブロックを少量含む）

第126図　Ⅰ区SK－02実測図（S=1／30）

これら遺物の時期は、須恵器が出土していないことから古墳時代中期と見られ、SK－02の時期の下限は古墳時代中期に置くことができよう。



第127図　Ⅰ区SK－02出土遺物実測図（S=1／3）

SK－03（第128図）

Ⅰ区の南東部、SD－02の南西側で検出された土坑である。平面形は楕円形で、東西1.0m、南北0.8m、深さ0.4mである。土層は２層に分けられ、上層は粘質土、下層は炭化物を含む黒色土である。下層は約10㎝の厚さでほぼ水平に堆積しており、そこに上層が径約20㎝のピット状に切り込んで堆積していた。この遺構内から遺物は出土していない。

1 暗褐色粘質土
2 黒色土層（炭化物包含層）

第128図　Ⅰ区SK－03実測図（S=1／60）

Ⅰ区遺構外出土遺物（第129図～第131図）

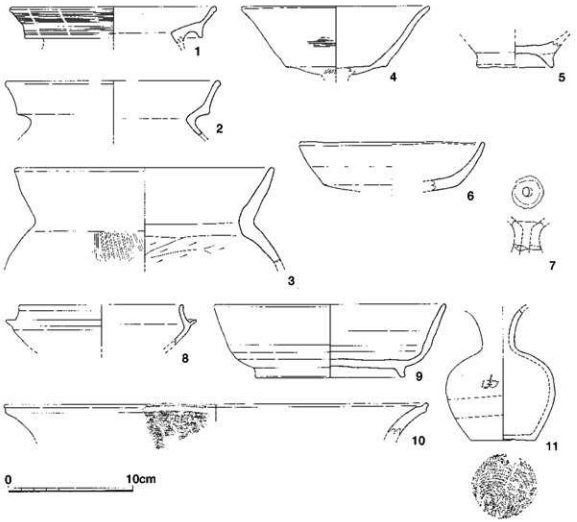
第129図は土器類である。１・２は複合口縁をもつ甕である。

１は口径16.4㎝で、７条以上の平行沈線を施し、ヨコナデ調整で

ある。2は、口径17.1cmで、口縁端部に文様は認められない。調整は内面頸部以下がヘラケズリ、他はヨコナデと見られる。3は単純口縁の甕で、口径は20.6cmである。口縁部は内外面ともヨコ方向のナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。4は高坏の坏部で、口径は15.0cmである。坏底部の外面に稜をもち、外面にはハケメを施す。5は土師質の高台付坏で、底径は5.7cmである。風化のため調整は不明である。6は土師質の坏部で、口径は14.8cmである。水平に開く坏底部から、口縁が斜めに立ち上がる。調整は風化のため不明である。7は、耳栓の可能性がある。最小径は2.0cm、孔の径は0.8cmである。

8～11は須恵器である。8は坏身で口径13.2cm、調整は回転ナデである。9は高台付坏で、口径18.6cm、底径12.0cmである。底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。10は甕で、外反する口縁の端部は斜めに突出し、外面には波状文を施す。11は長頸壺で、底径5.1cmである。底部は回転糸切りで、底部と胴部最大径付近の2カ所に「由」のヘラ書き文字が認められる。

これらの遺物は、1・2が弥生時代後期、4・6が古墳時代中期、3は古墳時代中期以降と見られるが、詳細は不明である。5は中世のものであろう。7は縄文時代のものである。8は古墳時代後期、9は底部がヘラ切りであることから、国庁編年[5]の1～2形式に相当する。10は小松古窯跡群に類例があり[6]、8世紀後半～9世紀初頭、12の長頸壺については、底部が回転糸切りである

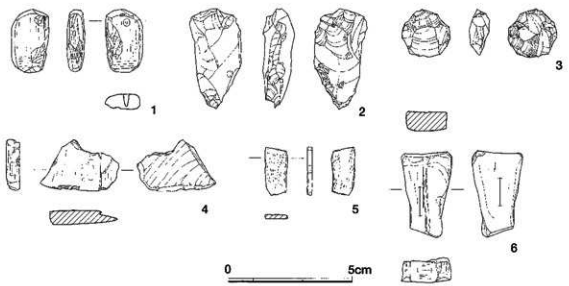


第129図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図（1）（S=1／3）

ことから８世紀後半以降とみられる。底部に高台がなく、球形に近い体部に細い頸部がつく器形は当地方では類例がないが、篠窯では９世紀の前葉～中葉に位置づけられており[7]、この土器もそれに近い時期のものと考えておきたい。

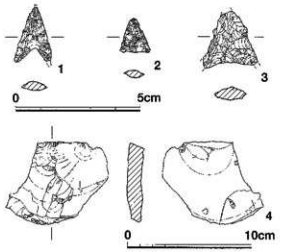
第130図は玉作関係遺物である。１はめのう製の勾玉未成品で、一次研磨工程品である。穿孔されているが、貫通していない。腹面などに剥離が残るが、研磨が施される。２は碧玉製の勾玉未成品で、調整剥片である。表・裏面とも大きな剥離が残る。３は、碧玉製の平玉未成品で、調整剥片であるが、剥離が深くなりすぎ、廃棄されたものと見られる。４～６は砥石である。４は、表面がもっとも平滑である。５はS字状カーブを描く側面がもっとも磨滅し、内磨き砥石と見られる。

６は側面をのぞく４面が研磨に使用される。表面に幅２㎜～４㎜、深さ１㎜の浅い溝が認められるが、筋砥石ではなく、工具の研ぎ出しに使われた可能性も考えられる。



第130図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図（2）（S=2／3）

第131図は石器である。１～３は黒曜石製の石鏃で、２が無茎平基、１・３は無茎凹基で、一部欠損が認められる。４は玉髄製の剥片である。打面は平坦で、下端には礫面を残す。側縁に細かい剥離や割れが認められ、使用痕とも考えられるが、後世にできた可能性も残る。時期は旧石器時代の可能性がある。



第131図　Ⅰ区遺構外出土遺物実測図（3）
（S=2／3、4のみS=1／3）

第３節　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は、北へ延びる尾根の先端付近から斜面に位置する。標高は40m～58mである。この調査区は、標高が比較的高いにもかかわらず斜面から湧水があり、斜面下方側のやや傾斜の緩やかな部分では青灰色の還元層も認められるなど、一般的な丘陵部の土質とはやや異なるものであった。複数の箇所で、崩落と考えられる不自然な崖も認められた。

検出した遺構は、掘立柱建物跡状遺構２、溝３、土坑７、炭化物が散かれた土坑１、性格不明遺構１、ピット多数である。遺構の時期は奈良～平安時代を中心とするものと考えられる。また、ピットについては、溝や土坑を検出した尾根上を中心に検出されたが、ここでも建物を想定させる配列は認められなかった。遺構外出土の遺物には、縄文時代から中世の土器、石器のほか、勾玉や平玉の未成品、砥石などの玉作関係遺物がある。

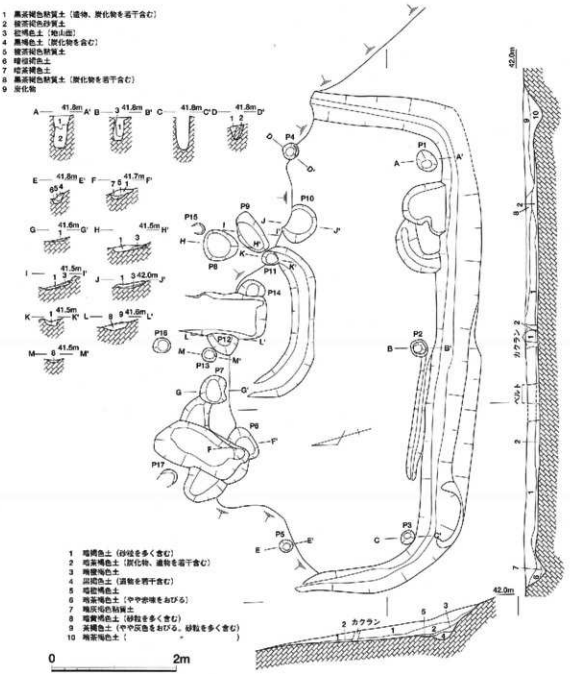
第132図　Ⅱ・Ⅲ区遺構位置図（S＝1／600）

SB－01（第133図）

Ⅱ区の北東端部、標高41m～42mで検出した掘立柱建物跡である。Ⅱ区の中でも斜面の下側にあり勾配は比較的緩やかである。検出時の規模は壁体溝内側で東西8.0m、南北4.0mであるが、後世の地形改変とSX－01・02によって床面の一部が削られている。斜面下方を除き壁体溝がめぐっている

が、東側では明らかに途切れており、柱穴と見られるピットの位置も検出された床面より外側にある。壁の高さは斜面上方側で50cm、壁体溝は幅30～50cm、深さ10cm～20cmである。また壁体溝のほかにも、長さ1m～2mの溝や、浅い土坑が床面で確認された。なお、SX－01・02については後述する。

床面から検出したピットは、計17基であるが、明らかにSB－01に伴うものはP1～P5である。この5基は、SB－01の主柱穴と考えられる。ピットの直径はいずれも15cm～20cm、深さはP1、P3が50cm、P2は40cmとやや浅い。P4、P5も底面の標高を考えるとP2と同程度の深さと見られ、P1・P2とP3～P5では深さに差異が認められる。また、P16も、位置関係から考えると主柱穴を構成する可能性がある。

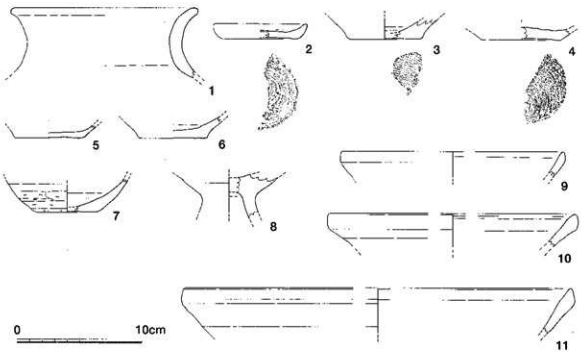


第133図　Ⅱ区SB－01実測図（S=1／60）

SB－01出土遺物（第134図）

SB－01からは、土師器、土師質土器、須恵器、玉作関係遺物が出土しているが、玉作関係遺物については後述する（第137図）。1は、やや頸部が長いが土師器甕の口縁部と見られる。口径は14.2cmで、風化が著しく内外面とも調整は不明である。2は土師質の皿で、口径7.3cm、器高1.2cmである。内外面とも回転ナデを施すもので、底部は回転糸切りである。3～6は坏の底部である。3は底径5.6cm、内外面とも回転ナデを施し、底部外面は糸切り痕が残るが、小片のため回転か静止かは不明である。4は底径6.4cmである。やや上げ底気味で、調整は内面は風化のため不明、外面は回転ナデで底部は回転糸切りである。5は底径5.6cm、調整は風化のため不明である。6は底径5.6cm、調整は風化のため不明である。7～11は須恵器で、9以降は中世のものである。7は底部で、底径は5.0cmである。器種は壺か甕と見られ、外面の底部～体部の下位は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。8は高坏の底部付近で、調整は回転ナデが施される。9～11は東播系の捏鉢である。口縁の肥厚はわずかで、端部外面は丸く仕上げられる。いずれも小片のため口径の復元は困難である。

遺物の時期は1・7・8が古墳時代、9～11が12世紀末～13世紀初め[8]、6は黒田畦遺跡上層のⅢ[9]に器形が類似し、13世紀代の可能性がある。

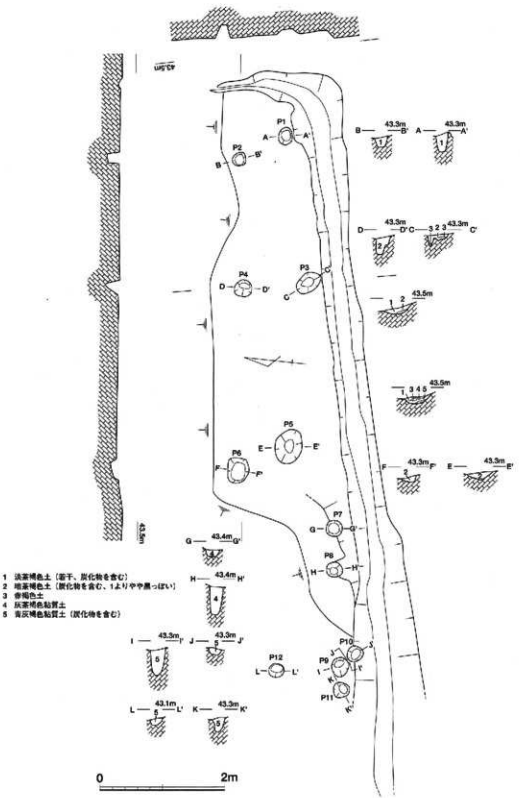


第134図　Ⅱ区SB－01出土遺物実測図（S＝1／3）

SB－02（第135図）

Ⅱ区の北東部、標高43m付近で検出した掘立柱建物跡と考えられる遺構である。北東側約5mにはSB－01が存在する。斜面上側を削平して床面をつくりだすが、後世の地形改変によるものか一部は消滅しており西側では特に著しい。床面の斜面上方側に溝を設けており、東側では斜面下方側に屈曲するが西側ではそのまま直線的にのびる。壁の高さは斜面上方側で20cm、壁体溝は幅20～50cm、深さは約10cmである。床面の規模は現状で最大8.5m×2.0mであるが、溝の長さから考えると、東西の長さ10mを越える床面をもつ可能性もある。また、ピットの位置から考えると、斜面下方側

に若干広がるものとみられる。斜面上方の壁沿いには浅い溝が掘り込まれているが、側面の壁沿いでは自然に消滅する。壁の高さは40cmである。床面から検出したピットは９基で、径20cm程度、深さ20cm程度のものがほとんどである。ピットの平面的な配置から考えると、P1－P3－P5、P2－P4－P6がそれぞれ柱穴列をなすように見えるが、ピット間の距離や深さにばらつきがあることから、



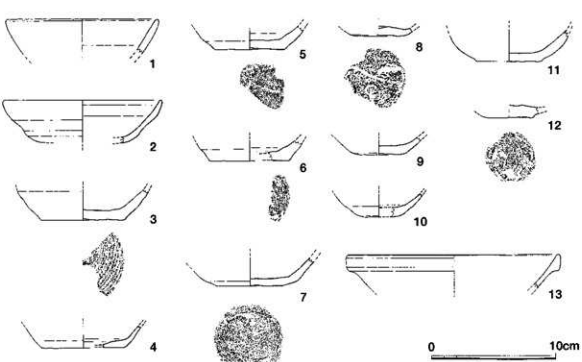
第135図　Ⅱ区SB－02実測図（S=1／60）

柱穴となるかどうかは判断しかねる。

SB－02出土遺物（第136図）

SB－02からは、土師質土器、磁器、玉作関係遺物が出土しているが、玉作関係遺物については後述する（第127図）。1・4～6・12・13は溝内、8がP1、10がP5から出土しているほかは、遺構の覆土中の出土である。

1～12は土師質土器である。1は口径12.1cm、口縁部が直線的にのびるもので、調整は内外面とも回転ナデである。2は口径12.6cmで、口縁がわずかに内湾するものである。体部外面には凹凸が認められ、最下部は水平に近くなっており、底部最外周付近は残存している可能性もある。調整は風化のため不明である。3～12は底部である。調整不明なものを除き、いずれも回転糸切りである。3は底径6.8cmで、体部外面には成形ないし調整の際のわずかな凹凸が認められる。調整は、外面は回転ナデ、内面は風化のため不明である。4は底径6.6cmで、外面にわずかな稜をもち、体部は直線的にのびると見られる。調整は風化のため不明である。5は底径5.6cm、体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。調整は内外面とも回転ナデと見られる。6は底径6.4cmで、器形は5に近いと考えられるが、体部の立ち上がる傾きは5よりも小さい。調整は内外面とも回転ナデと見られる。7は底径5.6cmで、体部は大きく開いて立ち上がる。外面には成形ないし調整時にできた凹凸が存在し、内面にも同心円状の調整痕が認められ、内外面とも回転ナデと見られる。8は底径4.6cmで、体部は大きく傾いてたちあがるとみられる。また底部内面は水平ではなく、中央付近には成形ないし調整時の痕跡と考えられる隆起が認められる。調整は、内面が回転ナデと見られるほかは、風化のため不明である。9は底径4.2cmで、体部の立ち上がる傾きが大きいものである。調整は不明である。10は底径約2cmと推定され、底部と体部の境界付近に大きな凹面をもつ。体部はやや内湾しながらたちあがるようである。11は底径5.3cmで、体部は内湾して立ち上がる。調整は風化が著し



第136図　Ⅱ区SB－02出土遺物実測図（S=1／3）

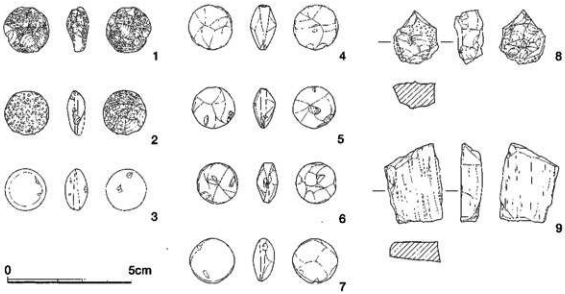
く不明である。12は底径4.0cmで内面に成形ないし調整時にできた同心円状の凹凸が認められる。調整は内外面とも回転ナデとみられる。12は白磁である。口縁部は体部から直線的にのびて玉縁をもつもので、大宰府編年[10]の白磁Ⅳ類に相当する。時期は、白磁の年代観から、概ね12世紀代に位置づけられる。

SB－01・SB－02出土玉作関連遺物（第137図）

SB－01・SB－02からは平玉の未成品と砥石に使用したと見られる石材が出土している。出土した遺構は、8がSB－02、それ以外はSB－01である。

1～3は石英製のもので、径は1.7cm～1.9cm、厚さは0.7cm～0.9cmである。1は、剥離調整ないし破損した際の大きな剥離が数箇所にあるが、ほぼ全面に敲打調整が認められる敲打整形品で、平面形はほぼ円形である。側面に自然面と見られる部分が残る。2も敲打整形品で、一方の面に大きな破損がある。側面の稜もつくりだされ、整形はほぼ終了している。3は石材がかなり白濁しており透明感はない。側縁などにはわずかに敲打痕も残っている部分もあるが、段階としては仕上げ研磨で、完形品の可能性もある。

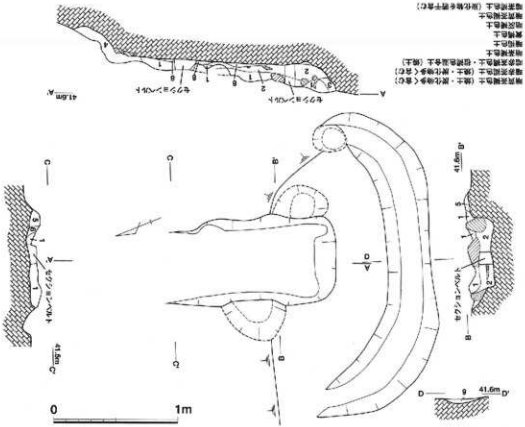
4～7は碧玉製である。径は1.6cm～1.9cm、厚さはいずれも0.9cmで、石英製のものとほぼ同じである。4は側面の一部を除いて稜がつくりだされ、剥離が残る部分もあるものの、ほぼ全面に粗い研磨を施し一次研磨品と考えられる。5は側面の稜が半分程度つくりだされる。剥離がわずかに残るが、ほぼ全面に粗い研磨を施し一次研磨品と考えられる。6は、5と同様な一次研磨品であるが、研磨の単位が明確に確認できるものである。7はほぼ全面に丁寧な研磨を施し光沢をもつもので、仕上げ研磨品である。一部に茶色の付着物があるが、埋蔵中に鉄分が付着したものであろう。8はめのう製の平玉未成品である。平面形は多角形で、一部に自然面が残り、いずれの剥離も大きなもので調整剥離とは考えらないことから、素材剥片と考えられる。9は珪化木と見られ、砥石としての使用を意図したと考えられるが、研磨痕は不明瞭である。



第137図　Ⅱ区SB－01・02出土玉作遺物実測図（S＝2／3）

SX－01（第138図～第140図）

SI－01の床面北側で検出された遺構である。検出面はSI－01と同一で、土層観察による前後関係



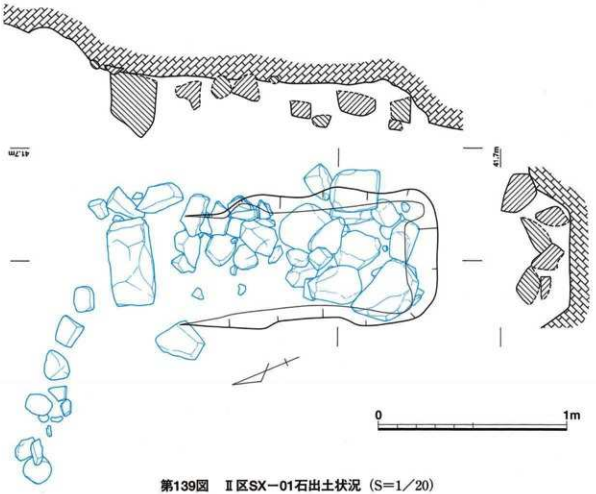
第138図　Ⅱ区SX－01実測図（S＝1／30）

は把握できなかった。SI－01と同様に、この遺構も北側の１／２程度が後世の地形改変などによって削平などの影響を受けていると見られる。なお、SX－01周辺でもピットが多数検出されているが、明らかにSX－01に伴うものは確認できなかった。

SX－01は、検出時で東西0.7m、南北1.5m、深さ0.2mをはかる長方形の平面形をもつ土坑と、長さ2.6m、幅30㎝～50㎝、深さ5㎝の溝からなる。土坑の長軸は北からやや東に振れている。断面図などから考えると、土坑の北側が削られているのはほぼ間違いなく、土坑底面の平坦面の長さから規模を復元すると南北は1.9m以上の長さをもつことになる。溝は土坑の斜面上方側に土坑を囲むようにめぐらされ、両端では斜面下方側に屈曲し、西側では屈曲したあと自然に消滅する。東端では崖やピットとの切り合いがあり、当時の状況をとどめていない可能性もあるが、西側端部の状況と比較すると大きな改変は受けていないと思われる。溝と土坑の距離は、0.4m～0.7mである。

土坑内からは、大小多数の礫が検出された（第139図）。いずれも自然石で、加工痕や被熱した形跡などは認められず、大きさは拳大のものから一辺50㎝近いものまである。後世の地形改変などで移動したものも存在すると見られるが、床面に接しているものもあるため、基本的にはこの土坑の上面に置かれたものと見られる。

また、土坑の覆土には焼土や炭化物が多く含まれるほか、土坑内や壁面では炭化物の層が面的に確認された。この炭化物層の厚さは土坑内で２～３㎝、壁面では10㎝近くに達する部分もあり、壁面には接しているが、土坑内では底面から５㎝程度高い位置で検出された。炭化物層の上下には焼土や炭化物を含む層があり、炭化物層をはさみこむように堆積している。炭化物は、繊維も観察で



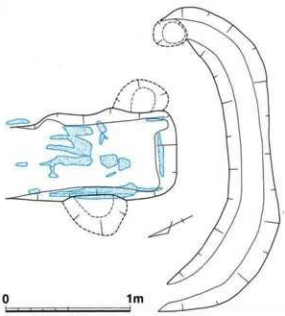
第139図　Ⅱ区SX－01石出土状況（S=1／20）

きたことから、粉状の炭を敷きつめたものではなく板などの木材が敷かれた状態のまま炭化したものと見られる。

SX－01出土遺物（第141図）

SX－01からは土師質土器、めのうや碧玉の剥片が出土しているが、このうち図化可能なものを掲載した。めのうや碧玉の剥片については、玉の未成品と考えられるものではなかったため出土地点を示すのみとし、実測は行わなかった。

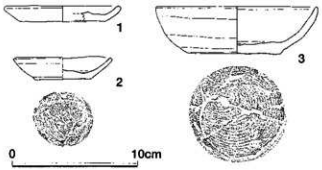
1～3はいずれも土師質土器で、2は土坑底面の地山直上、他は覆土中から出土したものである。器種は1・2が皿、3が坏と考えられる。1は口径9.0㎝、底径6.9㎝、器高1.3㎝である。体部は短く直線的に外傾して口縁部に至り、端部は丸く仕上げられる。底部、体部とも厚く、底部内面にはロクロの成形痕が残る。調整は、風化が著しく不明であるが、底



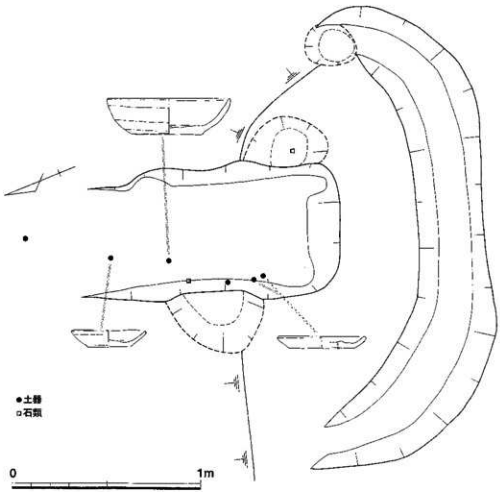
第140図　Ⅱ区SX－01炭化物検出状況（S=1／30）

部外面にはわずかに糸切りの跡が認められる。2は口径8.0cm、底径4.5cm、器高1.8cmである。底部と体部の境界付近に段がつくもので、体部はわずかに内湾しながら口縁部に至り、端部には面をもつ。底部内面中央付近はロクロ成形の痕跡が残り、やや肥厚する。底部外面には回転糸切り痕が残る。3は比較的大形で、口径12.7cm、底径7.3cm、器高3.8cmである。底部と体部の境界付近は不明瞭な段状となり、体部は内湾しながら口縁に至る。口縁端部は上方に突出するように仕上げられる。体部外面は調整によるものか、わずかに凹凸が見られる。底部は回転糸切りで切り離される。

遺物の時期は、陶磁器が共伴しないため推定が困難であるが、1は松江市黒田畦遺跡出土の坏に類似するものがあり、13世紀～14世紀[11]、2は、Ⅰ区SD－03出土の坏（123－4）に類似することから12世紀と考えておきたい[12]。3は8世紀末～9世紀初頭と考えられる[13]。遺構の時期は、2の出土位置が床面直上であることから、12世紀頃と考えるのが妥当であろう。



第141図　Ⅱ区SX－01出土遺物実測図（S＝1／3）

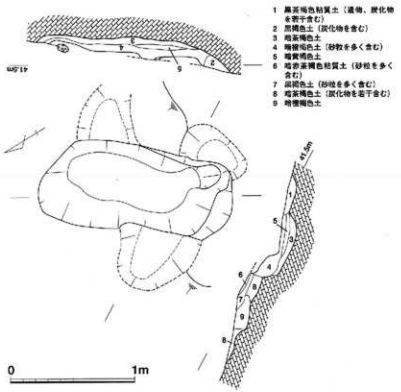


第142図　Ⅱ区SX－01遺物出土状況（遺構S＝1／20、遺物S＝1／4）

SX－02（第143図）

SX－01の西側に隣接して検出された土坑である。平面形はやや不整形な長方形である。長軸は北東－南西にとり、長さ1.5m、幅0.6m、深さ0.2mである。この遺構では、SX－01と異なり斜面上方に溝は検出されなかった。また土層観察からは、SX－02に先行するピットと、後出するピットの両方があることがわかるが、この遺構に伴うと想定されるものは認められなかった。

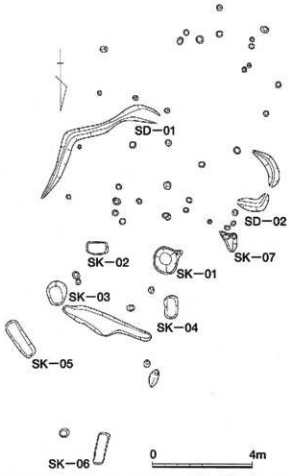
遺構の覆土は、一部に炭化物を含む層が存在するものの、明確な焼土や炭化物層は存在しない。なお、SX－02からは遺物は全く出土しなかった。



第143図　Ⅱ区SX－02実測図（S＝1／30）

Ⅱ区頂上部遺構位置図（第144図）

Ⅱ区の頂上部付近からは、溝状遺構2、土坑7、ピット多数を検出した。位置はⅡ区の北部、標高52m～56mで、北にのびる2つの尾根に挟まれた浅い谷状の地形を呈する部分で、明確な平坦面はないものの、傾斜は非常に緩やかになっている。ピットは40基以上を検出した。ピットの規模は径20㎝程度のものが多く、溝状遺構との関連も含めて検討したが、建物を想定させる位置関係が認められるものは存在しなかった。なお、この付近の遺物包含層からは、縄文土器－陶磁器まで、幅広い時期の遺物が出土している。

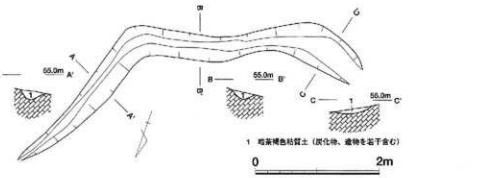


第144図　Ⅱ区SD01・02・SK01～07検出状況（S＝1／150）

SD－01（第145図）

Ⅱ区頂上部の遺構群の中でも最も南側で検出され、浅く落ち込んだ谷

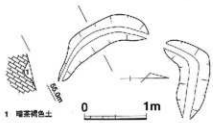
状地形の東側斜面に位置し、標高54m～55mである。規模は長さ6.8m、上端幅20cm～60cm、深さ約10cmである。東西の両端は等高線に平行するように屈曲し、東側では屈曲後直線的に約3mのびる。SD－01周辺で検出されたピットで、建物の柱穴を想定させるものはない。この遺構からは、土器片などが若干出土しているが、小片のため図化できず、時期なども不明である。



第145図　Ⅱ区SD－01実測図（S=1／60）

SD－02（第146図）

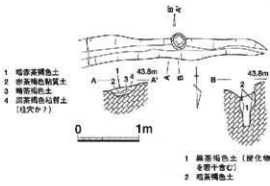
Ⅱ区頂上部にある谷状地形の西側斜面で検出された溝状遺構である。標高は約55mである。溝は斜面上方側で一部途切れ、北側と南側の2つに分かれるが、一連のものであろう。いずれも斜面下方側へ大きく屈曲し、およそ1.5m×2mの範囲を取り囲むように掘り込まれている。南側のものは長さ1.8m、幅20cm～40cm、北側のものが長さ1.3m、幅20cm～50cm、深さ約10cmである。この遺構に伴う遺物は出土していない。



第146図　Ⅱ区SD－02実測図
（S=1／60）

SD－03（第147図）

Ⅱ区北東部、SB－01の東側に隣接して検出された溝状遺構である。標高は43.5mである。この遺構は等高線と平行するように掘り込まれ、東西方向に直線的にのびるもので、東側は調査区外へ続くが、西側では屈曲せず、自然に消滅する。検出された規模は、長さ3.0m、幅20cm～50cm、深さ10cmである。SD－03の斜面下方側では、傾斜はかなり緩やかになっているが明確な平坦面やピットは存在しない。



第147図　Ⅱ区SD－03実測図（S=1／60）

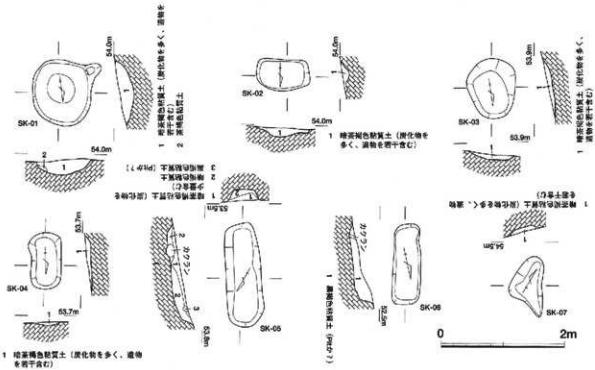
なお、SD－03に切り合って、径20cm～30cm、深さ50cmのピットが1基検出された。ピットの存在が確認できたのがSD－03を完掘した時点だったため、土層観察による前後関係は不明だが、SD－03が後出する可能性が高い。ピットの土層からは、裏込めを行っている様子が観察でき、柱穴と見られるが、SB－01を除き周辺にピットは存在しないため、詳細は不明である。この遺構からは遺物は出土していない。

SK－01～07実測図（第148図）

Ⅱ区では7つの土坑が検出されたが、いずれも頂上部にある谷状地形の部分で確認された。長軸が等高線に直交するものが多いが、SK－02のみ長軸と等高線が平行する。また、覆土中には炭化

物を含むものが多い。

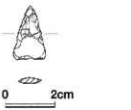
SK－01は1.0m×1.1mのほぼ円形の平面形を呈す皿状の土坑で、深さは最大20㎝である。南東部には小さなテラスをもつ。遺物は石鏃が１点出土している。SK－02は平面形は長方形を呈し、規模は0.8m×0.5mで深さは最深部で10㎝と浅いものである。覆土中には土器片などを含んでいるが、小片のため図化できず、時期などについては不明である。SK－03は平面形は楕円形を呈し、規模は0.8m×1.0m、深さ10㎝を切る浅い土坑である。覆土中の遺物は小片のため時期などは不明である。SK－04は、小判形を呈す平面形をもち0.9m×0.5m、深さ10㎝以下の極めて浅い土坑である。この土坑の遺物も小片のため時期などは不明である。SK－05は平面形は長方形で1.7m×0.6m、深さは20㎝である。この遺構からは遺物は出土していない。SK－06も平面形は長方形で、1.3m×0.5m、深さは斜面上側で30㎝である。遺物は出土していない。SK－07は、平面形は不整形な三角形で一辺0.7m～1.0m、深さ約10㎝である。覆土中には遺物も含まれているが、小片のため時期などは不明である。



第148図　Ⅱ区SK－01～07実測図（S＝1／60）

SK－01出土遺物（第149図）

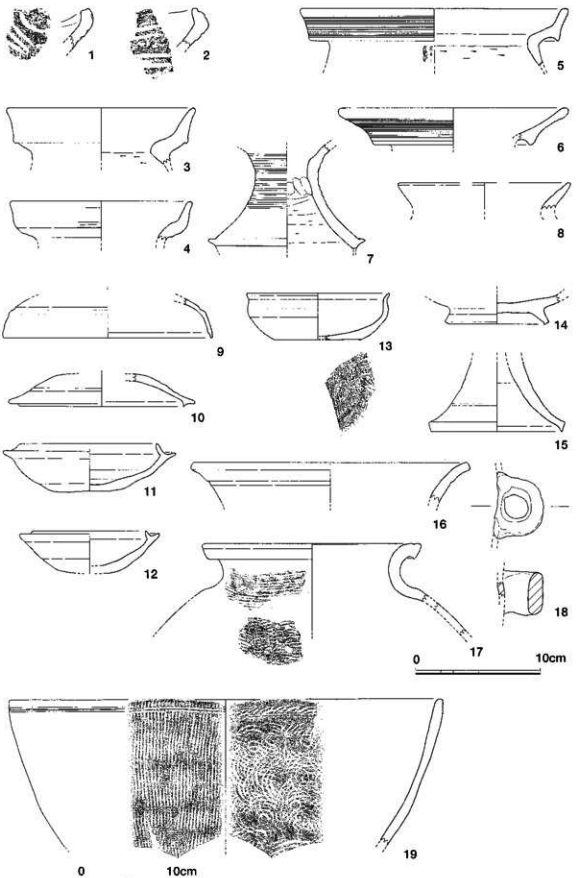
SK－01から出土した石鏃は安山岩製で、わずかに欠損があるが、ほぼ完形品である。剥離は総じて大きい。長さ2.2㎝、最大幅0.9㎝、厚さは最大３㎜で、無茎平基のものである。時期は縄文時代であろう。



第149図　Ⅱ区SK－01出土遺物実測図（S＝2／3）

Ⅱ区遺構外出土土器（第150・151図）

第150図１、２は縄文上器の口縁部である。１は波状口縁となるもので、３本単位と見られる沈線をもち、端部には円形の孔



第150図　Ⅱ区遺構外出土遺物実測図（1）（S=1／3、19のみS=1／4）

をもつ。2も波状口縁で、端部は肥厚しやや内傾する。2条単位の沈線が施される。

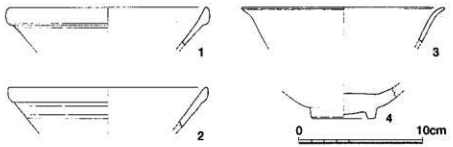
3～6は弥生土器である。3は複合口縁の口縁部で、口径15.0㎝である。口縁部外面には沈線は認められず、内外面ともヨコナデを施し、内面頸部以下はヘラケズリである。4も複合口縁の口縁部で、口径は14.4㎝である。風化が進んでいるが、口縁部外面にはわずかに平行沈線が認められる。調整はヨコナデと見られる。5も複合口縁の口縁部で、口径は21.6㎝である。口縁部外面には8条の平行沈線を施し、頸部外面はタテ方向のハケメ、内面はヘラケズリである。6は鼓形器台の上台部で、口径は18.0㎝である。端部外面には10条の平行沈線を施す。調整は内外面ともヨコナデであるが、内面は特に丁寧なナデである。7は高坏の脚部で、脚端部を欠くが、複合口縁状の形態を取るものである。外面には12本の浅いヘラ描き沈線をもち、脚端部にも細い沈線が施される。内面は、最も径が細くなる付近に指頭圧痕が認められ、それ以下はヘラケズリ調整される。8は土師器の甕の口縁部であるが、小片のため口径は不明で、風化のため調整も明らかではない。

9～18は須恵器である。9は坏蓋で、口径16.8㎝である。肩部に沈線をもち、口縁端部は段状に仕上げられる。天井部を欠くため、この部分の調整は不明であるが、他は回転ナデである。10はかえりのつく坏蓋で、口径は13.4㎝である。天井部を欠くが、つまみのつくものと考えられる。天井部内面は静止ナデ、その他は回転ナデである。11は坏身で、口径は11.2㎝、器高は3.8㎝である。かえりは短く、やや内湾しながら立ち上がり、底部は平底気味になる。底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。12も坏身で、口径は9.3㎝である。かえりは、11より更に短いものである。底部の内外面にわずかに静止ナデが認められ、その他は回転ナデである。13も坏身で、口径11.5㎝、器高3.7㎝、底径7.0㎝である。口縁部は内湾し、端部は短く外方に屈曲する。底部は静止糸切りで切り離され、外面底部と体部の境界付近は静止ナデ、その他は回転ナデである。14は高台付きの皿ないし坏で、底径は8.4㎝である。体部の立ち上がりから見て、高台は底部の最外周につくものと考えられる。調整は底部内面は静止ナデ、それ以外は回転ナデである。15は高坏の脚部で、底径は10.6㎝である。脚端部外面は面を持ち、内傾する。3方向と見られる透孔をもつが破面と重なるため、形状は明らかにできず、図上でも表現できなかった。透孔の下位には浅い沈線がめぐる。調整は内外面とも回転ナデである。16は甕ないし壺の口縁部で、口径は22.0㎝である。緩やかに外反する口縁に、太く浅い1本の沈線がめぐる。調整は内外面とも回転ナデである。17は甕で、口径は17.3㎝である。口縁部は外反して肥厚し、端部外面には面をもち、体部外面に矢羽根状のタタキが認められる。焼成は軟質で、土師質のように見える。

18は甑の把手と見られる。半環状のもので長さ4㎝、径2㎝の孔をもつものである。

遺物の時期は、1・2が縄文時代後期前葉～中葉、7が弥生時代中期、3～6が弥生時代後期で、18もこの時期のものと推定される。8は古墳時代中期～後期、9が古墳時代後期、10～12・15が国庁の1形式、13が同3形式、14が同2形式ないし3形式[14]に相当し、19も詳細な時期は不明であるが、奈良時代のものであろう。17は、類例が少なく時期の判断は困難であるが、安来市河原崎古墳出土の矢羽根状タタキをもつ甕が14世紀代とされることから[15]、これに近い時期のものとみられる。

第151図は陶磁器で、1～3は白磁、4は青磁である。1は体部から口縁部にかけてわずかに内湾するもので、端部は玉縁をもつ。2も同様な形態であるが、玉縁がやや薄く長い。3は口縁部が外反するもので、端部の釉が掻き取られている。4は底部で、断面四角形の高台をもち、底部は体



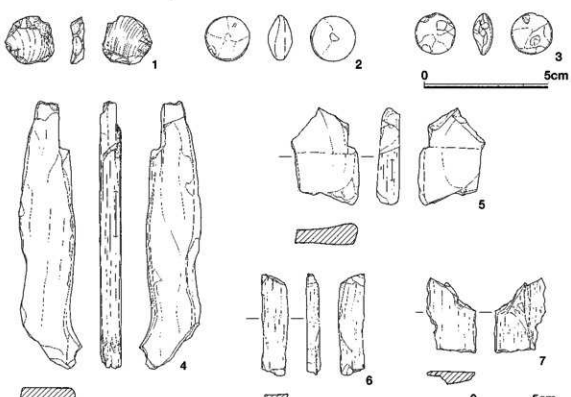
第151図　Ⅱ区遺構外出土遺物実測図（2）（S=1／3）

部と比較して厚いものである。

1・2は大宰府編年の白磁Ⅳ類[16]に比定される。3は森田分類のA類[17]と見られる。4は高台の形態や底部の厚さから龍泉窯系青磁の碗Ⅰ類[18]と考えられる。

Ⅱ区遺構外出土玉作関係遺物（第152図）

Ⅱ区の遺構外からは、半玉未成品と砥石が出土している。1は碧玉製で、表・裏面に大きな剥離が認められる調整剥片である。平面形はほぼ円形に整形され、径は約2㎝、厚さは0.4㎝～0.5㎝である。側縁など一部に自然面も残り、調整の途中で薄くなりすぎたため廃棄された可能性もある。2も碧玉製で、剥離は認められず全面研磨を行っており、仕上げ研磨品である。径は1.8㎝、厚さは最大1.0㎝である。研磨の単位も確認できるが、整形はほとんど終了している。3はやや灰色がか



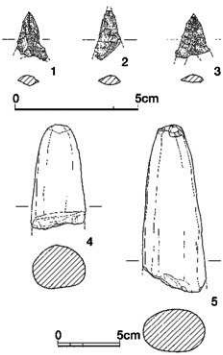
第152図　Ⅱ区遺構外出土遺物実測図（3）（1～3：S=2／3、4～7：S=1／3）

った石材を使用しており、碧玉の風化したものか、黒色泥岩製か判別が難しい。一部に剥離が残るが、ほぼ全面研磨を施すもので、仕上げ研磨品と考えられる。径1.6cm、厚さは0.8cmである。4～7は砥石である。6のみ珪化木で、それ以外は結晶片岩と見られる。4は図の上端と下端、片側の側面を除き、研磨に使用している。内湾する側面が最も滑らかになっており、内磨き砥石として使われたことがわかる。5も表・裏面と側面の一方に研磨痕が残る。表・裏面は凹面となり、光沢をもつほど使い込まれている。6は表・裏面と一方の側面が使用されたものと見られるが、わずかに平滑になる程度で研磨の形跡ははっきりしない。7は表・裏面が平滑になっている。

Ⅱ区遺構外出土石器（第153図）

1～3は石鏃で、いずれも黒曜石製である。1はかえりを欠いており、現存長2.0cmである。2は先端とかえりを欠くもので現存長2.0cmである。3も両方のかえりを欠き、現存長1.7cmである。いずれも無茎凹基である。

4・5は磨製石斧であるが、刃部が欠損している。現存長は4が8.4cm、5が12.4cmである。



第153図　Ⅱ区遺構外出土遺物実測図（4）
（1～3：S=2／3、4・5：S=1／3）

第４節　Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、北～北西へ延びる尾根の先端付近から斜面に位置する。標高は37m～51mで、尾根に近いところでは傾斜がきついが、斜面下方では緩やかになり、遺構はこの付近の緩斜面に集中する。Ⅲ区の北東側から北側にかけて大きな崖崩れ部分があり、これについては調査ができなかった。また、Ⅱ区と同様に斜面から湧水があり、地滑りによって生じたと見られる住居床面の段差が確認されたほか、斜面の数箇所で等高線に平行して走る地割れと見られる亀裂も存在するなど、地盤は不安定である。

検出した遺構は、竪穴住居１、掘立柱建物跡３、溝状遺構１、土坑１である。遺構の時期は、古墳時代後期～奈良時代を中心とするものと考えられる。また、遺構外の遺物は、主に斜面から古墳時代後期～奈良時代の須恵器を中心に大量の土器が出土したほか、各種の玉未成品などの玉作関係遺物が発見された。

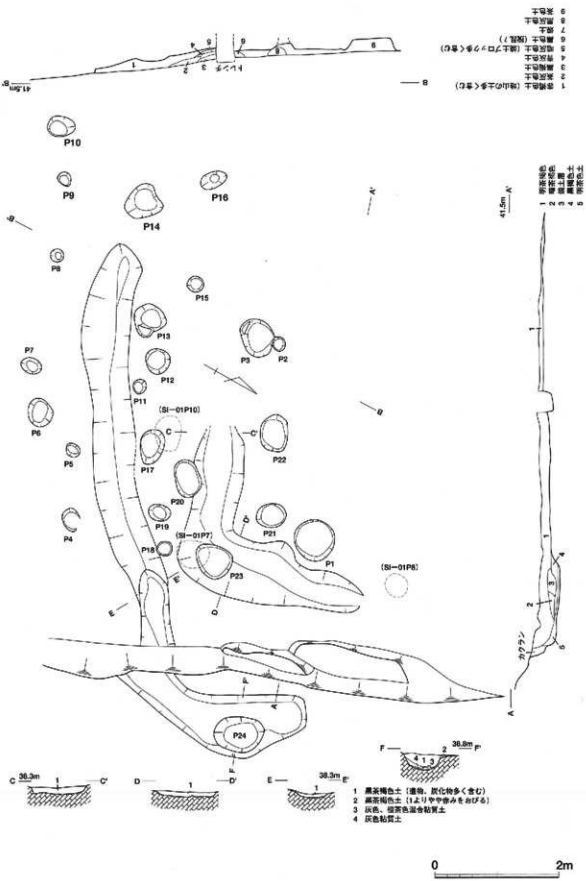
SB－01（第154・155図）

Ⅲ区北西部の緩斜面で検出された竪穴住居状遺構である。検出面の標高は38m～39mで、遺構の東側部分では、地滑りにより50cm前後の段差が生じている。さらにこの遺構の下層、地山面直上にはSI－01が存在することから、溝やピットが錯綜し、それぞれがどの遺構に属するのか充分に把握しきれなかった部分がある。

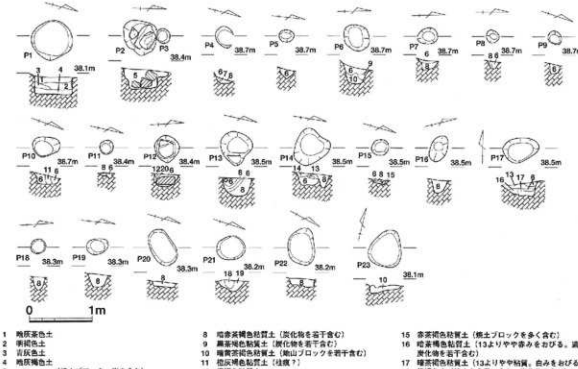
SB－01は、基本的に斜面を削平して床面をつくり出すものと考えられ、斜面の上側には長さ5.9m以上、幅0.6m～0.8m、深さ10cmの溝が等高線に平行するように掘りこまれている。この溝は、西側では直線的にのび、東側では別の溝と切り合っている。東側の溝は西側の溝よりやや深く、地割れによる段差でずれているが、２m東側へのびて斜面下方側へ屈曲する。この２つの溝の前後関係については土層観察では確認できなかった。このほか、地滑りによる段差にかかる部分に1.4m×0.2mと1.9m×0.5mの小さなテラスが存在し、SB－01と関係をもつ可能性が高いが、復元することはできなかった。このほか、床面と見られる平坦面でも全長5.2m、幅0.3m～1.0m、深さ10cmの溝を検出した。この溝の平面形はL字形で、東側で斜面下方側に屈曲し、両端は自然に消滅する。先述した２つの溝とは若干方向を異にしている。床面のピットと切り合っており、後述するSI－01の周溝である可能性も考えられたが、レベルや位置関係から検討したところでは確証は得られなかった。

SB－01周辺からは合計24基のピットを検出した。ピットの規模は、径20cm～70cm、深さ10cm～30cmで、溝の外側で検出されたものは総じて小さい傾向にある。溝の方向やピットの位置関係などから、P23、P20、P12、P３、P21、P22を柱穴と推定した。柱穴間の距離は、P23－P20間が1.4mで最も狭く、P20－P12間が1.9mと最も広い。その他は1.7mから1.8mである。柱穴としたピットの規模はP12が最も小さく40cm×50cm、P１が最も大きく径70cmで、深さは10cm～30cm、底面の標高は37.8m～38.0mで、ピットの深さと底面レベルにばらつきが認められる。またSI－01のP7、P8、P10としたピットがこの遺構に伴うものである可能性も否定できない。なお、P12、P３内からは大形の石が検出され、ピットの性格に違いがあることも考えられる。

以上のように複数の溝や、段差付近でのテラスの検出などから考えると、SB－01は細かく見るといくつかの時期の遺構が重なり合った状態を検出したものとも考えられる。



第154図　Ⅲ区SB−01実測図（S=1／60）



第155図　Ⅲ区SB－01ピット実測図（S=1／60）

SB－01出土遺物（第156～158図）

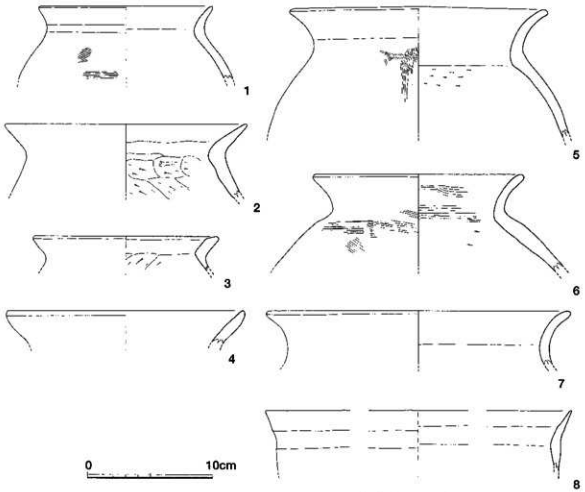
第156図は土師器で、甕の口縁部付近である。2はP1から、その他は覆土中からの出土である。

1は口縁が短く外傾するもので、口径は13.8㎝である。調整は口縁部と内面頸部以下が風化のため不明であるが、体部外面にはナナメ及びヨコ方向のハケメが観察できる。2は口縁部が外傾するもので、口径19.0㎝で器壁も厚みがあり、大形品と考えられる。調整は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部内面はヨコ方向のヘラケズリ、外面は風化のため不明である。3も口縁が短く外傾するもので、口径は14.5㎝である。体部に比して口縁部が肥厚し、口縁端部上面には面をもつ。調整は外面と口縁部内面はヨコナデ、内面の頸部以下はヘラケズリである。4は外反する口縁の端部が上方に向かって細くなるもので、口径は18.8㎝である。調整は内外面ともヨコナデである。5は口縁が緩やかに外反するもので、口径は20.0㎝である。調整は口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテ及びナナメ方向のハケメ、内面はヘラケズリである。6は外反する口縁をもち、口径は16.6㎝である。体部の器壁が口縁部より厚くなり肩が張るもので、調整は口縁端部内面～外面がヨコナデ、口縁部内面と体部外面がヨコ方向のハケメ、内面頸部以下はヘラケズリである。7は口径23.8㎝の大形のもので、調整は風化のため不明である。8は1～7と器形がかなり異なり、他の器種である可能性も持つが、一応甕の口縁部と考えた。器壁がかなり薄く、端部は斜め上方に直線的に引き出される。小片であり、風化が著しいため径、調整とも不明である。

第157図は須恵器である。22がP22から出土しているほかは覆土中からの出土である。

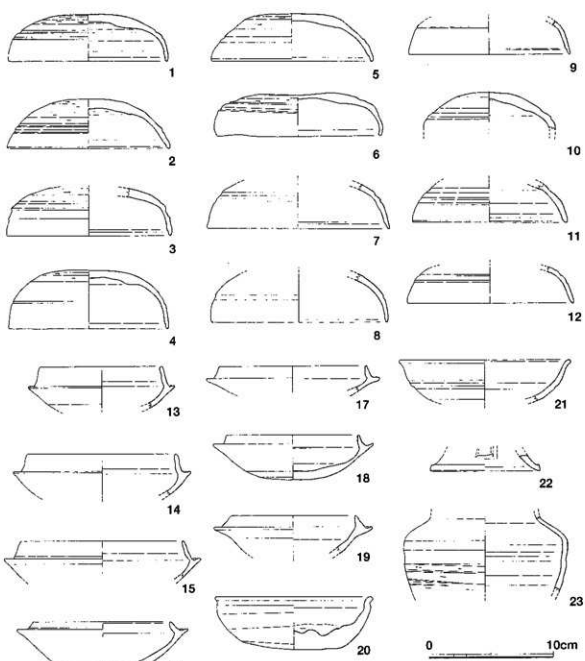
1～12は坏蓋で、体部と天井部の境界付近に2本の沈線を入れ、突帯を表現するものが多い。1・2は、口縁端部のやや上位に沈線を入れるものである。1は口径12.7㎝、器高3.8㎝である。天井部は回転ヘラケズリを施す。2は口径13.0㎝、器高3.9㎝で、器形の特徴は1と同様である。調整

は回転ヘラケズリが上位の沈線直上から行われるが、ヘラケズリ後ナデ調整を施すものと見られ、ケズリの単位が不明確で天井部付近では砂粒の移動痕がほとんど認められない。3・4は口縁端部が段状になるものである。3は、口径13.2㎝で、天井部付近は回転ヘラケズリを施す。4は、天井部と体部の境界付近に1本の沈線をもつもので、口径は12.6㎝、器高は4.8㎝である。回転ヘラケズリの範囲が狭く、天井中心部にはケズリ残しがある。5は口縁端部の沈線が不明瞭なものである。口径は12.8㎝、器高は3.8㎝で、天井部は回転ヘラケズリである。6は口縁部が内湾し、口縁端部を丸くおさめるもので、口径は13.2㎝、器高は3.5㎝である。天井部は回転ヘラケズリで調整する。7は口縁端部がわずかに外反し、内面に段を持つもので、口径は14.6㎝である。突帯は2本の沈線で表現され、天井部を欠くため、ヘラケズリ調整は認められない。8は端部を丸くおさめるもので、口径は14.2㎝である。天井部と体部の境界付近には1本の沈線を施す。風化のため調整は不明である。9は口縁端部に段をもち、口径は13.0㎝である。天井部と体部の境界付近には沈線が1本認められるが、破損のためこれより上位については調整も含めて不明である。10は2本の沈線で突帯を表現するもので、天井部はヘラ切り後ナデ調整を施し、ヘラケズリは認められない。11は口縁端部のやや上位に沈線を入れるもので、口径は12.3㎝である。天井部を欠き、回転ヘラケズリの有無については不明である。12は口縁端部を丸くおさめるもので、口径は13.4㎝である。風化が著しく、調整は不明である。



第156図　Ⅲ区SB−01出土遺物実測図（1）（S=1／3）

13～20は坏身である。16・18の底部には回転ヘラケズリが観察できるが、それ以外は底部を欠くものが多く、ヘラケズリの有無は不明である。13は坏身の立ち上がりが長くわずかに内傾するもので、端部は丸くおさめる。口径は、9.8cmである。14は立ち上がりの端部がやや鋭くなるもので、口径は12.0cmである。15は立ち上がりの内傾が強くなるもので、口径13.1cmである。16は立ち上がりが短く内傾するもので、口径11.1cm、器高4.1cmである。回転ヘラケズリは底部の外周のみで、底部はヘラ切り後ナデ調整を施す。17も16と同様の器形で口径11.9cmである。18は口径10.6cm、器高3.6cmでヘラケズリは底部全体に施している。19は立ち上がり全体が肥厚し、断面三角形を呈す。口径は10.0cmである。20は口縁端部が外側へ短くつまみ出されるもので、口径は12.5cmである。底



第157図　Ⅲ区SB－01出土遺物実測図（2）（S=1／3）

部は回転糸切りで、他は回転ナデ調整である。21は高坏の坏部である。浅い碗形を呈し、端部はわずかに外へ屈曲する。口径は13.6cmで、坏部外面には2本の沈線を施し、突帯状につくりだす。調整は内外面とも回転ナデである。22は高坏の脚端部で、脚端径8.6cmである。透孔の痕跡が一部で観察でき、方形ないし三角形のものと見られるが、切り込み状のものである可能性もある。23は壺の体部と考えられる。最大径は肩部にあり13.2cmである。内面と外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリである。

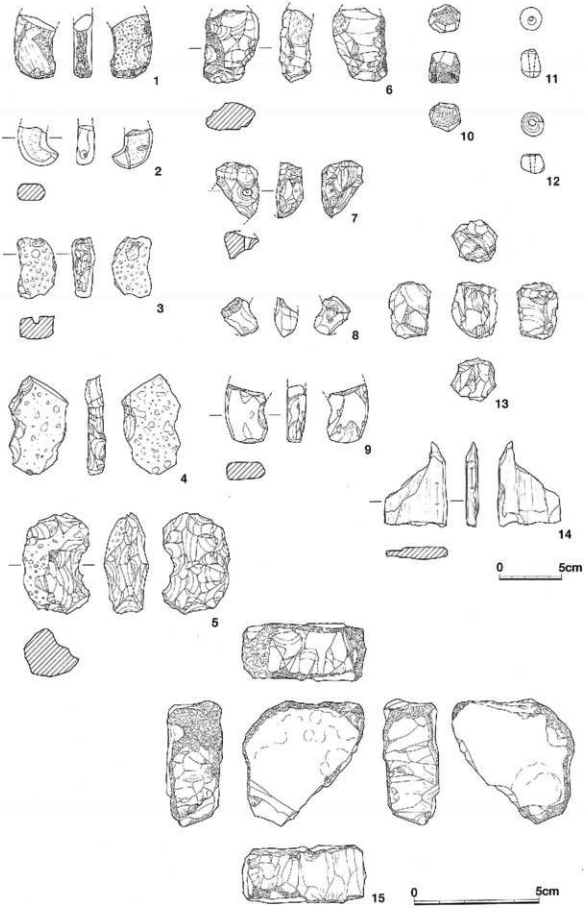
SB－01出土の遺物は、須恵器の特徴から大谷編年の出雲3期[10]を下限とし、国庁編年の3形式[20]を下限とする幅広い時期のものである。また、SB－01に伴う溝が複数存在し、ピットも多数検出されたことから建て替えの可能性があり、遺構もある程度の時期幅をもつものと推定されるが、P22から出土した157図－22の特徴から出雲5期～6期[21]と考えておきたい。

SB－01出土玉作関係遺物（第158図）

SI－01からは、勾玉のほか各種の未成品、砥石、ハンマーなどの玉作関係遺物が出土している。1～9は勾玉未成品で、10は切子玉、13は管玉の未成品と考えられる。11は棗玉、12は丸玉で、この2つは完成品の可能性もある。石材は1・10が水晶、2～9がめのう、11・13が碧玉である。12については不明である。

1は、敲打整形品である。一方の面には自然面を残し、側縁部には剥離調整も残るが、表・裏面とも敲打整形を施す。2は丁寧な研磨を施すが、剥離や節理面がわずかに残り、一次研磨品と考えておく。尾部には敲打痕も認められる。なお、1／4～1／3程度が欠けているが、破損部の位置や剥離の方向から、穿孔時に割れたものと見られる。3も調整剥片と見られる。表・裏面はほとんど自然面のままで、平面形は半月形に整形され腹面も剥離が施されている。穿孔が開始されているが、1／3程度進んだところで放棄している。4も調整剥片である。表・裏面は自然面のままで、側面に大きな剥離を施し平面形を長方形に整形している。長さ4.0cm、幅2.4cm、厚さ0.7cmで、長さや幅に比して薄いものである。5は、表面は1／2程度自然面を残すが、各面とも大きな剥離で大まかな勾玉の形に整形する。断面形などから見ると、他の勾玉未成品とは異なり、一旦半月形または長方形の平面形を作り出す工程を省略しているようである。6も敲打整形品である。各面とも比較的大きな剥離を施すが、腹面の一部には敲打痕が認められる。石材の質は不均質で、一部破損している。7は一次研磨品である。大きく破損しており自然面も残るが、残存する側面の一部に敲打痕や粗い研磨が認められる。8は一次研磨品である。1／2以上が欠損するもので、腹面は丁寧な研磨を施し、表・裏面については研磨されているが敲打調整時の凹凸が認められる。9は一次研磨品である。各面とも粗い研磨を施し、一部に剥離が残るが、風化などのため打撃の方向は明瞭でない。全体の1／4～1／3程度を欠っている。10は、水晶の結晶の形状を生かして六角柱状に整形されたと見られる敲打整形品で、高さ1.3cm、幅はいずれも1.2cmである。側面には自然面がそのまま残る部分もあるが、各面とも敲打調整され、剥離はごく一部に残るのみである。

11は長さ1.2cm、径0.8cmで、全体に丁寧な研磨を施す。仕上げの研磨段階であるのは確実で、完成品の可能性もある。12は石材は不明であるが、黒色で軟質の石材を使用している。平面形はやや歪んでいるがほぼ円形で、径は0.9cm、高さ1.3cmである。一部破損しているがほぼ完形で、穿孔部付近はわずかに面取りされている。13は調整剥片で、角柱状に加工され、断面が四角形に近い形状を呈する。長さ2.2cm、厚さは1.2cm～1.3cmでほとんど自然面を残す面もある。



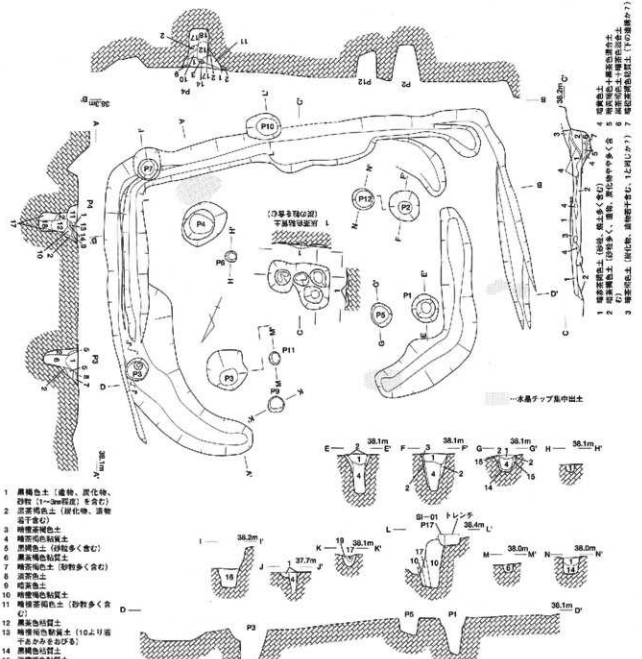
第158図　Ⅲ区SB−01出土遺物実測図（3）（S=2／3、14のみS=1／3）

14は結晶片岩製の砥石である。破損した面以外はかなり磨滅し、側面も内磨き砥石として使用されている。15はめのう製のハンマーである。表・裏面は自然面のままであるが、側面には調整と見られる剥離があり、利用しやすいように加工したものであろう。

SI－01（第159図）

SB－01の下層、地山直上に掘り込まれた竪穴住居である。標高は約38mであるが、床面は地滑りの影響を受け、北東側が低くなっており、両端でのレベル差は30cmに達する。

ピットや溝の検出状況から、平面形を異にする２つの遺構が重なり合っていることがわかる。１



第159図　Ⅲ区SI－01実測図（S＝1／60）

つは平面形が隅丸方形で、東側～南側の壁体溝が失われているが、規模は、少なくとも6.0m×5.0mである。壁体溝は幅50cm～90cm、深さは10cm～30cmで、北西側には存在せず、南西側の一部で途切れている。柱穴はP4－P12－P5－P3と見られ、柱穴間の距離は1.9～2.6mである。柱穴は、東側の2つが径60cm～80cm、深さ60cm前後であるのに対し、西側の2つが径20cm前後、深さ30cm前後でやや規模が小さい。

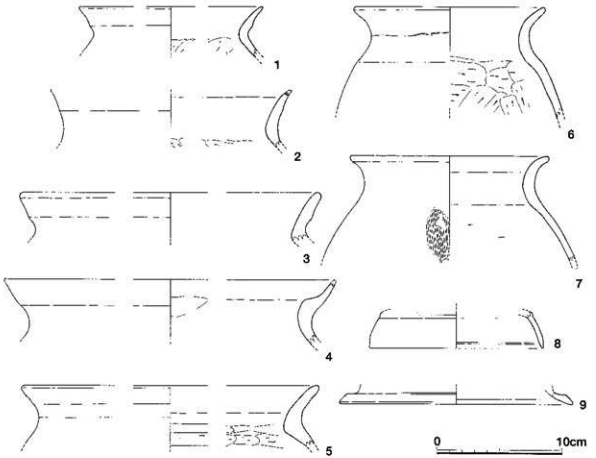
もう一つは、平面形がより方形に近いもので、6.9m×4.8m、壁は高さ20cm～30cmである。壁体溝は、幅20cm～40cm、深さ10cm～20cmであるが、壁に沿わない部分や、存在しない部分もある。柱穴は、P1－P2－P3－P4で、東西3.4m～3.5m、南北1.7m～2.6mである。柱穴の規模は、P1・P2とも径40cm～50cm、深さ60cmで、P3・P4の規模に近いものである。中央付近には径20cm～30cm、深さ5cm程度のピットが4基存在するが、切り合い関係については、ピットが非常に浅く、十層観察ができなかったため把握できなかった。これらのピットはいわゆる中央ピットとみられるが、2つの住居跡のうちどちらに属するのかは不明である。

また、主柱穴以外にもいくつかピットが確認され、P10のように柱穴の可能性をもつものも存在するが、SI－01との関係はつかめなかった。

SI－01出土遺物（第160図～第162図）

SI－01からは、土師器、須恵器、土作関係遺物が出土している。

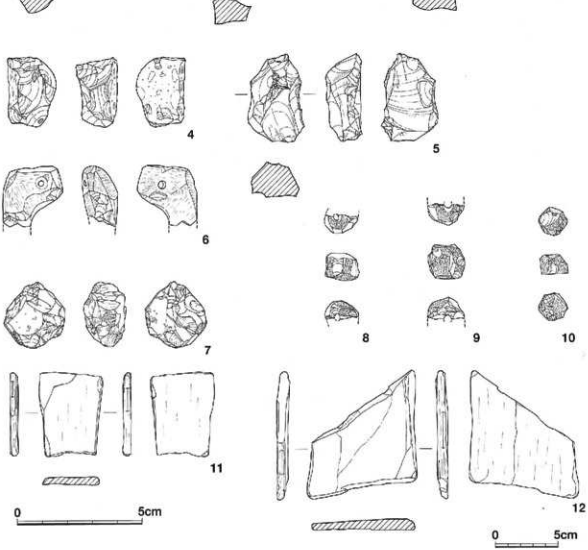
第160図1～7は土師器でいずれも甕の口縁部、8・9は須恵器で8が坏蓋、9が器種不明の脚



第160図　Ⅲ区SI－01出土遺物実測図（1）（S=1／3）

部である。1は、口縁部外面にわずかな凹面をもち、複合口縁を意識したものと見られる。口縁部外面はヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリを施す。2・3も同様な口縁部形態で、2の内面頸部以下にヘラケズリ、3の口縁部外面にヨコナデが認められるほかは、調整不明である。4は口縁部が薄くなり外傾するが、頸部と口縁部の境界付近には稜をもつものである。口縁部外面はヨコナデを施すが、その他の調整は不明である。5～7は口縁部が外反するもので、口径は5が不明、6は14.9cm、7は16.0cmである。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリである。5・6は、体部外面の調整が不明であるが、7にはタテ方向のハケメが認められる。

8は口径13.8cmで、端部がわずかに段状になるものである。体部と天井部の境界付近には1本の沈線が施されるが、天井部の大部分を欠いているため、ヘラケズリなどの詳細は不明である。9は



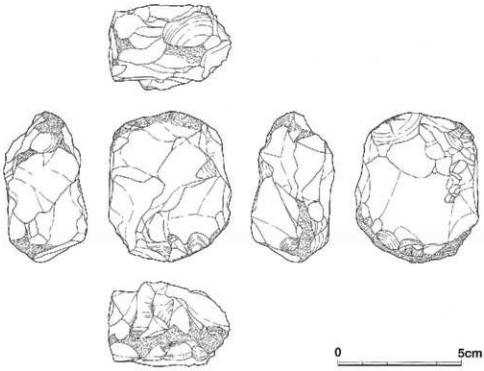
第161図　Ⅲ区SI－01出土遺物実測図（2）（S=2／3、12のみS=1／3）

端部が肥厚し、径は18.8cmと推定される。内外面とも回転ナデを施す。

第161図は玉未成品と砥石である。1～7は勾玉未成品であるが、7は平玉未成品の可能性もある。8～10は臼玉未成品と考えられ、11・12が砥石である。

1は水晶製で、敲打整形品である。背面の一部に自然面を残すが、表・裏面の大部分は敲打が施される。2はめのう製で、調整剥片と見られる。長さ3.3cm、幅1.4cm～1.8cmで、表・裏面及び尾部の大部分は自然面のままである。3もめのう製で、半月形に整形されているが、表・裏面は自然面のままである。調整剥片と考えられる。4もめのう製で、半月形を呈す調整剥片である。表面と腹面は自然面のままである。5は、碧玉製で調整剥片と考えられるが、剥離が大きいものが多く、素材剥片と呼ぶべきか。6は碧玉製と見られるが、やや軟質で白みがかった緑色である。1／2程度を欠損しているが、表・裏面に粗い研磨を施す一次研磨品である。穿孔が行われ、貫通している。7はめのう製で一次研磨品である。表・裏面の一部に敲打の後粗い研磨を施している。8は石英製で、ほぼ全面に敲打調整を施す。多角形になる可能性もあるが、稜は明瞭ではない。穿孔は終了しているが、孔の位置は中心からずれている。9は水晶製で、敲打整形品である。形状は8と同様で、穿孔が開始されているが貫通せず、1／2程度が破損している。これも孔の位置が中心からずれている。10は水晶製で敲打整形品である。不整形な六角形に加工され、ほぼ全面に敲打調整を施す。形状は8・9に近いが、より小形のもので、穿孔は開始されていない。11・12はいずれも結晶片岩製とみられ、各面とも平滑であるが、最も磨滅しているのは両側面で、玉の内磨き砥石としての使用頻度が高かったものと見られる。

162図はめのう製のハンマーである。側面につぶれが認められる。側面には大きな剥離があり、握りやすいように若干の整形を施したものとみられる。



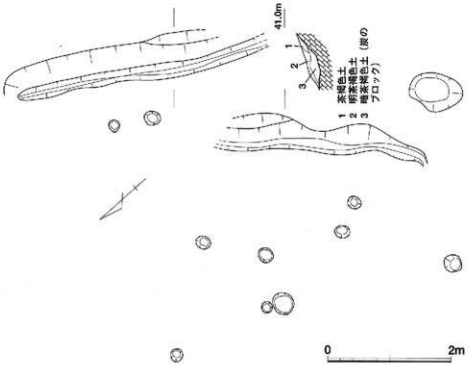
第162図　Ⅲ区SI－01出土遺物実測図（3）（S=2／3）

遺物の時期は、松山編年Ⅲ期[22]～出雲３期[23]と考えられる。遺構の時期は、平面形の異なる複数の住居が切り合っており、ある程度の時期幅を考えなければならないが、床面直上の出土遺物がないため、時期の詳細は不明である。

SB－02・03（第163図）

Ⅲ区北側の緩斜面で検出された掘立柱建物跡と見られる遺構である。検出面の標高は約40mで、斜面下方側にはSB－01・SI－01が存在する。

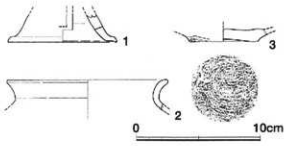
SB－02は、斜面を掘り込み、その下側に等高線に平行するように長さ4.0m以上、幅20cm前後の溝をつくりだしている。この溝は、北側では斜面下方側へ屈曲せずに直線的にのびるが、南側の状況は不明である。溝の下方側には床面と考えられるような平坦面は存在しないが、ピットが２基検出されている。径20cm前後、深さは10cm以下のもので、溝やピット同士の位置関係を考えると、建物を想定するのは困難である。



第163図　Ⅲ区SB－02，03実測図（S＝1／60）

SB－03は、長さ3.3m、幅0.2m～0.6mの溝と８基のピットからなる。溝は東端部の状況は不明であるが、西側では斜面下方側にわずかに屈曲する。ピットの規模は径20cm～40cmで、SB－02と同様、建物を想定できるようなピットの配置は認められない。

なお、SB－02と03の間には地滑りと見られる亀裂が認められる。両方の溝は約２m離れており、方向も若干異なるが、地滑りの影響で１本の溝が切り離されたことも考えられる。



第164図　Ⅲ区SB－02，03出土遺物実測図
（S＝1／3）

SB－02・03出土遺物（第164図）

SB－02・03の覆土中から土師器と須恵器が出土している。1、3がSB－02、2がSB－03からの出土である。なお、SB－02からは玉作関係遺物も出土したが、これについては後述する。

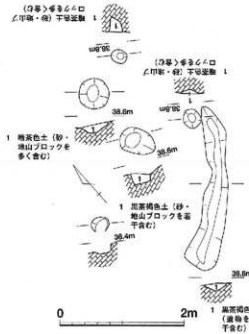
1は須恵器で、高坏の脚部である。端部は外反したのち下方へ屈曲し、脚端径は8.6cmである。透孔の痕跡があるが、形状は不明である。

内面は回転ナデであるが、外面は風化のため調整不明である。2も須恵器で、甕の口縁部と見られ、短く外反する。口径は12.8cmで、内外面とも回転ナデ調整が施される。3は土師器で、坏の底部である。底径は5.7cmで、底部は回転糸切りであるが、他の部分については、風化のため調整不明である。遺物は高坏が出雲4期～5期[24]、土師器坏は奈良時代以降のものと見られる。遺構の時期については、遺物から古墳時代後期以降と考えられるが、詳細は不明である。

SB－04（第165図）

SB－01・SI－01の北東に隣接して検出された掘立柱建物跡と見られる遺構である。検出面の標高は約38mである。

遺構は、溝とピット5基からなる。溝は等高線に平行するように掘り込まれ、緩やかな弧状を呈するもので、長さ2.7m、幅2.0m～0.5m、深さは10cmである。ピットは径20cm～50cm、深さ10cm～20cmで、位置関係から建物を想定できるものは認められなかった。

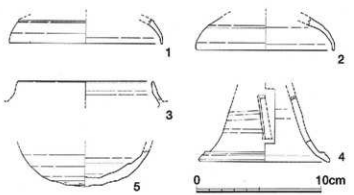


第165図　Ⅲ区SB－04実測図（S＝1／60）

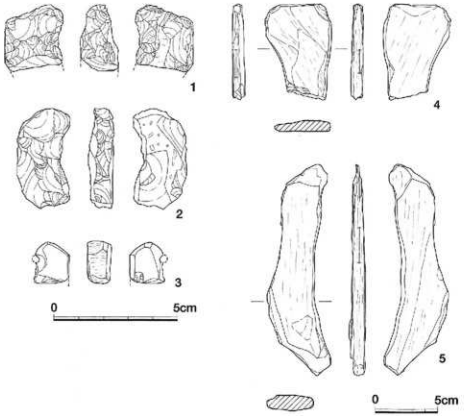
SB－04出土遺物（第166図）

SB－04からは須恵器が5点出土している。

1は坏蓋である。口縁のやや上側に弱い稜をもち、端部を丸くおさめるもので、口径は12.4cmである。体部と天井部の境界付近には段を持つが、天井部を欠いているため詳細は不明である。調整は内外面とも回転ナデを施す。2も坏蓋で、口径は11.0cmである。口縁部の形態は1と同様であるが、体部と天井部の境界は浅い沈線で表現される。3は坏身で、口縁部はやや内傾し、端部は鋭くなる。口径は10.9cmである。4は高坏の脚部である。端部は肥厚し、沈線が1条めぐり、透孔の痕跡も認められ、3方向とみられるが、形状は不明である。5は底部と見られる。最下部はヘラ切り後ナデを施し、その外周のわずかな範囲にのみヘラケズリが認められ、他は強い回転ナデで調整



第166図　Ⅲ区SB－04出土遺物実測図（S＝1／3）



第167図　Ⅲ区SB－02，04出土玉作関係遺物実測図（1～3：S=2／3、3・4：S=1／3）

される。遺物の時期は、蓋坏の特徴などから概ね出雲５期[25]と見られる。

SB－02・04出土玉作関係遺物（第167図）

SB－02・04からは、勾玉の未成品と砥石が出土した。４がSB－02、他はSB－04からの出土である。１はめのう製で、調整剥片である。１／２程度を欠くもので、一部に自然面が残るが、ほぼ全体に剥離が及ぶ。２もめのう製で、腹面も作り出され、平面形はC字状を呈する調整剥片である。表面の一部には自然面が残る。３は碧玉製で、白みがかった緑色を呈する。剥離はほとんど認められず、全体に研磨を施すが、表面は光沢をもち、仕上げ研磨品と考えられる。穿孔が行われているが、大きく破損している。４・５は砥石である。いずれも結晶片岩と見られるもので、表・裏面の磨滅は顕著でなく、側縁の磨滅が著しいことから、主に内磨き砥石として使用されたと考えられる。

SD－01（第168図）

Ⅲ区の中央部、斜面が緩やかになる傾斜変換点付近で検出された溝状遺構である。検出面の標高は42m～43mである。全長13.5m、幅は0.3m～1.0m、深さは30㎝～40㎝で、等高線に平行するように掘り込まれ、西側では斜面下方側に鈍角に屈曲するが、東側では屈曲せず自然に消滅する。加工段などに伴う溝の可能性も考えられたが、下方側に明確な平坦面は存在せず、ピットなども認められなかった。なお、溝周辺の覆土からは碧玉などのチップがわずかに出土しているが、SD－01との関係は不明である。

SK－01（第169図）

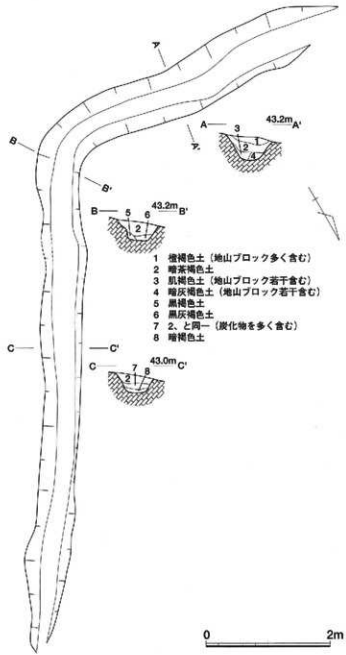
Ⅲ区下方の緩斜面に位置し、SB－02の斜面下方側に隣接する。検出面の標高は約40mである。平

面形は楕円形で、長径2.2m、短径1.4m、深さは1.2mである。土坑内からは人頭大の自然石や須恵器などが底面からやや浮いた状態で出土した。

SK−01出土遺物（第170図）

SK−01からは、須恵器が2点出土している。

1は坏蓋と見られる。口径は9.4cmで、口縁は直線的に開き、端部は丸くおさめるものである。天井部の大部分を欠くため詳細は不明だが、体部との境界付近で緩やかに屈曲するようである。調整は内外面とも回転ナデである。2は、壺ないし甕の頸部付近である。遺存部分で見る限り、頸部から口縁部にかけて文様を確認することはできない。断面には粘土紐の接合痕が認められ、調整は口縁部がナデ、体部内面には当て具の痕跡が残り、タタキである。



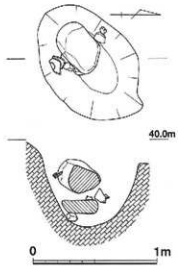
第168図　Ⅲ区SB−01実測図（S=1／60）

Ⅲ区遺構外出土遺物（第171図〜179図）

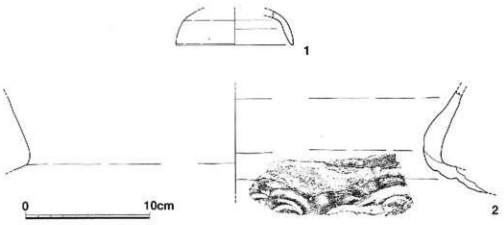
Ⅲ区の遺構外からは、弥生時代〜平安時代までの土器のほか玉作関係遺物など、多種多様な遺物が出土しているが、須恵器の出土が圧倒的に多く、完形品も多い。

第171図は弥生土器、土師器、土師質土器である。

1は弥生土器の口縁部で、口径は14.0cmである。複合口縁の端部外面に数本の平行沈線が施されるもので、調整は口縁部ヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリと見られるが、風化のため詳細は不明である。2〜9は土師器の



第169図　Ⅲ区SK−01実測図（S=1／30）



第170図　Ⅲ区SK－01出土遺物実測図（S＝1／3）

甕である。調整は、口縁部をヨコナデ、体部外面はハケメ、内面ヘラケズリするものがほとんどである。2は外傾する口縁部をもち、端部はさらに外側に屈曲する。口径は21.1cmで、口縁部はヨコナデを施すが、体部は風化のため調整不明である。3は短く外反する口縁部をもち、器表には内外面とも調整時のものと見られる凹凸がある。口径は22.4cmで、調整は口縁部がヨコナデ、体部は外面がタテ方向のハケメ、内面はヘラケズリである。4は口縁部が外反し、先端に行くほど細くなる。口径は19.3cmで、調整は風化のため不明である。5は口縁が短く外傾する。口径は16.8cmで、口縁部はヨコナデ、体部は外面がハケメ、内面はヘラケズリと見られるが風化のため不明である。6は口縁部が短く外反し、口径は19.3cmである。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリであるが、内面頸部付近には粗いヨコ方向のハケメが施される。7は体部最大径付近まで復元できたもので口縁部は大きく外反する。口径は26.0cmで、口縁部はヨコナデ、体部外面はタテ方向のハケメ、内面はヘラケズリで調整される。8は口縁が短く外反し、口径12.7cmの比較的小形のものである。外面の調整は不明であるが、内面は口縁部ハケメ、体部はヘラケズリである。9は口径29.1cmの大形の甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部はヨコ方向へつまみ出される。体部の最大径は口径と大きく変わらないとみられる。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

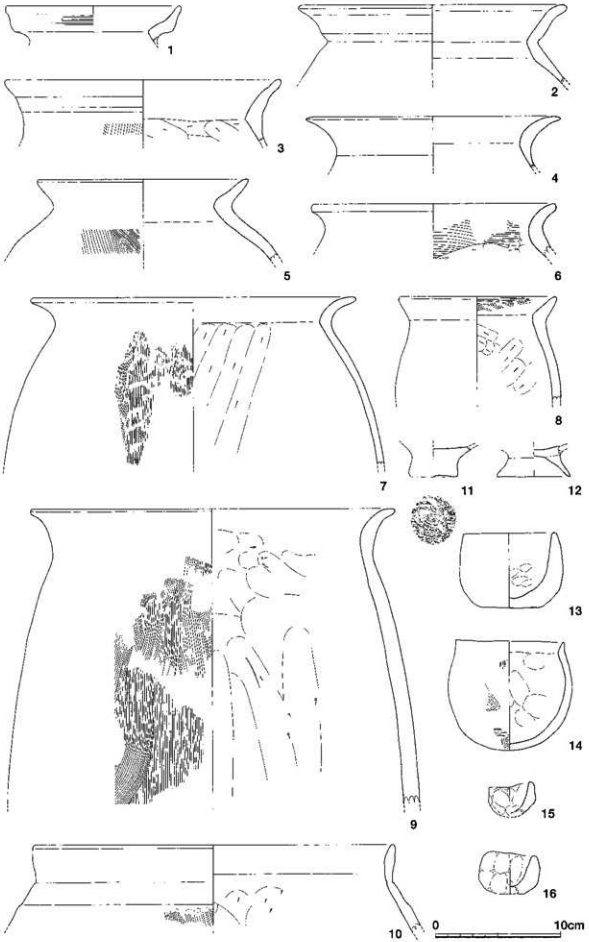
10は口縁～体部の破片であるが、器種は不明である。口縁部は肥厚して直立し、径は29.0cmである。体部は直線的に開くが、調整による凹面が認められる。調整は口縁部と外面頸部付近はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。

11は台付皿で、台は底径3.8cmで、円柱状のものである。底部は回転糸切りで切り離される。12は高台で、底径5.8cmである。調整は不明である。

13・14は小形の鉢と見られる。13は口径7.2cm、器高6.0cmで、平底で器壁は厚く、体部からそのまま直立する口縁をもつ。調整は風化が著しく、内面底部付近に指頭圧痕が認められるほかは不明である。14は口径8.8cm、器高9.0cmである。丸底で球形の体部をもち、口縁は短く直立する。風化が著しいが、体部外面にハケメ、内面に指頭圧痕が認められる。

15・16は手捏土器である。15は口径約3cm、器高も約3cmで、内外面とも指頭圧痕が顕著である。16は口径約4cm、器高3.5cm前後で15よりやや大きいものである。

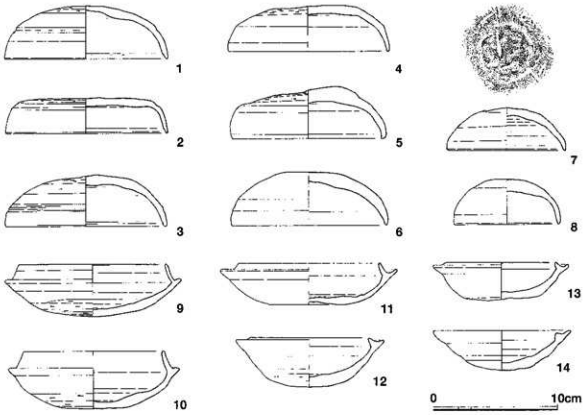
172図は須恵器の蓋坏で、蓋はつまみをもたないもの、身はかえりをもつものを掲載した。



第171図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（1）（S=1／3）

1・2は口縁端部がわずかな段をもつものである。1は口径13.2cm、器高4.2cm、2は口径13.1cm、器高2.8cmである。天井部と体部の境界付近には沈線を巡らせ、天井部は回転ヘラケズリを施すが、1は頂部付近のみに認められるのに対し、2は沈線の直上からヘラケズリを施す。3は口縁部内面のやや上方に沈線を入れるもので、天井部と体部の境界付近は2本の沈線を巡らせる。天井部の頂部はヘラ切りのままで、ヘラケズリはその外周から施される。4・5は端部を丸くおさめ、天井部にヘラケズリを施すものである。4は口径12.9cm、器高4.7cmで、天井部と体部の境界付近には稜が表現され、沈線や段はもたない。5は口縁端部が内側へ屈曲するもので、口径は12.1cm、器高は焼き歪みがあるが4cm前後である。天井部と体部の境界付近には沈線などは施されず、わずかな凹面が認められるのみである。6～8は、天井部にヘラケズリを施さずナデで仕上げるものである。また、天井部と体部の境界付近には段や沈線をもたない。6は、口縁端部がわずかに内側へ屈曲するもので、外面口縁部のやや上位にわずかな凹面をもつ。口径12.6cm、器高は4.4cmで、全体に器壁が厚い。天井部はヘラ切り後ナデ調整を施す。7は体部が直線的に開き、口縁端部が内側へ屈曲する。口径は9.7cm、器高は3.4cmと小形のもので、天井部はヘラ切り後未調整である。天井部にはヘラ記号をもつ。8は口縁端部がわずかに細くなるもので、口径は8.5cm、器高3.6cmである。天井部はヘラ切り後ナデ調整が施される。

9～14は坏身で、かえりの端部は全て丸くおさめるものである。9は、口径11.8cm、器高4.2cmである。ヘラケズリは底部の1／2程度まで施されるが、底部の最下部付近はヘラ切りの痕跡が残り、やや雑である。10は、器形、調整とも9と同様なもので、口径は11.4cm、器高は4.6cmである。11は

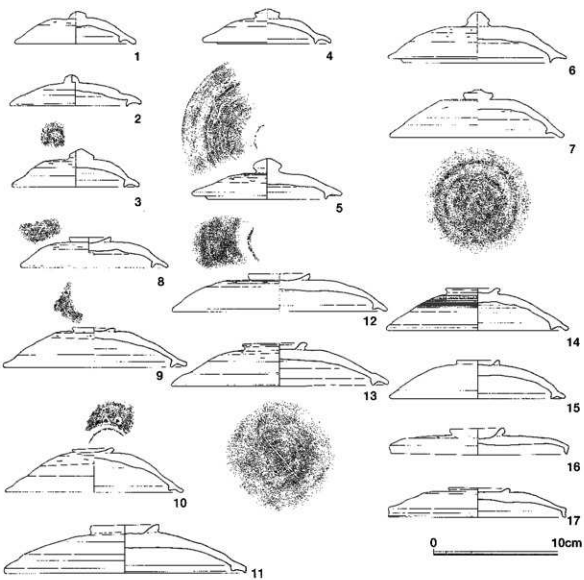


第172図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（2）（S=1／3）

底部に回転ヘラケズリを施さないもので、かえりは短く、内傾がきつい。口径は11.3cm、器高は3.4cmで、底部最下部はヘラ切り後ナデで仕上げる。12は、かえりが肥厚し短く内傾するもので、口径9.6cm、器高は4.0cmである。底部最下部はヘラ切り後ナデ調整で、その外周に回転ヘラケズリを施す。13は底部が平坦になるもので、口径9.0cm、器高3.0cmである。底部の平坦な部分はナデ、他は回転ナデで調整する。14は、かえりが太く短くなり、見通しでは見えなくなる。かえり部の径は8.8cmである。器表には成形時の凹凸が残り、底部最下部はナデ調整される。

第173図は須恵器の蓋で、つまみのつくものを掲載した。

1・2は、乳頭状のつまみをもつもので、1はかえり部の径7.0cm、器高2.6cm、2が同じく8.4cm、2.5cmである。調整は、1は天井部外周にヘラケズリを施すが、2はナデで調整する。3～7は宝珠状のつまみをもつものである。3はかえり部の径8.0cm、器高3.1cmである。天井部外面には「×」のヘラ記号をもつ。4はかえり部の径8.0cm、器高2.8cmである。5はかえり部の径9.6cm、器高3.3cmで、天井部外面には「＝」のヘラ記号をもつ。6はかえり部の径12.0cm、器高4.1cmである。7はか



第173図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（3）（S=1／3）

えり部の径11.2cm、器高3.9cmである。天井部内面に「—」のヘラ記号をもつ。7の天井部外周は回転ヘラケズリの後ナデを施し、その他は回転ヘラケズリのままである。

8～17は輪状つまみをもつもので、うち15まではかえりをもつ。9はかえり部の径9.2cm、器高2.5cmで天井部外面に「×」のヘラ記号を施す。2はかえり部の径12.6cm、器高3.2cmである。天井部外面には径5mm程度の管状工具による「◎」の記号をもつ。10はかえり部の径12.2cm、器高は3.6cmである。天井部外面には、「◎」の記号を2つもつ。

11はかえり部の径16.6cm、器高3.9cmである。12はかえり部の径15.2cm、器高3.1cmである。天井部外面には「×」のヘラ記号をもつ。13はかえり部の径15.2cm、器高3.5cmである。天井部の内面に「—」のヘラ記号をもつ。14はかえり部の径12.2cm、器高3.4cmである。15はかえり部の径12.2cm、器高3.1cmである。調整は、天井部外周にヘラケズリを施すものが8・9・13、ヘラケズリの後ナデを施すものが10～12で、14はカキメ調整、15はナデのみである。

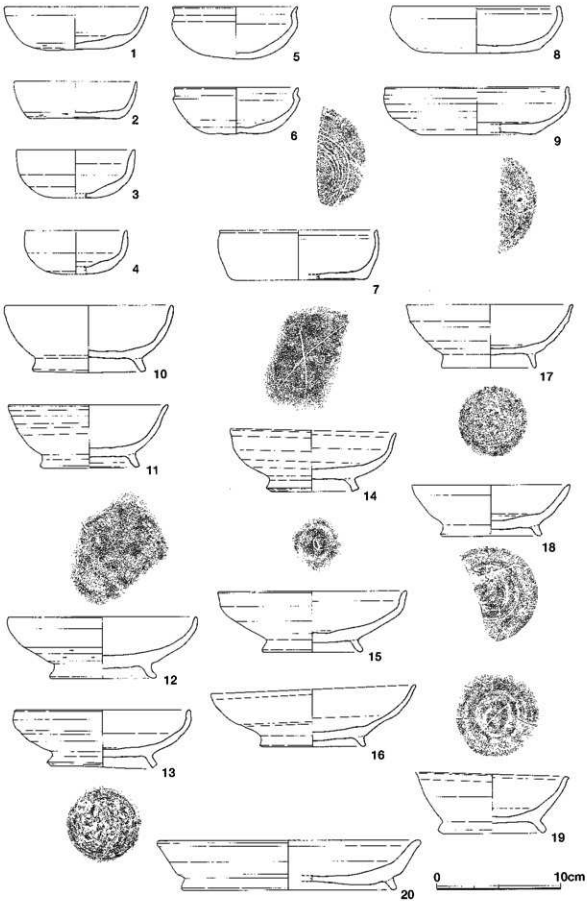
16・17はかえりをもたず、口縁端部が屈曲するものである。16は口径が14.2cm、器高2.2cmで、17は同じく14.1cm、2.4cmである。天井部はヘラ切りで、その外周にはいずれも回転ヘラケズリを施す。

第174図は、かえりをもたない須恵器の坏で、1～9は高台をもたないものである。

1は、底部がわずかに丸みをもち、口縁がわずかに内湾しながら立ち上がるもので、口径は11.5cm、器高は3.5cmである。底部外面はヘラケズリの後ナデを施す。2は底部が平底になるもので、体部から口縁部にかけては、やや内湾しながら垂直に近く立ち上がる。口径は9.8cm、器高は3.0cmである。底部はヘラで切り離し、底部最外周から体部との境界付近はヘラケズリ調整を加える。3・4は平底で、底部から体部にかけては緩やかに内湾し、口縁部は垂直に近く立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。3は、口径9.6cm、器高は3.9cm、4は口径8.2cm、器高3.5cmである。5・6は口縁端部が外方へ短く屈曲するものである。5は丸底のもので、口径は10.1cm、器高は5.5cmである。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。6は平底状になるもので、口径は10.0cm、器高は4.0cmで、底部外面はヘラ切り後ナデである。7～9は底部を回転糸切りで切り離すものである。7は底部は上げ底状で、体部はわずかに内湾しながら上方へ立ち上がり、口縁端部は外方へ短く屈曲する。口径は12.6cm、底径10.4cm、器高4.0cmで、口径と底径の差があまりないものである。8は、体部が内湾しながら口縁部に至り、端部は丸くおさめるものである。口径は13.4cm、器高3.8cmである。9は、底部から体部にかけて大きく内湾し、口縁端部が上方につまみ出されるものである。底部外面は、回転糸切り後ナデ調整が施され、体部から口縁部にかけての器表には、成形時のものと考えられる凹凸が認められる。口径は14.8cm、器高3.8cmである。

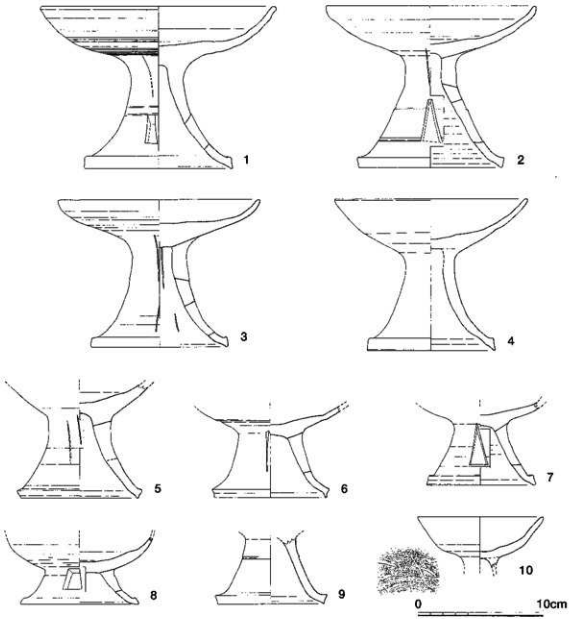
10～20は高台付の坏である。

10は、体部がわずかに内湾しながら立ち上がるもので、口径13.4cm、器高8.8cmである。底部はヘラで切り離され、体部は内外面ともロクロ成形時のものと見られる凹凸が認められる。11は、体部から口縁部へ直線的にのびるもので、口径は12.8cm、器高5.1cmである。底部はヘラ切り後ナデ調整が施される。12は、坏部が浅く、体部は大きく開くが口縁部は垂直に近い立ち上がりで、口径は15.1cm、器高は5.0cmである。底部はヘラ切りで、坏底部内面は磨滅しているが、「×」のヘラ記号が読み取れる。13も坏部が浅く、口縁部の屈曲が大きく端部はやや内傾する。口径は14.1cm、器高は4.6cmで、底部外面はヘラ切りで、「ノ」のヘラ記号が認められる。14は口縁端部がわずかに外反するもので、口径は13.2cm、器高は4.9cmである。坏部内面には「×」のヘラ記号を入れる。15は底



第174図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（4）（S=1／3）

部から体部にかけて直線的にのび、屈曲したのち口縁部にいたるもので、端部はわずかに外反する。口径は15.1cm、器高は4.9cmで、坏底部内面に、管状工具による径1cm前後の「C」のヘラ記号をもつ。底部はヘラで切り離される。16は、坏部が浅く大きく開くもので、口径は16.4cm、器高は4.7cmである。底部はヘラ切りとみられるが、丁寧なナデ調整により痕跡が認められない。17は体部が緩やかに内湾して立ち上がるもので、口径は13.5cm、器高は5.1cmである。底部外面はヘラ切りで、「×」のヘラ記号をもつ。18は体部が外傾し直線的に口縁へ至るもので、器壁は厚い。口径は12.8cm、器高は4.1cmで、底部はヘラ切りで、外面に「ノ」のヘラ記号をもつ。19は体部が直線的にのびるもので、口縁端部はわずかに外方へつまみ出される。口径は12.3cm、器高は4.8cmで、器壁は厚い。底部はヘラ切りで、坏部内面には「一」のヘラ記号をもつ。20は口径21.2cm、器高4.0cmで浅い坏部をもつ。器壁は厚く、体部は外傾して、口縁端部はわずかに外方へ屈曲する。底部はヘラで切



第175図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（5）（S=1／3）

り離される。

第175図は高坏である。いずれも無蓋高坏で1～6が長脚、7～9が低脚のものである。10は坏部のみのため不明である。

1は坏部が浅く、口径は18.8cm、器高は13.1cmである。坏底部外面にはカキメ調整が認められる。脚部には2方向2段の透孔をもち、上段のものは切り込み状で、下段のものは方形である。透孔上段と下段の間には2本の沈線を巡らせる。2も浅い坏部をもち、口径は16.8cm、器高は13.0cmである。透孔は2方向2段で、上段は切り込み状、下段は三角形のものである。下段の透孔に重なって2本の沈線が施される。調整は坏部内面はナデ、他は回転ナデを施す。3も浅い坏部をもつもので、口径16.2cm、器高11.8cmである。2段3方向の透孔をもち、形状は上段・下段とも切り込み状のもので、脚部に沈線は施されない。坏底部内面がナデ調整されるほかは、回転ナデである。4は浅い坏部であるが、坏底部から口縁部へ直線的にのびるもので、口径は15.4cm、器高は12.2cmである。脚部には透孔、沈線とも施されない。調整は坏底部内面がナデ、その他は回転ナデである。5は坏部のほとんどを欠くが、口縁部へ直線的にのびるものとみられる。脚部には沈線をもたず、透孔は2方向1段で切り込み状であるが、一方は切り込みが平行して2本認められ、方形の透孔を開けようとした可能性もある。

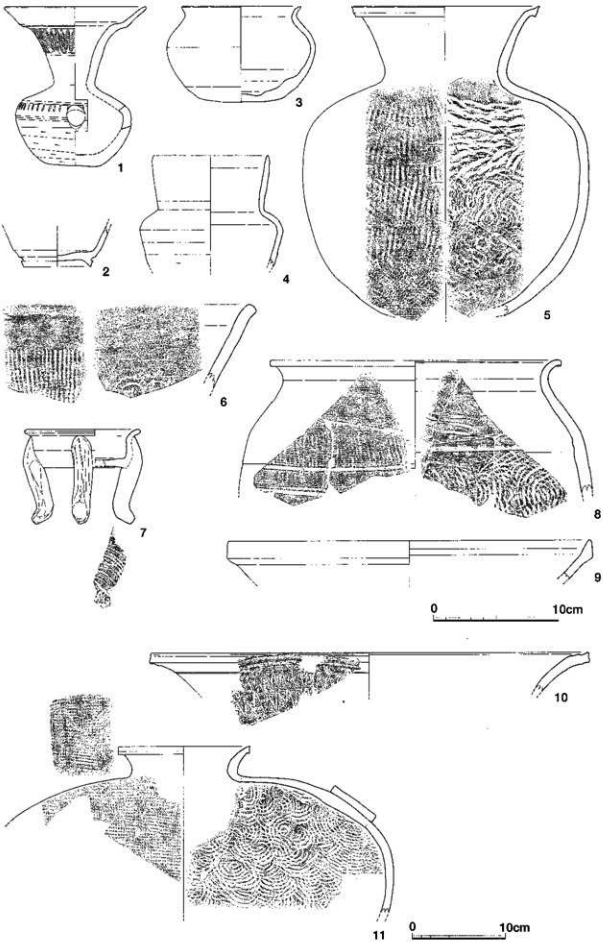
6～9は坏底部～脚部である。透孔が確認できるのものはいずれも2方向1段透かしである。調整は坏部内面がナデ、坏部外面と脚部は回転ナデを施すものがほとんどである。7は切り込み状の透孔をもつもので、底径8.9cmである。8は底径が8.4cmで、透孔のうち一方は三角形、もう一方は切り込み状のものである。9は底径9.4cm、坏底部外面までの高さが2.6cmと図化したものの中では器高が最も低いとみられる。透孔は2方向とも方形で、坏部外面はナデであるが、砂粒の移動痕がのこる。10は脚部の上位に1本の沈線が巡るものであるが、破片のため透孔の有無については不明である。11は高坏の坏部で、口径は10.0cmである。坏底部の外周はヘラケズリの後回転ナデで仕上げられる。脚と坏の接合部の状況から、かなり細い脚がつくものとみられる。

坏底部の外面には「λ」のヘラ記号をもつ。

第176図はその他の器種の須恵器である。

1は甑で、口径11.4cm、器高は12.8cmである。底部は平底で、頸部には櫛描きの波状文と沈線、体部には櫛状工具による刺突文と沈線を施す。体部下半はヘラケズリで調整される。

2は脚付の坏の脚部で、底径5.5cmである。短い脚をもち、底部から体部へ外傾しながら直線的に立ち上がる。3は甕で、口径9.4cm、器高は7.7cmである。平底気味で、短く外反する口縁部をもつ。4は直口壺で、口径は9.2cmで、口縁部はわずかに外傾して直線的にのびる。口径と体部最大径にあまり差がないものである。5は壺で、口径は15.0cmである。口縁端部は肥厚し、2本の沈線を施すが、頸部などには文様は認められない。6は鉢である。小片のため口径は不明である。7は脚付の坏である。口径は9.0m、器高は7.6cmとみられる。坏部は回転糸切りで切り離され、体部には4本の脚がつくものとみられるが、1本は欠損している。8は甕である。口径23.6cmで、短く外反する口縁部をもち、口径と胴部最大径の差が小さいものとみられる。体部外面に2本の沈線をもち、タタキの後カキメ調整が施される。内面は頸部から肩部にかけて強いナデ、以下はタタキの当て具痕がのこるが、やはりナデ調整を施す。9は東播系の捏鉢と見られ、口径は29.2cmである。口縁端部は肥厚し、丸みをもつものである。10は壺の口縁部である。口径は47.2cmで、口縁端部には太い沈

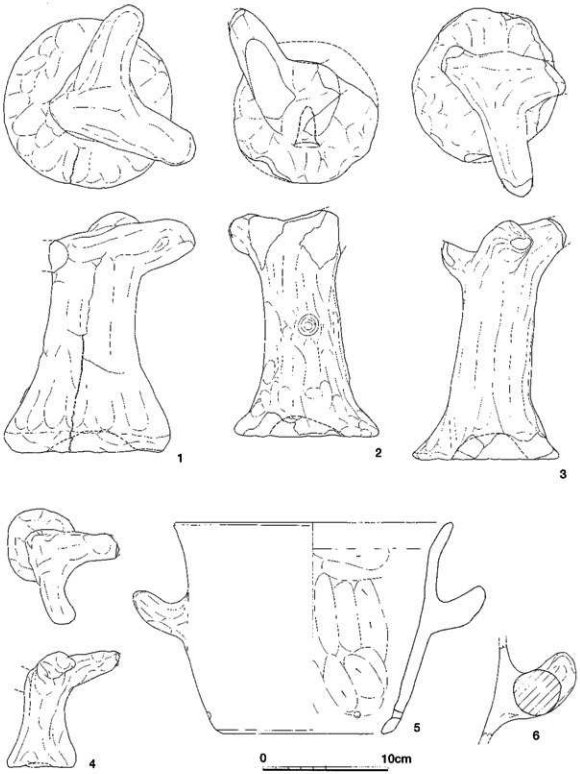


第176図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（6）（1～9：S=1／3、10・11：S=1／4）

線、頸部には沈線が、頸部には波状文が上下2段に施され、この間は沈線が施される。11は横瓶で、口径は14.1cmである。肩部には他の須恵器片が窯着し「×」のヘラ記号をもつ。

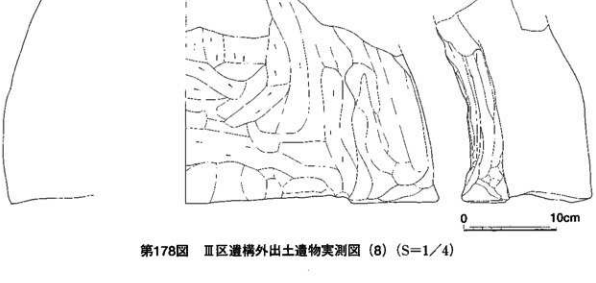
第177図は土製支脚と甑である。

土製支脚は、比較的大形のもの（1～3）と小形のもの（4）にわけられ、いずれも三又突起で



第177図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（7）（S=1／3）

あるが、突起部は部分的に欠けている。1は、現存高19.4cm、2は同18.1cm、3は同19.4cm、4は9.4cmである。胴部はほぼ円形で、脚部は胴部よりも張り出す。1～4とも上げ底になるもので、ヘラケズリの痕跡は確認できず、粗いナデで仕上げられていると見られる。なお2は胴部中央に径約2cm、深さ約3cmの孔をもつ。5は口径22.6cm、底径12.8cm、器高17.0cmで、口縁部は外傾する。把手の長さは約4cmである。底部付近には径約5mmの孔が3つ穿たれている。調整は外面と口縁部内面がヨコナデ、胴部内面はヘラケズリを施す。6は瓶などの把手である。断面形はほぼ円形で径3.5cm、長さは約5cmである。



第178図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（8）（S=1／4）

第178図は竈である。下半部および焚き口の一部のみが残存しており、詳細は不明であるが、平面形は横長の楕円形で、最大幅は46.0cmである。外面はナデ、内面はヘラケズリで調整すると見られるが、風化のため詳細は不明である。

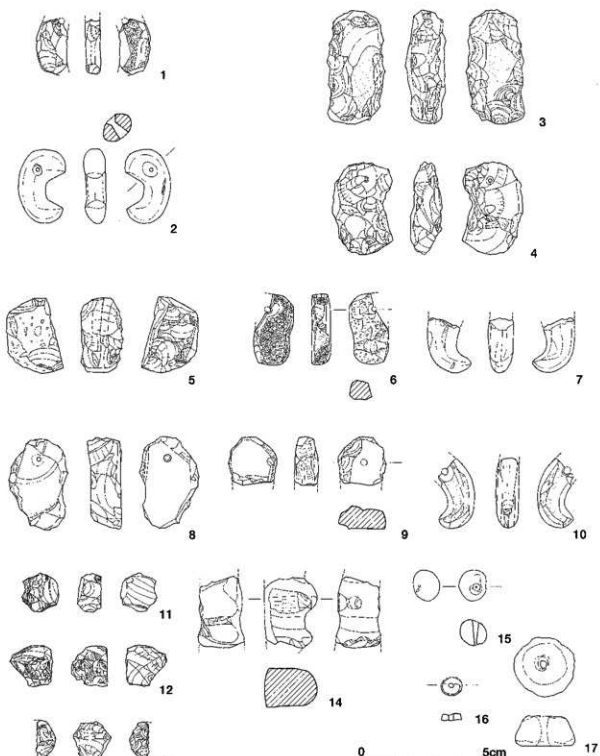
第179図は玉作関係遺物と石製品である。

1～10は勾玉、11・12は半玉、13が臼玉、14が三輪玉、15が丸玉、16が小玉である。

1は石英製で、剥離が多く見られ、表面には敲打痕が残るが、腹面側は丁寧に研磨され、仕上げ研磨品と見られる。穿孔されていることも確認できる。2は水晶製で、仕上げ研磨品と見られる。剥離や敲打痕が一部に認められるが、ほぼ全体に研磨を施す。3はめのう製で、直方体状に整形された調整剥片である。表・裏面には自然面が残る。4もめのう製で、調整剥片である。腹面がつくりだされ、穿孔も行われている。5もめのう製の調整剥片で、半月形に加工したものと見られるが、端部を欠いている。6もめのう製で、片面は全面敲打、もう一方の面は自然面を残すが、粗い研磨を施しており、一次研磨品と見られる。穿孔を行い、貫通しているが孔の付近から大きく破損している。7もめのう製で、1／3程度を欠くと見られる。一部に敲打痕も残るが、丁寧な研磨が施され仕上げ研磨品と考えられる。8は碧玉製であるが、やや白っぽく軟質な石材である。風化が進み、剥離の状態があまり確認できないが全面に剥離を施す調整剥片である。9は碧玉製で、1／2程度を欠いているが、側面はやや粗い研磨、表・裏面は丁寧な研磨で仕上げ研磨品と見られる。石材のほぼ中央に穿孔するが、わずかに痕跡を残す程度で中止されている。10は碧玉製で、穿孔部から上側を欠く。全面に研磨を施し、腹面は特に丁寧な研磨を行っている。11は石英製で、調整剥片であ

る。柱状の結晶を切断したものとみられ、一部に自然面を残す。

12は水晶製で、11と同様に結晶を切断したと見られる調整剥片である。13は石英製で、調整剥片である。1／2程度を欠いているとみられる。14は石英製で、1／3程度が破損している。一部は自然面のままと見られ、剥離を残す部分もあるものの、研磨が施され、一次研磨品と考えられる。



第179図　Ⅲ区遺構外出土遺物実測図（9）（S=2／3）

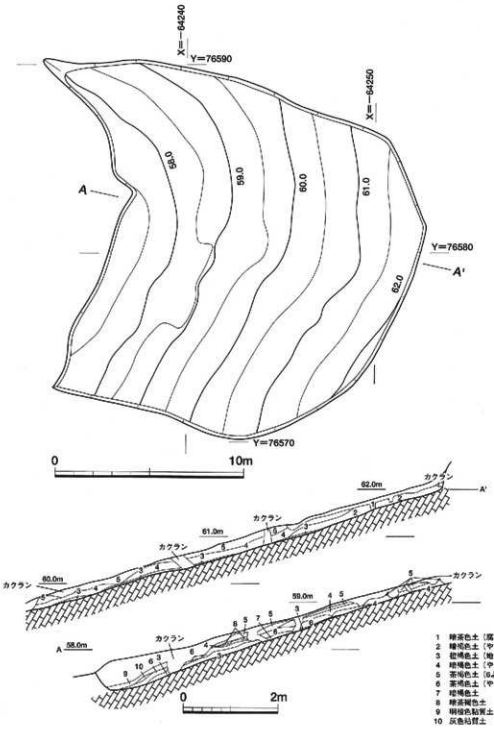
15はめのう製で、丁寧に研磨され径1.5㎝の球形を呈する完成品と見られる。穿孔時に節理の関係か孔が不自然に大きくなっている。16は石材不明であるが、茶色の軟質な石材を使用している。破損しているが、径約1㎝、厚さ5㎜の完形品と見られる。

17は石製の紡錘車で、凝灰岩とみられる白色の軟質な石材を使用する。上端径は約3㎝、最大径約5㎝である。

遺物の時期は、弥生土器・土師器については、174－1が弥生時代後期、2が古墳時代中期、11・12が12～13世紀代のものと考えられるが、それ以外のものは時期不明である。須恵器については、古墳時代後期～平安時代初め頃であるが、176－9など12～13世紀[20]と考えられる遺物も出土している。

第５節　Ｖ区の調査（第180図）

Ｖ区は、東に玉湯町の温泉街を望む丘陵頂部に近い斜面に存在する。北にのびる尾根が二又に分かれる付近の斜面に位置し、標高は57m～62mである。1997年７月にトレンチ調査を実施し、須恵器などの遺物が確認されたため引き続いて全面調査を行ったが、土器片を10点程度確認したのみで、遺構は確認できなかった。



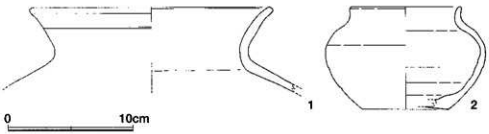
第180図　Ｖ区地形測量図（調査後）・土層図（地形測量図：S=1／200、土層図：S=1／80）

V区出土遺物（第181図）

V区から出土した遺物のうち、図化できたのは須恵器2点のみである。

1は甕で、口径19.6cmである。口縁部は斜め上方へ直線的に立ち上がり、端部は肥厚せず、外傾する。口縁部外面には1本の沈線が巡るものである。口縁部はナデで調整され、体部はタタキ調整が施される。2は短頸壺で、口縁部は短く端部はほぼ直立する。口径は8.8cm、底径6.9cm、器高8.3cmで、口縁部と胴部最大径にあまり差がないものである。調整は、底部は回転糸切りで切り離され、他は回転ナデである。

遺物の時期については、2に回転糸切りが見られるため、国庁編年の第3形式[27]以降と考えられるが、1については不明である。



第181図　V区出土遺物実測図（S=1／3）

表5　平床Ⅱ遺跡玉未製品計測表

Ⅰ区

（　）内の値は、破損品の現状での計測値

番　号	図版ページ	石　材	玉種別	工　程	長　さ（cm）	幅（cm）	厚　さ（cm）	重　量（g）
124−1	カラー12	めのう	勾玉	調整剥片	2.9	1.8	0.9	7.91
124−2	12	めのう	勾玉	一次研磨	1.8	1.4	0.9	3.04
124−3	12	碧玉	平玉	調整剥片	1.8	1.8	0.9	4.20
124−4	17	水晶	平玉	調整剥片	2.1	2.1	1.2	5.84
124−5	12	頁岩	平玉	一次研磨	1.8	1.8	0.8	3.34
124−6	12	碧玉	平玉	調整剥片	1.8	2.0	0.7	2.74
124−7	12	碧玉	平玉	調整剥片	2.2	2.2	1.1	6.60
130−1	12	めのう	勾玉	一次研磨	2.2	1.5	0.7	4.14
130−2	12	碧玉	勾玉	調整剥片	(4.0)	(2.0)	(1.3)	11.86
130−3	12	碧玉	平玉	調整剥片	1.9	2.0	0.8	2.91

Ⅱ区

番　号	図版ページ	石　材	玉種別	工　程	長　さ（cm）	幅（cm）	厚　さ（cm）	重　量（g）
137−1	カラー17	石英	半玉	敲打整形品	1.9	1.8	0.9	3.24
137−2	17	石英	平玉	敲打整形品	(1.8)	(1.7)	(0.7)	2.69
137−3	17	石英	平玉	仕上げ研磨	1.7	1.7	0.9	3.10
137−4	12	碧玉	半玉	一次研磨	1.8	1.8	1.0	3.73
137−5	12	碧玉	平玉	一次研磨	1.7	1.7	0.9	2.46
137−6	12	碧玉	半玉	一次研磨	1.6	1.6	0.9	2.58
137−7	12	碧玉	平玉	仕上げ研磨	1.9	1.8	0.9	2.81
137−8	12	めのう	平玉	素材剥片	2.1	1.9	1.2	5.15
152−1	12	碧玉	半玉	調整剥片？	1.9	2.0	0.5	2.16
152−2	12	碧玉	平玉	仕上げ研磨	1.8	1.8	1.0	3.62
152−3	12	？	平玉	仕上げ研磨？	1.7	1.6	0.8	2.51

Ⅲ区

番　号	図版ページ	石　材	玉種別	工　程	長　さ（cm）	幅（cm）	厚　さ（cm）	重　量（g）
158−1	カラー17	水晶	勾玉	敲打整形品	(2.5)	(1.6)	(0.7)	4.95
158−2	14	めのう	勾玉	一次研磨	(1.5)	(1.5)	(0.7)	2.36
158−3	14	めのう	勾玉	調整剥片	2.4	1.5	0.9	4.86
158−4	14	めのう	勾玉	調整剥片初期？	4.0	2.4	0.7	9.45
158−5	14	めのう	勾玉	調整剥片	4.1	2.6	1.8	21.99
158−6	14	めのう	勾玉	敲打整形品	(2.9)	(2.2)	(1.3)	9.74
158−7	14	めのう	勾玉	一次研磨	(2.1)	(1.7)	(1.1)	4.39
158−8	14	めのう	勾玉	一次研磨	(1.5)	(1.3)	(0.9)	1.96
158−9	14	めのう	勾玉	一次研磨	(2.2)	(1.7)	(0.8)	4.37
158−10	17	水晶	切子玉	敲打整形品	1.3	1.2	1.2	2.48
158−11	14	碧玉	棗玉	仕上げ研磨	1.1	0.8		1.10
158−12	14	？	丸玉	完成品	(0.8)	(0.9)		0.66
158−13	14	碧玉	管玉	調整剥片	2.2	1.9	1.6	8.17
161−1	17	水晶	勾玉	敲打整形品	(2.7)	(1.5)	(1.0)	4.59
161−2	15	めのう	勾玉	調整剥片	3.3	1.8	1.2	9.35
161−3	15	めのう	勾玉	調整剥離初期？	2.9	1.8	1.2	8.69
161−4	15	めのう	勾玉	調整剥片	(2.8)	(1.9)	(1.7)	12.03
161−5	15	碧玉	勾玉	調整剥片	3.5	2.3	1.4	12.41
161−6	15	碧玉	勾玉	一次研磨	(2.4)	(2.4)	(1.4)	7.49
161−7	15	めのう	勾(平?)玉	一次研磨	2.6	2.4	1.7	12.13
161−8	17	石英	勾玉	敲打整形品	(1.3)	(0.8)	(1.1)	1.40

( ) 内の値は、破損品の現状での計測値

番　号	図版ページ	石　材	石種別	工　程	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)
161−9	17	水晶	白玉	敲打整形品	(1.2)	(1.2)	(0.8)	1.45
161−10	17	水晶	白玉	敲打整形品	(1.5)	(0.8)	(1.4)	2.25
167−1	15	めのう	勾玉	調整剥片	(2.4)	(2.4)	(1.5)	10.93
167−2	15	めのう	勾玉	調整剥片	3.9	2.0	1.0	11.83
167−3	15	碧玉	勾玉	仕上げ研磨	(1.7)	(1.4)	(1.0)	2.28
179−1	17	石英	勾玉	仕上げ研磨	(2.2)	(1.3)	(0.6)	2.84
179−2	17	水晶	勾玉	仕上げ研磨	3.0	1.9	0.9	6.24
179−3	16	めのう	勾玉	調整剥片	4.6	2.3	1.6	24.18
179−4	16	めのう	勾玉	調整剥片	3.7	2.3	1.3	13.07
179−5	16	めのう	勾玉	調整剥片	3.0	2.2	1.7	15.55
179−6	16	めのう	勾玉	一次研磨	(2.9)	(1.5)	(0.8)	5.55
179−7	16	めのう	勾玉	仕上げ研磨	(2.0)	(1.5)	(1.6)	3.99
179−8	16	碧玉	勾玉	調整剥片	(3.7)	(2.4)	(1.3)	13.06
179−9	16	碧玉	勾玉	仕上げ研磨	(1.9)	(2.0)	(1.0)	5.25
179−10	16	碧玉	勾玉	仕上げ研磨	(2.8)	(1.4)	(0.9)	4.19
179−11	17	石英	平玉	調整剥片	1.6	1.5	1.0	2.60
179−12	17	水晶	平玉	調整剥片	1.7	1.7	1.5	4.58
179−13	17	石英	白玉	調整剥片	(1.5)	(1.6)	(0.8)	2.06
179−14	17	石英	三輪玉	一次研磨	(2.8)	(2.2)	(1.9)	15.95
179−15	16	めのう	丸玉	仕上げ研磨	1.1	1.3		1.97
179−16	16	?	小玉	完成品	(0.7)	(0.9)	(0.3)	0.19

計測表のみ

番　号	図版ページ	石　材	玉種別	工　程	長　さ (cm)	幅 (cm)	厚　さ (cm)	重　量 (g)
計−1	カラー19	めのう	勾玉	仕上げ研磨	(3.2)	(1.5)	(0.9)	7.25
計−2	19	めのう	勾玉	仕上げ研磨	(2.7)	(1.7)	(0.6)	5.07
計−3	19	めのう	勾玉	仕上げ研磨	(1.4)	(1.3)	(0.9)	3.14
計−4	19	めのう	勾玉	仕上げ研磨	(1.8)	(1.2)	(1.0)	4.34
計−5	19	めのう	勾玉	一次研磨	(3.3)	(1.6)	(0.8)	6.74
計−6	19	めのう	勾玉	一次研磨	(2.7)	(1.5)	(0.8)	5.38
計−7	19	めのう	勾玉	一次研磨	(1.2)	(1.6)	(0.8)	2.16
計−8	19	めのう	勾玉	一次研磨	(2.5)	(1.5)	(1.0)	6.99
計−9	19	めのう	勾玉	一次研磨	(1.0)	(1.0)	(0.9)	1.43
計−10	19	めのう	勾玉	一次研磨	(2.8)	(1.5)	(1.0)	6.79
計−11	19	めのう	勾玉	一次研磨	(1.8)	(1.5)	(0.7)	3.52
計−12	19	めのう	勾玉	一次研磨	(1.5)	(1.5)	(0.9)	2.87
計−13	19	めのう	勾玉	一次研磨	(2.9)	(1.5)	(1.0)	5.23
計−14	19	めのう	勾玉	一次研磨	(2.2)	(1.4)	(0.8)	3.99
計−15	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.2)	(1.9)	(1.1)	5.96
計−16	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.0)	(1.7)	(1.3)	6.09
計−17	18	めのう	勾玉	調整剥片	(3.4)	(2.2)	(1.3)	13.93
計−18	18	めのう	勾玉	調整剥片	(1.9)	(2.2)	(1.3)	7.41
計−19	18	めのう	勾玉	調整剥片	(3.4)	(2.5)	(1.5)	14.05
計−20	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.8)	(1.6)	(0.9)	5.56
計−21	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.3)	(2.0)	(1.9)	5.40
計−22	18	めのう	勾玉	調整剥片	(3.5)	(2.5)	(1.7)	16.57
計−23	18	めのう	勾玉	調整剥片	3.4	2.2	1.6	14.61
計−24	18	めのう	勾玉	調整剥片	3.4	2.1	1.2	13.21
計−25	18	めのう	勾玉	調整剥片	3.2	1.9	1.2	9.13
計−26	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.7)	(1.9)	(1.1)	8.29

（　）内の値は、破損品の現状での計測値

番　号	図版ページ	石　材	本種別	工　程	長　さ（cm）	幅（cm）	厚　さ（cm）	重　量（g）
計−27	カラー−18	めのう	勾玉	調整剥片	2.6	1.6	0.8	4.42
計−28	18	めのう	勾玉	調整剥片	3.6	2.3	1.2	14.14
計−29	18	めのう	勾玉	調整剥片	(3.7)	(2.6)	1.7	21.10
計−30	18	めのう	勾玉	調整剥片	3.3	1.9	1.4	10.17
計−31	18	めのう	勾玉	調整剥片	(2.6)	(2.0)	(1.1)	8.35
計−32	18	めのう	勾玉	素材剥片	4.6	2.6	1.9	38.91
計−33	18	めのう	勾玉	素材剥片	4.8	2.8	1.5	30.48
計−34	18	めのう	勾玉	素材剥片	3.3	1.7	1.0	10.38
計−35	18	めのう	勾玉	素材剥片	2.9	2.0	1.1	10.25
計−36	18	めのう	勾玉	素材剥片	(2.3)	(1.7)	(1.0)	6.85
計−37	18	めのう	勾玉	素材剥片	3.6	2.1	1.3	13.90
計−38	18	めのう	勾玉	素材剥片	3.9	2.2	1.3	13.78
計−39	18	めのう	勾玉	素材剥片	(2.7)	(2.4)	(1.7)	15.37
計−40	20	水晶	勾玉	素材剥片	(2.9)	(2.5)	(1.6)	17.42
計−41	20	水晶	勾玉	素材剥片	3.2	2.1	1.5	17.36
計−42	20	水晶	勾玉	素材剥片	4.4	2.0	1.8	23.63
計−43	20	水晶	勾玉	敲打整形品	(1.8)	(1.7)	(1.0)	6.21
計−44	20	水晶	勾玉	敲打整形品	(2.6)	(1.4)	(0.8)	3.90
計−45	20	水晶	勾玉	敲打整形品	(3.1)	(1.9)	(1.1)	8.67
計−46	20	水晶	勾玉	敲打整形品	2.6	2.0	1.4	13.36
計−47	19	碧玉	勾玉	一次研磨	(3.3)	(1.3)	(0.9)	6.28
計−48	19	碧玉	勾玉	一次研磨	(2.6)	(1.9)	(1.1)	6.58
計−49	19	碧玉	勾玉	一次研磨	3.8	2.4	1.3	14.23
計−50	20	石英	丸玉	素材剥片	1.5	1.9	1.3	4.72
計−51	20	石英	丸玉	素材剥片	1.4	1.8	1.2	4.51
計−52	20	石英	丸玉	素材剥片	1.7	1.8	1.3	5.21
計−53	20	石英	丸玉	素材剥片	1.7	1.9	1.3	5.13
計−54	20	石英	丸玉	素材剥片	1.5	1.5	0.9	2.87
計−55	20	石英	丸玉	素材剥片	1.5	1.5	0.8	2.94
計−56	20	石英	丸玉	素材剥片	1.7	1.8	1.2	4.51
計−57	20	石英	丸玉	素材剥片	1.9	1.3	1.4	5.41
計−58	20	石英	丸玉	敲打整形品	1.8	1.5	1.4	5.71
計−59	20	石英	勾玉	素材剥片	2.3	1.1	0.8	3.73
計−60	20	石英	三輪玉	敲打整形品	(2.0)	(1.4)	(0.7)	2.70
計−61	19	碧玉	勾玉？	素材剥片？	2.8	2.2	1.6	11.40
計−62	19	碧玉		石核	7.2	3.2	2.9	73.18
計−63	19	碧玉	勾玉	一次研磨？	(1.1)	(2.2)	(1.3)	3.29

註1　松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集　1991
註2　横田賢次郎・森田勉「太宰府出上の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4　1978
註3　宍道町教育委員会『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』　1983
註4　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳』　1997
註5　『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会　1970
註6　前掲書註3
註7　伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財第37号』　1990
註8　明石市教育委員会・平安博物館『魚住古窯跡群発掘調査報告書』　1985
註9　島根県教育委員会「黒田畦遺跡」『風土記の丘地内発掘調査報告』1　1982
註10　前掲書註2
註11　前掲書註9
註12　浜田市教育委員会『古市遺跡発掘調査概報』　1995
註13　前掲書註5
註14　前掲書註5
註15　内田才『安来・河原崎古墓』『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集　1971
註16　前掲書註2
註17　森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」貿易陶磁研究№2　1982
註18　前掲書註2
註19　大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994
註20　前掲書註5
註21　前掲書註19
註22　前掲書註1
註23　前掲書註19
註24　前掲書註19
註25　前掲書註19
註26　前掲書註8
註27　前掲書註5

第5章　自然科学的分析

岩屋遺跡の古墳群から出土した赤色関係資料について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部
永嶋正春

はじめに

表記遺跡で確認された6基の古墳の内、5号墳並びに6号墳の主体部に関して赤色顔料の在り方を調査した。5号墳は3基の箱式石棺、6号墳は1基の箱式石棺からなるが、5号墳については、3基全ての箱式石棺の石材表面部、各石材下の土を対象とし、6号墳については、箱式石棺内部の土、石棺表面部、石棺下の土を対象として調査を行った。

調査試料は、発掘調査を担当した調査員が採取したものであり、発掘調査作業の経緯のなかで赤色顔料の関与している可能性があると判断されたものである。

調査は、光学顕微鏡を含む微視的な観察と、蛍光X線分析とによった。従前からの調査経験を踏まえれば、前者の調査だけでも概ね赤色顔料の在り方は判断できるのであるが、念のため後者による元素分析も実施した。

調査結果

調査した試料は、次の通りである。

〔5号墳関係〕

試料1　1号石棺側石外面
試料2　1号石棺側石外面
試料3　1号石棺下の土
試料4　2号石棺側石東側
試料5　2号石棺下の土
試料6　3号石棺小口
試料7　3号石棺側石
試料8　3号石棺側石外面
試料9　3号石棺下の土

〔6号墳関係〕

試料10　石棺内の土
試料11　石棺側石外面
試料12　石棺側石下
試料13　石棺下の土

以上の13点の試料を調査分析した結果、赤色顔料の関与を積極的に考えることのできる試料は、試料10（6号墳箱式石棺内の土）のみであることが判明した。すなわち、調査した4基の石棺には意図的な赤彩は施されておらず、それらの表面が現状では淡黄褐色からやや赤色味の感じられる褐色を呈するのは、石材表面部の風化の進行や外部からの汚れ分の沈着などに起因する鉄分の濃縮によるものと理解されるのである。これは、蛍光X線分析によっても岩石外面部の鉄のピークの増大

として確認されている。

試料10は、かなり良好な赤色を呈してはいるが、現状では赤色味のない淡褐色の土と一体化した脆い小塊状を成している。これが当初からの状態であるのか、あるいは埋納後の二次的性状であるのかは判然としないが、仮に当初の状態を維持しているとすれば、この土中の鉄分が軽度の焼成によって酸化発色したものと理解するのが自然である。かなり赤色を呈するとはいえ、最良質のベンガラの発色と比べれば色調には劣るところがあり、石棺内に散布あるいは埋納したものである可能性に加えて、周辺からの落ち込みや流入などの二次的な要因をも想定する必要はあろう。

おわりに

岩屋遺跡に所在する古墳群の内、5号墳、6号墳の箱式石棺関係試料を調査観察し、6号墳の石棺内から検出された小土塊にのみ広義の意味でのベンガラ（ベンガラ質赤色土）を確認することができた。その存在の意味合いや成因については不明な点が多く、本地域における時代を通した赤色顔料の在り方を検討するなかで再考する必要がある。

玉湯町岩屋古墳群出土人骨

井上晃孝

はじめに

岩屋遺跡は、島根県八束郡玉湯町の温泉街の西側の低丘陵地に位置する。

岩屋遺跡は、上部に古墳時代後期（6世紀後半）の古墳群とその下部に奈良・平安時代（8・9世紀）の平作り工房跡に区分される。

岩屋古墳群は6基（1号墳～6号墳）から成り、その内人骨が出土したのは2基（5号墳と6号墳）であった。

5号墳は方墳で、3基の主体部（石棺）を有し、被葬者数は6体で、骨の遺残性は比較的良好であった。

6号墳は方墳で、1基の主体部（石棺）を有し、被葬者数は1体で、骨の遺残性は比較的良好であった。

以下、古墳、主体部（石棺）毎に、出土人骨の概要を報告する。

出土人骨の記載法

各石棺毎に、出土人骨について

1）埋葬法

2）骨の遺残性

3）遺残骨名とその部位

4）推定性別

5）推定年齢

6）推定身長

7）その他

概略を記載し、最後に玉湯町岩屋古墳群出土人骨一覧（第6表）にまとめた。

歯牙は下記の略号で示した。

A，B，C，D，E：乳歯

1～8：永久歯

○　：釘植歯牙　　□：生前欠（歯槽閉塞）

○•　：埋伏歯牙　　×：死後欠（歯槽開放）

△　：遊離歯牙　　c：齲歯

r　：歯根のみ　　ff：折損部位

5号墳

1号石棺

石棺内には、被葬者3体が埋葬されていた。

石棺の東側に、被葬者2体（成人男女）が並置埋葬されており、石棺の西側に、被葬者1体（小児）が対置埋葬されていた。さらに、小児骨の一部が成人男女の上肢間に遺残していた。

1号人骨

1．埋葬方法

左側臥伸展位

2．骨の遺残性

一応骨格順に遺残するが、遺残骨数は比較的少なく、完形骨は少ない。総じて骨の遺残性はやや良好である。

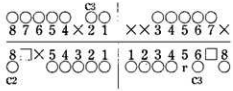
3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：完形

下顎骨：完形

歯　牙：



脊椎骨

頸椎骨：3ケ（No.5,6,7）、椎体部

腰椎骨：1ケ（No.不明）、椎孔周辺部

胸郭骨

肋　骨：左右不明；肋骨片　若干

上肢骨

鎖　骨：右；骨体

肩甲骨：右；関節面、烏口突起、肩峰、外側縁

上腕骨：左；骨体

右；近位～骨体下部

下肢骨

寛　骨：右；腸骨仙腸関節面、寛骨臼窩部、恥骨部

大腿骨：左；骨体中央部

右；近位～骨体下部、骨長392㎜

脛　骨：左；骨体中央部

右；骨体中央部

4．推定性別

1）頭骨の諸形態学的特徴

眉間、眉弓の隆起：弱い

前頭結節の発達　：良好

乳様突起の突隆　：弱い

項平面　　：平滑

2）鎖骨

細く、きゃしゃ

3）上腕骨

細く、きゃしゃ、三角筋粗面の発達：弱い

以上から、本屍骨は女性骨と推定する。

5．推定年齢

1）頭蓋冠縫合

3縫合：未融合

2）口蓋縫合

切歯縫合　外側部：融合

内側部：未融合

正中口蓋縫合

口蓋骨部：未融合

横口蓋縫合　　：未融合

3）臼歯の萌出と咬耗度

第3大臼歯　萌出

咬耗度：切　歯；ブロカーの2°

大臼歯；ブロカーの1°（平坦化）

以上から、本屍の年齢は壮年中期（20代後半）位と推定する。

6．推定身長

大腿骨の下端部が欠損しているが、補完すると大約392㎜となるので、それから本屍の身長を算出すると、ピアソン法[1]で141.6㎝、藤井法[2]で148.9㎝である。

7．その他

本屍の左上肢骨部に、3号人骨（小児）の左上肢骨と臼歯若干が検出された。

2号人骨

1．埋葬法

伸展位：当初；仰臥伸展位

後日；俯臥伸展位（上半部のみ、背面が上面）

2．骨の遺残性

本屍骨はほぼ骨格順に遺残、末梢骨は消失しているが、遺残骨数も多く、完形骨もあり、遺残性良好である。

3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：ほぼ完形（頭蓋底面骨欠）

下顎骨：ほぼ完形（右下顎枝上部欠）

歯　牙：

○○○○○○○○	○○○○○○○○
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 ××	1 2 3 4 5 6 7 8
○○○○ r r	r r ○○○○○○

脊椎骨

頚椎骨：2ケ（No.不明）、椎体、横突起部

胸椎骨：12ケ（No.1－12）、椎体部を主体に遺残

腰椎骨：3ケ（No.1，4，5）、椎体部を主体に遺残

仙椎骨：3ケ（No.1，2，3）、ほぼ完形

胸郭骨

肋　骨：左；6ケ（No.2，3，4，7，8，9）、肋骨骨体

右；9ケ（No.2，3，4，5，6，7，8，9，10）、肋骨骨体

上肢骨

鎖　骨：左；骨体～肩峰端部

右；肩峰端部

肩甲骨：左；関節面、烏口突起、棘上窩、棘下窩、肩甲棘

右；関節面、烏口突起、肩峰部

上腕骨：左；ほぼ完形（頚部折損）、骨長305㎜

右；ほぼ完形、骨長305㎜

尺　骨：左；近位部、骨体～遠位部

右；近位部～骨体中央部

橈　骨：左；骨体中央部～遠位部

手　骨：右；基節骨基部（No.2 or 3）

下肢骨

寛　骨：左；腸骨体
　　右；ほぼ完形
大腿骨：左；近位部～骨体
　　右；近位部～骨体下部（補完、骨長約410㎜）
脛　骨：左；骨体中央部
　　右；骨体中央部

4．推定性別

本屍遺残骨の内、最も性差の著明な寛骨の形状を見ると、大坐骨切痕が鋭角であるので、本屍骨は男性骨と推定する。

5．推定年令

1）頭蓋冠縫合
　3縫合：未融合
2）口蓋縫合
　切歯縫合　外側部：融合
　　内側部：未融合
　正中口蓋縫合
　　口蓋骨部：未融合
　横口蓋縫合　　：未融合
3）歯牙の萌出と咬耗度
　第3大臼歯　萌出
　咬耗度：切　歯：ブロカーの2°
　　大臼歯：ブロカーの1°（平坦化）

4）蝶後頭軟骨結合：融合
5）寛骨　閉鎖孔内側縁　棘形成（－）
6）仙椎骨　第1と第2の椎体間（横線）：未融合
以上から、本屍の年令は壮年中期（20代後半）位と推定される。

6．推定身長

遺残上腕骨長から、本屍の身長はピアソン法で159.0㎝、藤井法で左、159.2㎝、右、158.3㎝である。
大腿骨長から、本屍の身長はピアソン法で158.3㎝、藤井法で156.2㎝である。

7．その他

本屍は、仰臥伸展位で埋葬されていたら、遺残骨はほぼ骨格順に遺残するのが通例である。
しかし、本屍骨には異常がみられた。

即ち、上腕骨が左右反対、肩甲骨、鎖骨、脊椎骨上部（頸椎骨～第10胸椎骨）に逆転位がみられた。

第11胸椎骨以下の骨は正常の仰臥伸展位の骨格順を示していた。

恐らく、本屍が腐乱状態にある時、何らかの理由で人為的に上半身のみが逆転位（上下逆、背面上位）にされた可能性が高い。

3号人骨

石棺西側に頭蓋骨片と遊離歯牙若干が出土した。さらに石棺東側の1号人骨（♀）と2号人骨（♂）の上肢部の間から、本屍由来の左上腕骨と歯牙若干が出土した。

1．埋葬法

埋葬時　仰臥伸展位（?）

白骨化後　移動された形跡あり

2．骨の遺残性

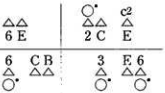
本屍骨は小児骨で未熟骨であるので、遺残骨も少なく、完形骨もなく、遺残性は不良である。

3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭骨：破損骨（左右頭頂骨、後頭骨）

歯牙：遊離歯牙　11ケ



上肢骨

上腕骨：左；骨体上部～下端部（後面欠）

4．推定性別

本屍骨は小児骨で未熟骨であるので、性別判定は不詳である。

5．推定年令

本屍の遺残歯牙は、乳歯と永久歯が混在し、歯牙の未萌出（埋伏）と萌出の状態からして、本屍の年令は5～6才位と推定する。

6．推定身長

本屍の上腕骨が遺残するが、完形でないので、本屍の身長は不詳である。

7．その他

本屍骨（3号人骨；小児骨）は当初恐らく石棺東側の1号人骨（♀）の左側に埋葬されていたと推察する。

理由として、上腕骨と臍牙若干が遺残していたことによる。

2号人骨（♂）が埋葬されるに及んで［1号人骨（♀）と2号人骨（♂）：並置埋葬］、本屍骨（3号人骨；小児骨）が石棺西側に移動された（対置埋葬）と思量する。

2号石棺

石棺内には、被葬者1体が埋葬されていた。

須恵器の土器を枕にして、頭位を東にして仰臥伸展位（?）で埋葬されていた。

腰部と足部に須恵器の土器が埋納されていた。

1．埋葬法

遺残骨は頭蓋骨と臍牙若干のみであるが、近隣の石棺と同様に、恐らく被葬者は仰臥伸展位で埋葬されたと推察する。

2．骨の遺残性

本屍の頭蓋骨と歯牙若干が遺残、石棺内に土砂流入して堆積しており、その下部の人骨が風化、消失しており、遺残性は不良である。

3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：顔面上部（左右眼窩部、鼻骨上部）、前頭部、左右頭頂部、右頬骨の一部と後頭骨の一部

歯　牙：遊離臍牙　3ケ

4．推定性別

遺残する頭蓋骨の形態学的特徴（眉間・眉弓の隆起、前頭結節の発達らの形状）と臍冠径が小さいことから、本屍骨は女性骨と推定する。

5．推定年令

1）頭蓋冠縫合

①外板

冠状縫合：右側の迂曲部～側頭部にかけて融合、左側は融合なし

矢状縫合：ブレグマ部～頭頂部融合なし

②内板

冠状縫合：左右とも完全融合

矢状縫合：ブレグマ部～頭頂部にかけて離開しかかっているが、恐らく融合していたものと推察される（風化の為、頭蓋骨は内板はしっかりとしているが、外板は容易に剥離状に離開しかかっている）。

2）眼窩内縫合

①前頭蝶骨縫合、蝶前頭縫合：融合

②前頭頬骨縫合　　：未融合

以上から、本屍の年令は壮年中期～後期（30代）位が推察される。

6．推定身長

遺残骨は頭蓋骨と歯牙若干のみで、完形の四肢骨がないので、本屍の身長は不詳である。

7．その他

本石棺内には、大量の土砂が流入堆積していた。かろうじて、土砂上に位置する頭骨上部のみが遺残していた。

頭頂部には、土砂がかなり堆積しており、そのため、風化のため、外板と内板が剥離状態を呈していた。

また、土砂の中から、歯牙3ケ検出された。

土砂中に埋没した下顎骨、脊椎骨と上、下肢骨は、風化の為、完全に消失していた。

土砂の中から、左右2ケの耳環が検出された。

3号石棺

本石棺内には、被葬者2体が埋葬されていた。

被葬者は、頭位を反対にして伸展位で埋葬されていた（対置埋葬）。

頭位を西にする人骨を1号人骨、頭位を東にする人骨を2号人骨とした。

1号人骨

1．埋葬法

右側臥伸展位

2．骨の遺残性

石棺上蓋の目張りの粘土が消失、雨漏りの為、消失骨があり、遺残骨数は少ない。

しかし、完形に近い骨が遺残、性別、年令とも識別可能で、比較的遺残性は良好であった。

3．遺残骨名とその部位

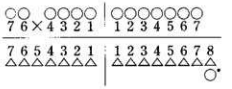
頭蓋骨

頭　　骨：ほぼ完形（右側頭骨、右後頭骨欠）、上顎骨　歯牙釘植

下 顎 骨：左下顎枝（上部：筋突起、下顎切痕、下顎頭部）

下顎歯牙：遊離歯牙　15ヶ

歯　　牙：



脊椎骨

仙椎骨：第1,2仙椎骨

下肢骨

寛　骨：左；腸骨体

右；腸骨体、寛骨臼窩、座骨、恥骨結合部

大腿骨：左；ほぼ完形、下骨端線離開、骨長360㎜（推定）

右；ほぼ完形、下骨端線離開、骨長360㎜（推定）

脛　骨：左；ほぼ完形、上骨端線離開

右；ほぼ完形、上下骨端線離開

腓　骨：左；骨体中央部、2つに折損

4．推定性別

遺残する頭蓋骨の諸形態学的特徴と下肢の大腿骨と脛骨の形態学的特徴から、本屍骨は女性骨と推定する。

5．推定年令

1）頭蓋冠縫合

外板、内板とも3縫合：すべて未融合

2）口蓋縫合

切歯縫合　外側部：癒合

内側部：未癒合

正中口蓋縫合

口蓋骨部：未融合

3）大腿骨

下端骨端線：離開

4）脛骨

上、下端骨端線：離開

5）歯牙の萌出と咬耗度

第3大臼歯：未萌出

咬 耗 度：中切歯　2°、側切歯　1°、小、大臼歯　0°

以上から、本屍の年令は青年期から壮年前期位が推察されるが、下肢骨の骨端が未融合であることを重視して、青年期（10代後半）位とした。

6．推定身長

遺残大腿骨から、本屍の身長はピアソン法で136.0㎝、藤井法で141.7㎝である。本屍の身長は大約140㎝前後と推定する。

7．その他

石棺上、石蓋の目張りの粘土が欠落して、そこからの雨漏りの為、その下に位置する本屍骨の脊椎骨、胸郭骨と上肢骨が風化・消失していた。

2号人骨

1．埋葬法

仰臥伸展位

2．骨の遺残性

雨漏りの為、下肢骨（大腿骨遠位部と脛骨近位部）が消失しているが、上半部の骨は保存がよく、遺残性は比較的良好である。

3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：顔面骨、前頭骨、右頭頂骨の一部、右側頭骨　破損骨（左頭頂骨、左側頭骨、後頭部、頭蓋底部）

下顎骨：完形

歯　牙：

△△○　△ ××5 4 3 ×1	△△△△○ r ○ 1 2 3 4 5 6 7
□7□5 4 3 2 1 ○　○○○○○	1 2 3 4 5 ×7 8 ○○○○ r　○○

脊椎骨

頸椎骨：2ヶ（No.不明）、椎孔部とその周辺骨

胸椎骨：7ヶ（No.6，7，8，9，10，11，12）、ほぼ完形

腰椎骨：5ヶ（No.1，2，3，4，5）、ほぼ完形

仙椎骨：No.1，2，3　ほぼ完形

胸郭骨

胸　骨：柄、体　ほぼ完形、全長135㎜

肋　骨：左；若干

右；若干

上肢骨

鎖　骨：左；ほぼ完形（肩峰端部欠、大約130㎜）

　　右；ほぼ完形（肩峰端部欠、大約130㎜）

肩甲骨：左；関節面、烏口突起

上腕骨：左；骨体中央部

　　右；ほぼ完形（近位部後面欠）、骨長280㎜

尺　骨：左；骨体中央部～下部

　　右；骨体中央部

橈　骨：左；骨体中央部～下端部

下肢骨

寛　骨：左；腸骨体、寛骨臼窩、恥骨上枝部

　　右；ほぼ完形（仙腸関節面欠と腸骨稜中等度欠損）

大腿骨：左；近位部～骨体上部

　　右；近位部～骨体下部

脛　骨：左；骨体下部～下端部（後面欠）

　　右；骨体下部～下端部（後面欠）

4．推定性別

1）頭蓋骨の形態学的特徴

眉間、眉弓の隆起：弱い

前頭結節の発達：良好

乳様突起の突隆：弱い

2）胸骨

細く、小さく、繊細、骨長135㎜

3）鎖骨

ゆるやかなS字状、繊細、骨長135㎜

4）上腕骨

細く、きゃしゃ、粗面の発達　弱い、骨長280㎜

5）寛骨

右腸骨の大座骨切痕の形状　鈍角

6）上・下肢骨

細く、きゃしゃ、筋付着部の粗面の発達　弱い

以上から、本屍骨は女性骨である。

5．推定年令

1）頭蓋冠縫合

外板：冠状縫合；未融合

内板：冠状縫合；ほぼ融合

2）口蓋縫合

切歯縫合　外側部：融合

内側部：融合

正中口蓋縫合

口蓋骨部：未融合

横口蓋縫合　　：未融合

3）歯牙の咬耗度

切歯：ブロカーの2°

臼歯：ブロカーの1°（エナメル質　平坦化）

以上から、本屍の年令は壮年中期（30代）位と推定する。

6．推定身長

遺残する上腕骨長から、本屍の身長はピアソン法で149.2㎝、藤井法で148.0㎝である。

7．その他

石棺上蓋の目張りの粘土消失、そこから雨漏りの為、その直下に位置する本屍の下肢骨の一部は、1号人骨の胸部と上肢骨と同様に消失していた。

6号墳

6号墳の石棺内には、被葬者1体が埋葬されていた。

須恵器の七器を枕にして、頭位を東にして仰臥伸展位で埋葬されていた。

足部にも須恵器の土器が埋納されていた。

1．埋葬法

仰臥伸展位

2．骨の遺残性

遺残骨数は比較的少なく、完形骨もないが、骨の遺残性は比較的良好であった。

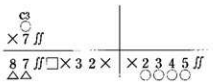
3．遺残骨名とその部位

頭蓋骨

頭　骨：ほぼ完形（鼻骨、上顎骨欠、頭蓋底函欠）

下顎骨：左右の下顎体、左下顎枝

歯　牙：



脊椎骨

頸椎骨：第１頸椎骨（上関節面）

胸椎骨：３ケ（No.不明）、椎体部を中心にその周辺骨

腰椎骨：３ケ（No.２,３,４）、椎体部を中心にその周辺骨

胸郭骨

肋　骨：左；若干（前端、後端部欠）

右；若干（前端、後端部欠）

上肢骨

肩甲骨：左；関節面、烏口突起、棘下窩部、外側縁

鎖　骨：右；胸骨端部欠

上腕骨：右；ほぼ完形、骨長288㎜

橈　骨：右；近位部（粗面部欠）

下肢骨

寛　骨：右；腸骨体、恥骨上枝部

大腿骨：右；近位部

4．推定性別

１）頭蓋骨の形態学的特徴

①眉間・眉弓の隆起：弱い

②前頭結節の発達：良好

③項平面：平滑

④外後頭隆起：弱い

２）上肢骨の形態

①鎖骨：細く、きゃしゃ

②上腕骨：細く、きゃしゃ、粗面の発達　弱い

以上から、本屍骨は女性骨と推定する。

5．推定年齢

１）頭蓋冠縫合

冠状縫合：ブレグマ部周辺部；融合

辷曲部～側頭部；未融合

矢状縫合：頭頂全面；融合

人字縫合：左右の上部のみ；融合

中～下部；未融合

２）歯牙の咬耗度

切歯：ブロカーの２°

臼歯：ブロカーの１°（平坦化）

3）骨棘形成

胸椎骨と腰椎骨の椎体　骨棘形成（＋＋）

以上から、本屍の年令は熟年期（40～50才）位が推定される。

6．推定身長

遺残する上腕骨長から、本屍の身長はピアソン法で154.7㎝、藤井法で150.0㎝である。

7．その他

仰臥伸展位で埋葬であれば、後世の人為的撹乱がない限り、人骨はほぼ骨格順に遺残するのが通例である。

しかし、被葬者（本屍骨）は仰臥伸展位で埋葬されていたが、一部の骨に混乱がみられた（集骨状）。

考察

被葬者同士の血縁関係

1．5号墳1号石棺の出土人骨

石棺内には、被葬者3体が伸展位で埋葬されていた。

内訳は

1号人骨：♀（壮年中期、身長141.6㎝）

2号人骨：♂（壮年中期、身長159.0㎝）

3号人骨：小児（5～6才、身長不詳）

である。

1号人骨（♀）と2号人骨（♂）は並置埋葬され、両者の上肢部の間に、3号人骨（小児）の上腕骨と歯牙若干が検出された。

埋葬順序を推察すると、まず1号人骨（♀）が初葬（1次葬）され、追葬（2次葬）は恐らく3号人骨（小児）で、1号人骨（♀、母？）の左側に並置埋葬され、あたかも母児が添い寝する格好であったろうと思量する。

そして、追々葬（3次葬）として、2号人骨（♂）が1号人骨（♀）と並置埋葬されるに及んで、石棺内が狭い為に、あえて白骨化した3号人骨（小児）の頭蓋骨と歯牙（下顎骨）を石棺の反対側（対置埋葬）に移動し、2号人骨（♂）を埋葬したと推察する。

その際、小児の一部の骨（上腕骨と歯牙）が故意か過失か、たまたま現場に遺残したと推察する。

筆者が人骨採取の際、1号人骨（♀）の上腕骨、3号人骨（小児）の上腕骨と2号人骨（♂）の上腕骨の3本の形態の異なった上腕骨が「川」の字状に遺残していた。

石棺内に埋納された須恵器の上器は、いずいれも山陰歴のⅢ期で、6世紀後半位で、それほど時期はずれていない。

狭い石棺内に、あえて3体が埋納されたことは、きわめて血縁関係の濃い間柄が想定され、親

子（父母児）の関係が思量される。

類例として、高広遺跡１区３号横穴墓がある（第182図）。

本横穴は、島根県安来市黒井田町に所在する。

被葬者は３体が埋葬され、成人男性（壮年～熟年）、成人女性（壮年）と小児（10才位）が「川」の字状に遺残していた。

横穴内の須恵器の土器は、いずれも山陰歴Ⅲ期で６世紀後半位で、時期差を認めていない。

遺体の状況、土器の編年歴、血液型から、被葬者同士の関係を親子（父母児）関係であろうと推定した[3]。

田中良之[4]は、同横穴墓の出土人骨の歯冠計測値を用いて、被葬者の親族関係モデルはA-Cモデルが採用され、親子（父母児）の関係を示唆している。

２．５号墳３号石棺の出土人骨

石棺内には、被葬者２体が伸展位で対置埋葬されていた。

内訳は

１号人骨：♀（青年期、身長136.0cm）

２号人骨：♀（壮年中期、身長149.2cm）

である。

両者の頭位に埋納された須恵器の土器は、いずれも山陰歴のⅢ期で６世紀後半位である。

被葬者同士の関係は、姉妹か母娘が思量されるが、いずれであるか、現時点では不詳である。

類例として、島根県仁多郡横田町宮ノ峠に所在する宮ノ峠横穴墓[5]がある（第183図）。

横穴墓内には、被葬者２体が伸展位で埋葬されていた。

内訳は

１号人骨：♀（壮年後期、身長145～150cm）

２号人骨：♀（壮年後期～熟年前期、身長150cm）

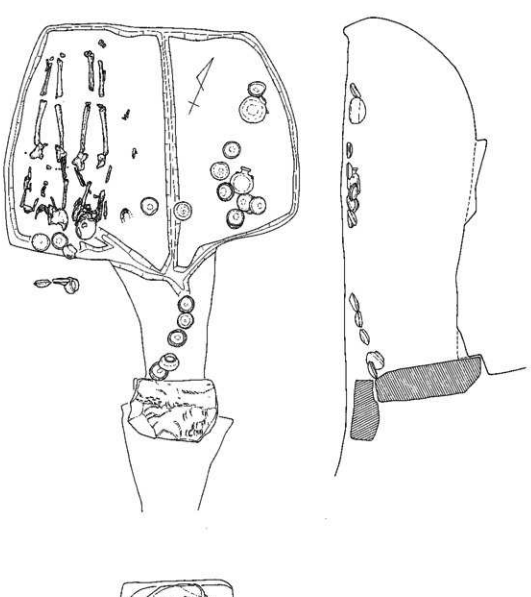
である。

１号人骨（♀）と２号人骨（♀）の両後頭面に、出現頻度のきわめて低い、遺伝性の強いインカ骨（同じ形状）をいずれも有していた[6]。

両被葬者の頭位に埋納された須恵器の土器は、いずれも山陰歴のⅢ期で６世紀後半位で、それほど時期差は認められていない。

被葬者同士の関係は、姉妹か母娘が想定されたが、追葬までの時間差（土器）から判断すると、姉妹と思量するのが妥当であろう。

古墳時代の親族構造の研究で、田中良之[7]は横穴および石棺内の複数以上の出土人骨の歯冠計測を用いて、モデル抽出して血縁関係を説明している。



第182図　高広遺跡Ⅰ区３号横穴墓出土状況

岩屋古墳群

５号墳

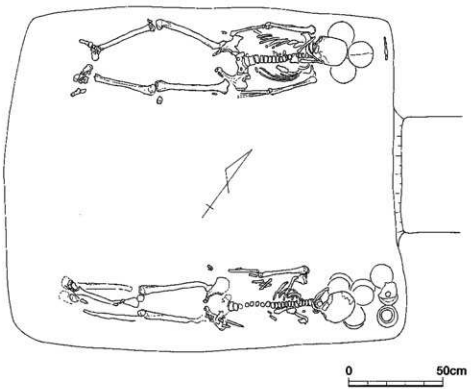
１号石棺：３体（成人男女、小児）

２号石棺：１体（成人女性）

３号石棺：２体（成人女性、青年女性）

６号墳　　：１体（成人女性）

以上の出土人骨７体について、今後より正確な説得力のある血縁関係の解明（DNA鑑定、歯冠計測値を用いた分析ら）に期待したい。



第183図　宮ノ峠横穴墓出土状況石室実測図

まとめ

島根県八束郡玉湯町所在の岩屋古墳群は６基からなり、人骨が出土したのは２基（５号墳と６号墳）のみであった。

５号墳は３つの主体部（石棺）があり、各石棺から人骨が出土した。

１号石棺は被葬者３体が埋葬され、成人男女（２体）と小児（１体）であった。

被葬者同士の間柄は、恐らく親子（父、母、児）の関係が思量される。

２号石棺は被葬者１体が埋葬され、成人女性であった。

３号石棺は被葬者２体が埋葬され、成人女性と、青年女性であった。

被葬者同士の間柄は、恐らく母娘か姉妹の関係が思量されるが、いずれであるか現時点では不詳である。

６号墳は被葬者１体が埋葬され、成人女性（熟年）であった。

岩屋古墳群からの出土人骨総数は７体（成人男性１体、成人女性４体、青年女性１体と小児1体であった。

その他の古墳（１～４号墳）は、人骨が出土しなかったが、恐らく数体以上が埋葬されていたものと推察される。

文献

1．Pearson, K.(1899)：Mathematical contributions to the theory of evolution, V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races, Phil. Trans. Roy. Soc. London. ser. A, 192, 169-244.

2．藤井明（1960）：四肢長骨の長さと身長との関係に就いて，順天堂大学体育紀要 3, 49-61.

3．井上晃孝（1984）：高広遺跡横穴墓より出土の人骨について，高広遺跡発掘調査報告書，195-204，島根県教育委員会.

4．田中良之（1995）：古墳時代親族構造の研究 —人骨が語る古代社会—，201-204．柏書房，東京.

5．井上晃孝（1994）：横田町宮ノ峠横穴墓出土人骨について，角・宮ノ峠横穴，柏原遺跡発掘調査報告書，14-25，島根県横田町教育委員会.

6．Dodo, Y.（1975）：Non-metric traits in the japanese crania of the Edo period, Bull. Nath. Sci. Museum. Ser. D. 41-45.

7．田中良之（1995）：古墳時代親族構造の研究 -人骨が語る古代社会—，柏書房，東京.

第６表　玉湯町岩屋古墳群出土人骨一覧

古墳No.	主体部（石棺）No.	被葬者数	被葬者	推定性別	推定年齢	推定身長	その他
5号墳	1号石棺	3	1号人骨	女性	壮年中期位（20代後半）	ピアソン法：141.6cm 藤井法：148.9cm	
			2号人骨	男性	壮年中期位（20代後半）	ピアソン法：159.0cm 藤井法：159.2cm	上半部骨のみ上下逆転（骸臥）
			3号人骨	不詳	小児（5～6才）	不詳	本屍骨：2ヶ所から出土（移動の形跡あり）
	2号石棺	1		女性	壮年中～後期位（30代）	不詳	石棺内土砂流入堆積 耳環2ヶ検出
	3号石棺	2	1号人骨	女性	青年期位（10代後半）	ピアソン法：136.0cm 藤井法：141.7cm	石棺内幽遷り 骨一部消失
			2号人骨	女性	壮年中期位（30代）	ピアソン法：149.2cm 藤井法：148.0cm	石棺内幽遷り 骨一部消失
6号墳		1		女性	熟年期位（40～50才）	ピアソン法：154.7cm 藤井法：150.0cm	

岩屋遺跡出土古墳人骨の親族関係

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座
田中良之

1．はじめに

島根県八束郡玉湯町所在の岩屋遺跡から、古代の玉造工房とともに、古墳時代後期の古墳6基、土壙墓6基が検出された。そのうち3基の石棺と6号墳から計7体の人骨が出土し、多くは保存状態良好なものであった。調査終了後、整理の過程において、調査を担当した島根県教育庁文化課より、被葬者の親族関係を知るために人骨の歯冠計測値等による分析の依頼があった。そこで、鳥取大学医学部法医学教室における出土人骨の整理・分析が終了した後、人骨を九州大学の筆者のもとへ搬入し、歯冠計測等を行い、親族関係の分析を行った。

本稿は、その結果を報告するとともに、先学および筆者のこれまでの研究成果をふまえながら、若干の考察を行ったものである。

2．出土人骨の概要と被葬者の構成

人骨は5号墳と6号墳から出土している。そのうち、5号墳からは3基の石棺から6体の人骨が出土しているが、歯冠計測値等による分析が可能であったのは、5号墳1号石棺の2体と、3号石棺の2体および6号墳出土人骨のみであった。なお、人骨の出土状態については本書の当該の項に詳しいが、調査時の記録をもとに筆者なりに検討し判断した部分もある。また、人骨の年齢推定についても、原則として人骨報告によっているが、一部抗原（1957）に基づいた筆者の観察結果によっている。

まず、5号墳からみていくと、1号石棺は、長辺に各3個の縄掛突起を施したもので、墳丘の中央からやや西よりにあり、長軸は墳丘の主軸からやや北にふれる。人骨は石棺内から3体が出土している。1号人骨は30才前後からそれ以降と推定される女性で、石棺の北に位置する。頭骨と上半身は石棺の中央やや北寄りに位置するが、左右の肩関節および股関節が近接しており、下肢は石棺の北側側壁に押しやられた状態である。

2号人骨は、歯牙咬耗が1号人骨よりも進行した30代から40才前後程度の男性で、石棺の南側に位置し、下肢骨は側壁に接するようにして葬られている。右股関節は関節状態であり、左は破損しているものの同様であったと考えられる位置関係である。左右寛骨と仙骨・腰椎の位置関係も乱れはない。ところが、上半身はうつ伏せた俯臥の状態を示す。この状態をみると、他の被葬者の追葬時やその他の機会に上半身のみが反転させられたと考える方が自然なようにも思える。そして、頭骨から腰椎までの脊椎骨は乱れなくつながっており、胸椎と肋骨、右肩関節も関節状態であることから、埋葬後に上半身が反転させられたとすれば、軟部組織がかなり残っている状態で行われたことになろう。ところが、左肩甲骨は右肩甲骨近くにあり、左上腕骨から大きく離れている。しかも、頭骨は真下ではなく、右斜め下に向けた状態で、胸椎も腰椎から次第にねじれたような状態である。このような状態からみて、埋葬時に石棺内が狭隘であるために、上半身を右側臥かそれ以上の状態に大きくねじって埋葬し、その後軟部組織の腐朽につれて上半身は俯臥に近い状態で倒れ込み、、

左肩甲骨は右肩甲骨近くに転落した可能性がむしろ高い。

3号人骨は6才前後の幼～小児である。頭骨は石棺の西小口付近にあり、歯牙も付近から検出されている。ところが、四肢骨は1号人骨付近で検出されており、明らかに移動された状態である。頭骨と歯牙がまとまっているわりには、体部骨が周辺に全くないことからみると、本来は1号人骨の側に葬られていたものが、その後足元の西小口に頭を移動したものと考えられる。

以上から、5号墳1号石室の3体の被葬者は、1号人骨が初葬であり、次に3号人骨が葬られた。そして、最後に1号人骨を北側に少し押しやり、3号人骨の頭骨を西側の小口（足元）へと片づけて、それによって出来た狭隘なスペースに不自然かつ窮屈な姿勢で2号人骨が埋葬されたと考えられる。また、これらの埋葬間隔は、1号人骨を2号人骨埋葬時に片づけたとすると、1号の骨盤などの関節が外れていることになるため、おおよそ10年以上の間隔を見込む必要があるだろう（田中他1985）。しかし、そうであっても30才前後（1号人骨）と30代～40才程度（2号人骨）という推定年齢からみると、生前の世代構成はほぼ同年齢に近い同世代であったと考えられる。3号人骨は6才前後であるため、この2体の子供に相当する世代として大過なかろう。

2号石棺は、墳丘中央よりやや東によっているが、長軸は墳丘のそれと最も合っている。蓋石は成形しているものの縄掛け突起をもたない。歯冠計測値による分析は不能であったが、30才前後の女性1体が埋葬されていた。

3号石室は、墳丘中央から北よりに位置し、長軸は墳丘の主軸に斜行する。1号人骨は、10代後半の女性で、石棺の北半に西に頭を向けて葬られている。右側臥といっていい姿勢であり、頭骨以外は上半身が保存されていないものの、左下肢を大きく曲げて右に倒している。不規則な姿勢であるが、左右下肢骨からみて、ほぼ埋葬時の姿勢を保っていると考えられる。

2号人骨は、石棺の南半分に葬られた30代～40才程度の女性で、一見して窮屈な姿勢である。子細にみると、右大腿骨は反転しており、脊椎は蛇行もしくは湾曲している。また、上半身が全体に「肩をすぼめた」かのような姿勢であり、不自然である。したがって、これらから、2号人骨は本来石棺の中央付近に埋葬されたものが、1号人骨の追葬の際に石棺の南側に押しやられたものと考えられる。

この2体の埋葬間隔は、2号人骨の各関節が大きくは乱れていないことから、それほどの時間幅があるとは考えられない。そして、10代後半の女性が初葬であり、その数年後には30代の女性が葬られたということになるので、2体の被葬者の世代的関係は、年の離れた姉妹といった同世代の場合と、母子といった二世代の場合が考えられよう。

6号墳は、東西に主軸をとった箱式石棺に、40代の女性が葬られていた。出土状態は、頭骨・下顎骨・上腕骨・大腿骨がおおむね本来の位置かその近くにあると思われるが、椎骨や肋骨などの位置関係は大きく乱れている。この人骨の状態は、骨化した遺体をこの石棺に運んできて埋葬したことを想起させるかもしれないが、躯幹骨の乱れに反して上・下肢骨が本来の位置に近いことからみると、むしろ遺体の軟部組織が普及した後に二次的に遺体を乱した可能性を示す。また、古墳時代においては、儀礼的に遺体一部を二次的に動かすことが知られていることから（田中・村上1994）、この事例もそのような儀礼行為の所産とみることもできよう。ただ、このような儀礼行為は、通常は遺体の一部に象徴的に行われるものであり、この例は様子が異なる。あるいは、この事例は石棺内に進入した小動物によって動かされやすい躯幹骨が乱された可能性も考えられる。

3．被葬者の親族関係分析

歯冠計測が可能であったのは5号墳の1号石棺の1・2号人骨と3号石棺の1・2号人骨4体であった（表7）。歯冠計測値に基づくQモード相関係数による血縁関係の推定は、歯の保存の関係で、必ずしも多くの組み合わせでは行えなかったが、表2の結果が得られた。

まず、5号墳1号石棺の被葬者であるが、上記のように、この2は生前は同世代であったと考えられる男女であった。そして、得られたQモード相関係数は$I^1CP^1P^2M^1M^2I^1I^2CP^1P^2$の組み合わせで0.635という高得点が得られており、この男女が血縁者であった可能性を強く示している。

5号墳3号石棺の2体は、生前は同世代とも2世代とも可能性があるものであったが、表2が示すように$I^1I^2CP^1P^2M^2I^1I^2CP^1P^2M^2$や$CP^1P^2M^2CP^1P^2M^2$などの組あわせで0.300代の値が得られた。この結果は、この2体が積極的に血縁者であることを示すものではないが、両者が似ていないという値でもない。いわばグレイゾーンであることを示すものである。

次に、5号墳1号石棺の被葬者と3号石棺の被葬者間の関係であるが、表2のように、1号石棺1号人骨と3号石棺1号人骨との間に、および1号石棺2号人骨と3号石棺1号人骨との間に0.366、0.308などの値が得られた。この値は3号石棺内の2体の関係と同様のであり、やはり血縁関係を否定できるものではなく、グレイゾーンであるといえる。

4．岩屋遺跡被葬者の親族関係

以上の分析結果から、5号墳1号石室の2体の被葬者は、同世代の男女であり、歯冠計測値による分析結果から血縁関係にあったと推定された。したがって、この2体は同世代の近い血縁者、すなわちキョウダイであった可能性が最も高く、3号人骨（幼児）はいずれかの子ということになろう。

また、3号石室の2体は、同世代と2世代の二つの可能性があるが、この2体はいずれも女性であるため、夫婦のような他出自の人物を交えない構成の可能性が高いと考えられる。そして、歯冠計測値による分析結果は血縁者としての可能性を否定しないというものであった。したがって、この2体の女性は、姉妹か母娘であった可能性が高い。

このように、5号墳の3基の石棺のうち、複数埋葬であった2基の石棺は、男女のキョウダイ（1号石棺）および、キョウダイもしくは母娘という構成であったと推定される。このような被葬者の構成原理は、筆者がこれまで分析してきた事例によれば、古墳時代前半期（3～5世紀代）のものであり、双系的親族関係を基礎とするものである。そして、5世紀後半から父系の血縁者のみで構成されるようになり、6世紀前半～中頃に家長のみが夫妻で埋葬されるようになるというのが全体の趨勢であると考えられる（田中1995）。

しかし、岩屋5号墳は6世紀中葉～後半に属するにもかかわらず、キョウダイ原理によるものであり、これまでの事例で最も後出する。もちろん、変化における階層差を考慮する必要があるものの、出雲でも6世紀後半の上分中山1号墳では父系血縁者のみの埋葬が行われており、高広Ⅰ－3号横穴墓では家長夫妻とその子という構成の可能性が高いという分析結果が得られている（田中1995）。したがって、この事実は、首長層での変化過程は正確にはわからないものの、それ以下の階層において出雲における父系的家族編成への変化が他地域に比べて後出することを物語るものである。

次に、これら5号墳の3石棺の関係であるが、調査時の所見によると、棺身の設置は同時であり、1号石棺→2号石棺→3号石棺の順に埋葬が行われたという。もちろん、1・3号石棺は追葬が行われていることから、この順序は追葬終了の順序ということになろう。ただ、1号石棺は初葬から10年ほど経過してから追葬が行われていることからみると、3基の石棺の埋葬が終了するには、少なくとも10数年を要したと考えられる。しかし、それ以上の長期に及ばないことは、3基の石棺内に供された須恵器の年代観が、1号石棺の須恵器が3号石棺のそれよりもやや先行すると思われるものの、いずれも出雲4期（TK209前半期）に収まることが示している。

そこで、これら6体の生前の年齢を1号石棺1号人骨死亡時に遡算してみると、1号石棺1号人骨：30代、3号人骨：幼児、2号人骨：30前後、2号石棺人骨：20前後、3号石棺1号人骨：幼児、2号人骨：10代～20代ということになる。このように、復元された各被葬者の年齢差は、幼児となる2体を除いて世代差まで広がらないのである。したがって、3基の石棺は世代差に基づいて築造されたものではないと理解されよう。

そして、この古墳群が、1号墳の主体部が土壙墓、2号墳は割石の横穴式石室、4号墳が切石追りの横穴式石室であることからみて、全体としては東から西へと築造された傾向が看取される。その傾向からすると、5・6号墳もその傾向の中で理解されるべきであろう。したがって、これらの墳丘墳は世代ごとに1基が築造された割合になる。そうすると、5号墳の3基はどのような集団を反映しているのだろうか。

まず、想起されるのが、次世代となる2体（1号石棺3号人骨、3号石棺1号人骨）を除く4体が、一つの家族におけるキョウダイである可能性である。たしかに、1号石棺の2体が血縁関係にあるだけでなく、1号石棺と2号石棺の被葬者間でも、1号石棺の2体と3号石棺1号人骨がグレイゾーンの値を示しており、その可能性を示唆している。しかし、そうであるのならば、2号石棺に1体しか埋葬されていないのは不都合である。また、調査時の所見のように、3基が最初に同時に設置されたというのであれば、当初から3基分の被葬者が予定されていたことになるため、なおさら不都合である。

以上から、5号墳は、当初から三つの単位が埋葬されることが予定され、それらの単位の成員相互には血縁関係が想定しうるという集団を背景としていることになるだろう。そして、このような集団は、通常の直系家族の範囲を超えるものであり、傍系親族をも含んだ大家族あるいは親族に相当することになるだろう。したがって、5号墳の3基の埋葬は、古墳の造営主体である集団の代表者を葬ってはいるものの、親族や家族集団の中で有力家族を析出しえないまま葬ったことを示していると考えられるのである。

このような現象から導き出されることは、岩屋遺跡における6世紀中頃の集団が、双系的親族関係に基づき、未だ代表権あるいは経営権が特定個人はおろか特定家族にすら集約され得ない状況であったということであり、家父長制家族の成立にはだいぶ遠い状態と評価されよう。この時期にこのような古相を呈する埋葬原理が存在することは、岩屋の集団の特殊性（保守性）なのか、あるいは出雲地方ひいては日本海沿岸に一定程度普遍化されるものであるのかは今後の事例の増加に待つ他はないが、いずれにしても父系直系家族の成立が地域によって変異することを示す事例であり、5～6世紀における政治的変動とも連動する可能性を孕んだ重要な知見であると考えられる。

表7　岩屋5号墳出土人骨歯冠計測値　（単位：mm）

		歯種	1号石棺 1号人骨 l	1号石棺 1号人骨 r	1号石棺 2号人骨 l	1号石棺 2号人骨 r	3号石棺 1号人骨 l	3号石棺 1号人骨 r	3号石棺 2号人骨 l	3号石棺 2号人骨 r
上顎	近遠心径	I^1	—	9.7	8.6	8.4	8.7	8.5	7.7	7.6
		I^2	—	—	6.6	6.8	7.8	7.6	6.9	—
		C	7.3	8.5	8.3	8.4	8.2	8.2	—	7.5
		P^1	7.4	7.4	(6.3)	7.1	7.7	7.6	—	7.5
		P^2	7	6.8	6.5	6.7	7	—	6.8	6.7
		M^1	10.7	10.9	10.4	10.5	11.1	11.1	—	—
		M^2	10.1	10.3	—	10.4	10	10.4	10.8	—
	頬舌径	P^1	9.6	9.8	9.3	9.3	9.3	9	—	10.5
		P^2	9.7	9.5	9.4	9.5	8.9	—	8.5	8.7
		M^1	11.8	11.7	10.8	11	10.7	10.7	—	—
		M^2	12.2	12	—	11.5	10.7	10.8	11.1	—
下顎	近遠心径	I_1	5.7	5.9	—	—	5.2	5.4	4.8	(4.4)
		M_2	6.3	6.2	—	—	5.9	5.7	5.5	5.3
		C	7.4	7.4	7.1	—	6.9	6.9	6.3	6.5
		P_1	7.3	7.6	7.2	—	7.1	7.1	7	6.8
		P_2	—	7.2	6.9	6.7	—	7.1	6.8	—
		M_1	—	—	10.9	11.3	11.3	11.3	—	—
		M_2	—	—	10.6	10.7	10.8	10.9	10.9	10.9
	頬舌径	P_1	7.8	7.9	—	7.8	7.8	7.9	7.7	7.3
		P_2	—	8.7	—	8.3	—	8.2	7.8	—
		M_1	—	—	10.8	10.9	10.5	10.5	—	—
		M_2	—	—	—	—	10.1	10.3	10.1	10.1

表8　岩屋5号墳被葬者の歯冠計測値に基づくQモード相関係数　（単位：mm）

歯種の組み合わせ ＼ 被葬者のペア	1-1号×1-2号	1-1号×3-1号	1-1号×3-2号	1-2号×3-1号	1-2号×3-2号
$I^1CP^1P^2M^1M^2I_1I_2CP_1P_2$	0.635	—	—	—	—
$I^1I^2CP^1P^2M^1I_1I_2CP_1P_2M_2$	0.353	—	—	—	—
$CP^1P^2M^1CP_1P_2M_2$	0.393	—	—	—	—
$I^1CP1P^2M^1M^2I_1I_2CP_1P_2$	0.310	0.366	-0.145	—	—
$I^1CP^1P^2M^1M^2I_1I_2CP_1P_2$	—	0.275	—	—	—
$I^1I^2CP^1P^2M^1M^2CP_1P_2M_2$	0.310	—	—	0.125	0.308

5．おわりに

岩屋遺跡からは5号墳と6号墳の2基から計7体の人骨が出土した。そのうち、5号墳の3基の石棺から出土した5体の人骨で親族関係を行うことができた。その結果は、5号墳1号石棺の男女は血縁者であり、3号石棺の女性2体もその可能性を否定できないというものであった。したがって、これらは1号石棺がキョウダイ関係、3号石棺はキョウダイか母子であった可能性が高い。また、このような被葬者の関係は、通常古墳時代前半期のものであり、岩屋遺跡の6世紀中頃～後半という時期は、かなり後出的である。さらに、5号墳の3基の石室には、直系親族に傍系親族を含んだ被葬者が絞り込まれることなく埋葬されたと考えられ、親族集団の代表権あるいは経営権が特定家族に集約されない状態を示すと考えられた。

以上の結果は、たんにこの遺跡だけでなく、出雲地方ひいては日本海沿岸地方の地域的特性を示す可能性をもち、5～6世紀における社会動態との関連において、今後注目されるべき事例であると考える。

最後に、岩屋遺跡出土人骨の分析の機会を与えていただいた、島根県教育委員会ならびに埋蔵文化財センター各位、とりわけ林健亮氏に感謝申し上げたい。また、人骨調査に協力いただいた九州大学大学院比較社会文化研究科大森円氏にも感謝したい。

文献

土肥直美・田中良之・船越公威，1986：歯冠計測値による血縁者推定法と古人骨への応用．人類学雑誌，94-2

田中良之，1995：古墳時代親族構造の研究．柏書房

田中良之・村上久和，1994：墓室内飲食物供献と死の認定．九州文化史　研究所紀要，39

田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文，1985：上ノ原横穴墓被葬者の親族関係．上ノ原横穴群Ⅳ．大分県教育委員会，大分．

栃原博，1957：日本人固有咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31（補冊4）

第6章　まとめにかえて

第1節　岩屋遺跡の古墳群について

1号墳・3号墳・SK02を除き、各古墳、土壙墓には遺物が比較的豊富に残されていた。それらに注目した古墳群の時期は、大谷編年の出雲2期～4期で、その中でも横穴式石室を持つ2号墳が2期を中心とする最も古い須恵器をともなっていた。したがって、当遺跡は出雲における横穴式石室導入期からの古墳群の様相を考える上で、貴重な資料を多く提供するものといえる。以下では、遺構・遺物などから窺われる、当古墳群の特徴について若干の検討を加えることにする。

古墳造営の先後関係　2号墳以後に造られたことが明確な4～6号墳は、いずれも大谷編年の出雲4期を中心とするもので、追葬などを考慮すると、これらが埋葬施設として機能していた期間に併存時期があったことも想定される。しかし、それぞれの古墳の造営が開始された時点については、5号墳出土の須恵器を参考に、ある程度前後関係を想定することも可能であろう。

すなわち、5号墳の須恵器のうち1号石棺の坏蓋は口縁端部内面の沈線の上位をやや肥厚させていて、段状に仕上げることを意識していたことが窺われる。しかし、2号石棺・3号石棺のものは浅い沈線のみで、全く段状を呈さない。埋葬順からみて1号石棺のものが他のものより古いとすれば、この差が時期差に反映されている可能性もあり、また6号墳で5号墳1号石棺と類似の口縁端部を持つ蓋坏が3期に遡る可能性を持つ坏蓋と共伴していることもこれと矛盾しない。とするならば、破壊により流出したものがあるので確実とはいえないが、4号墳出土の蓋坏は5号墳2号石棺・3号石棺のものに近く、5号墳の造営開始より後に造営が始まったと考えることができる。つまり、初葬時期だけで考えると、6号墳、5号墳、4号墳の順番が想定されるのである。

一方、1号墳や3号墳の時期については参考にできる遺物がないので明確でない。しかし、1号墳は丘陵頂部にあることや主体部に土器が埋納されていなかったことから、最も早い時期の古墳で、3号墳は同一尾根上で2号墳と4号墳に挟まれていたことから、2号墳と4号墳の間の時期と理解するのが矛盾のない解釈であろう。

墳丘　今回の調査では、主体部の構造、埋葬方法とかかわって、墳丘の築成の手順についても様々な知見を得ることが出来た。その詳細については第2節で述べたので、ここで繰り返すことはせず、そこから窺われる特徴について若干述べておくことにする。

まず、墳丘は石棺・石室いずれの主体部であっても、その内部に「小墳丘」と呼びうるようなものを持つものがある。

石棺を持つ古墳では5号墳に「小墳丘」の存在が確認されたが、これは埋葬の終了した1号石棺と2号石棺をそれぞれ被覆するものとして検出されている。しかし、3号石棺の最終埋葬が終わると「小墳丘」は築かれず、墳丘が一気に築き上げられていた。すなわち、これら「小墳丘」は古墳内の石棺全ての埋葬が終了する以前の段階で、個別には最終埋葬を終えた棺に盛られるものであったと理解できる。こうしたことから、この「小墳丘」は、古墳全体の埋葬が終了するまでの間、個別の棺ごとの「仮の墳丘」として機能するものであった可能性が浮かび上がる。

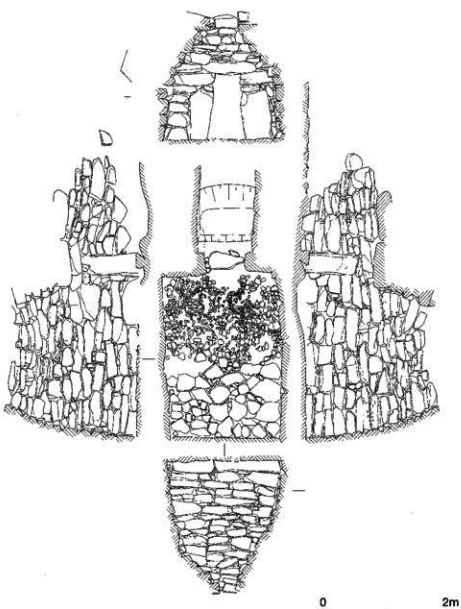
一方、石室を持つ古墳の場合、2号墳において墳丘内の「小墳丘」が確認されたが、これは基本的に石室を築く際に、その工程に伴って石室壁体を押さえる役割を持ちながら形成されたものと考

えられる。すなわち、ここでの「小墳丘」は5号墳の石棺に被せられたものと異なり、古墳築成上の工法的問題とかかわっている。しかし、それを単に工法上の問題にとどめるべきでないことは、既述したように「小墳丘」の一定期間の露出が想定されることから明らかである。2号墳でも追葬があったことを考えると、これが5号墳と同じく、初葬から最終埋葬までの期間の問題とかかわる可能性は十分考えられて良いだろう。なお、松江市の岡田薬師古墳においても墳丘が初葬後しばらく未完成のまま置かれて、その間祭祀行為なども行われていたことが指摘[1]されている。

墳丘とかかわって当古墳群を考える場合、もう一つ留意されるのは、その墳形である。現在、玉湯町内で発掘調査や分布調査により確認されている方墳[2]は多くはなく、方墳や前方後方墳はむしろ松江市付近に点在することは注意されるだろう。

石室　岩屋古墳群の特質は、出雲最古級となった岩屋2号墳の横穴式石室にも現れている。2号墳の石室は、出土遺物から同じ玉湯町内の林43号墳[3]の横穴式石室とほぼ同時期のものであることが判明したが、岩屋2号墳の石室を林43号墳と同じ両袖式のものと仮定しても、両者の間にはいくつかの大きな相違がみられる。

すなわち、第一に林43号墳では玄室奥壁の基底石が両側壁に挟み込まれるように配置されているのに対し、岩屋2号墳はその関係が逆となる。第二に、玄室の平面プランが林43号墳では2.6m×1.8mと長方形であるのに対し、岩屋2号墳は2m×1.85mと奥行きが短く、正方形に近い。第三に林43号墳は開口方向を真北に向けるのに対



第184図　林43号墳　石室実測図（S=1／40）

し、岩屋２号墳はそれを真西に向けている。

このうち、出現期の横穴式石室で西側開口のものは出雲の東部・西部ともに散見されるが、奥壁が側壁の外側となる配置を持ち、西側開口の同時期の横穴式石室を探せば、岩屋２号墳よりやや新しい松江市大草町の岡田山１号墳[4]がこれに当てはまる。

一方、墳形でみても林43号墳のある林古墳群は、前方後円墳である43号墳を含め、前方後円墳４基、円墳46基で、方墳は石棺式石室を持つ８号墳のみである。なお、先の岡田山１号墳は大型の前方後方墳である。

このように、位置や築造時期が近い林43号墳と岩屋２号墳の間には、直接的な相互の影響を想定することが困難である。むしろ、両古墳群を形成した集団間にはその政治的結びつきに差があったようにさえみえるのである。

当古墳群では石室の可能性がある古墳として、もう一つ４号墳があげられるが、主体部はほとんど破壊されていたため、断定することができない。ただ石室であるとすれば、切石積みの横穴式石室で、開口方向は北側の可能性が考えられる。この場合、石室の側壁の長さは1.3m程度の短いものが想定されるが、壁面を一枚石で築成しようとする指向や南向き開口といった石棺式石室の要素[5]は備えていない。しかも、白粉石を石室石材に使用した可能性もあり、４号墳の位置付けについては、今後の資料の増加を待って検討されるべきであろう。

石棺は５号墳から３基、６号墳から１基出土している。これら計４基の石棺は、棺身の石材・形態にほとんど差異を見出しがたいにもかかわらず、棺蓋は全く異なるものを採用していた。ここでまず棺身に共通する要素をまとめておく。

①石材は、厚さ10cm前後の石英安山岩質凝灰岩（白粉石）の板状切石を用いる。

②それぞれ２～３枚の板石を用いた両側石が、両小口を挟み込む。

③側石・小口とも上端部外面は内側に入り込むように面取りされて蓋石に接する。

④側石と床石が接する部分は側石が僅かに削られ、床石と密着するような工夫がなされる。

⑤棺身の長軸は東西方向を指向する。

一方、棺蓋の場合は石材や形態がそれぞれ大きく異なる。特に５号墳の場合は、同一墳丘上で同じ棺身を採用しながら、棺蓋の形態は変えており、被葬者の性格が棺蓋によって主張されていたことが窺われる。そうであるならば、最終的に埋納される棺蓋にも「見せる」段階があったことが想定され、墳丘上において閉じられた石棺蓋を一定期間露出させていた可能性も考えられる。棺に追葬があるにもかかわらず、５号墳の石棺に棺の被覆を切った様子は観察されず、あるいは初葬から最終埋葬までは棺は蓋がなされた状態で墳丘上に露出していたのではなかろうか。

また、石棺の床幅は東側の辺の方が西側の辺よりも広くなる傾向があるが、その差は棺ごとに異なっている。ここでそれらを整理すると表１のようになる。

表９　石棺の床幅と埋葬者数

古　墳	石　棺	東　側	西　側	差	埋葬者数
５号	１号	50cm	34cm	26cm	３人
５号	２号	45cm	40cm	5 cm	１人
５号	３号	48cm	38cm	10cm	２人
６号		37cm	36cm	1 cm	１人

表1によると、各棺の西側の床幅は34～40cmの範囲で大きな差がないのに対し、東側は37～50cmと大小様々である。しかも、東側と西側の床幅の差は埋葬者数が増加するほど大きくなる傾向があることがわかる。もし棺の東が頭位とされていれば、東の頭側を広くするのは、遺体の肩幅を考慮したためと想定しうるだろうが、実際の出土状況は、5号墳1号石棺の3体のうち小児骨の頭蓋骨片・歯牙などが棺の西側から検出され、3号石棺の2体も頭位を互い違いにしているなど、西側を頭位とするものも存在している。

ここで5号墳を参考に棺身が据えられる段階について考えると、3つの棺身は最終埋葬が終了する棺の登場以前に、すでに全て墳丘上に揃っていたと想定されることは第2節で述べたとおりである。すなわち、5号墳は同一墳丘内の3つの棺に入るべき埋葬者がある程度あらかじめ予定されていて、それらが早くに準備された状況を想定しうる。したがって、棺身は頭位が一定方向となることを前提に用意されたにもかかわらず、その後の埋葬時にはそれが守られない場合もあったとみれば先の矛盾は解消しうる。5号墳1号石棺の小児骨が当初は東側にあって、後に西側に移動されたとの井上晃孝、出中良之両氏の指摘[6]を考え併せると、7体の人骨のうち、最初から西に頭を向けていたのが明らかなのは5号墳3号石棺の10代後半の女性のみである。頭位を西側に向けることは、当初予定されたものというより、後事的な何らかの特別な要因が働いたためではなかろうか。

ところで、人骨の分析を依頼した田中良之氏によって、5号墳は双系的親族関係を基礎とした傍系親族を含む血縁者の埋葬が考えられるとの注目すべき指摘[7]がなされたが、不規則的な5号墳の棺の配置において、1号石棺がやや西に寄りながらも古墳のほぼ中央部に置かれていることは、この棺の単位が5号墳に埋葬された社会集団の中心的存在となっていた可能性を推察させる。1号石棺の位置に規定され、他の二つ石棺はさらに狭いスペースでの設置を余儀なくされていたと考えられるが、そもそも、墳丘北西側は石棺設置面を地山ではなく盛土で整地しているため、実際に3号石棺が自らの重さで沈み込んでいるように、石棺設置場所としてはあまり適さず、当初から石棺敷設場所には大きな制約[8]があったとみられる。三つの棺身が互いに見える段階で墳丘上に揃いながら、その配置や軸が整然としないのは、こうした事情も作用していたためであろう。なお、当古墳群の主体部が後述するように東西を指向していることを考慮すると、狭いスペースの中でわざわざ2・3号石棺がいずれも1号石棺より東側に寄っていることも、何らかの意味を持つ配置なのであろうか。

今後の課題　古墳群出土遺物のなかで最も古い様相を持つ2号墳出土の坏蓋には既述したように大きく3つの類型が認められる。これらの差異は追葬との関連性が当然考慮されるべきだが、残念ながら、出土状況からそれらを明確に区分することは難しい。実見していないが、報告書によれば鳥取県米子市の東宗像5号墳[9]でも色調や調整が第17図の1などのタイプに類似した坏蓋が存在するようであり、これら須恵器の地域的広がりについても今後資料収集が必要となる。

また、出雲全体における当古墳群の位置付けについては、玉作との関係も考慮されなければならないだろう。2号墳石室には碧玉石材が利用され、あるいは4号墳に碧玉製の玉の未製品が副葬されていた可能性が高いことなどは、この古墳群の被葬者らが玉の原材料や未製品を入手しうる環境にあったことを示している。また、玉作との関係は不明だが、5号墳1号石棺外では鉄製の棒状工具が副葬され、工人を連想させる遺物も出土している。全国的に展開していた玉作が、六世紀中葉以降出雲に集中していく要因やそのプロセス、あるいは玉作工人の支配関係などについては、まだ

不明な点が多いが、こうした時期に該当する岩屋墳群の様相が、近隣の林古墳群を支える集団よりも意宇などとの近似性を示すなど、今後、出雲の玉作ともかかわらせた総合的な検討も、まだ残されているのである。

第2節　岩屋遺跡の玉作について

史料にみえる出雲の8世紀以降の玉生産について、その実態の多くは現在でもほとんど未解明のままである。それでも近年では律令期の玉作との関連が想定される玉湯町の鉈喰遺跡[10]が調査され、その一端が窺われる資料も確認されるようになってきた。こうした中、今回の岩屋遺跡Ⅱ区の調査は、律令期の出雲の玉作工房址を始めて捉えたものとして注目されるものである。以下では、当遺跡の玉作遺構・遺物の特徴をまとめ、史料との関連性についても言及することで、当遺跡の性格と今後に残される課題について確認しておくこととする。

遺構　調査Ⅱ区からは加工段4棟、掘立柱建物1棟を検出しているが、これらは互いに切り合い、加工段4が加工段1か2かSB01のいずれかと併存する可能性が残される他は、共存関係を想定できる組み合わせがない。このうち、遺物から玉作工房としての使用が明らかなのは加工段3のみである。また、加工段4も遺物の出土状況から玉作が行われた可能性が残されるが、これらはむしろ加工段3の遺物とみなすべきことは第3節で述べたとおりである。

玉作工房址であることが明らかな加工段3は奥壁の長さが3.2mほどで、工房があったことを示す柱穴も確認されておらず、工房としては非常に簡素なものであったと考えられる。しかも、玉作工房が必ずしも屋根を必要としないのならば、加工段の西側の非常に緩やかな斜面上でも玉作が行われていた可能性がある。ただし、確かにこの付近には多くの玉の未製品・剥片が散乱していたものの、これらは調査前からほとんど露出に近い状態にあり、元位置から流れて移動したものと混じり合って、ドットを落としていっても作業地点を特定するまでにはいたらなかった。わずかに、SK04近くの玉の未製品・剥片の集中に人為的行為を認めうるにすぎない。しかし、いずれにしても当遺跡においては、玉作が屋内で行われたことを示す明確な遺構はないといえる。

一方、加工段3以外の加工段についても柱穴が明瞭でないのは同様で、玉作との関係は判然としないが、これらが恒常的な居住を前提としたものであったとは考え難い。それでも、加工段4では煮炊きが行われていたことが確認されているので、作業過程で食事の供給などを行う場を備えていた可能性も考えられる。

須恵器類の年代について　岩屋遺跡Ⅱ区から出土する土器類の内最も出土量の多い器種は須恵器蓋坏である。いずれも小片のため細かい検討は避けるが、口縁端部が大きく垂下してカエリを持たない蓋、内湾する体部を持つ無高台の坏が中心となる。蓋については、8世紀末以降はカエリが極端に短くなり、9世紀中頃以降には蓋そのものが無くなってしまうものと考えられることから、少なくとも8世紀後半以前のものが大半を占める。蓋であるとすれば94－18が9世紀代に下るが、95－13の口縁部である可能性もあり、9世紀に下る確実な蓋は見られない。坏身も無高台のものが多く、体部の形態などから蓋の年代観に矛盾するものではない。高台付きの坏や皿も、高台の形状や取り付く位置から8世紀中頃を大きく前後しない時期のものと思われる。廻の下限は明らかでないが、95－14・15と同様の廻は、高広遺跡[11]では7世紀末～8世紀前葉の年代観が与えられている。出雲国庁での編年[12]では第3形式に廻が存在しており、8世紀後半まで廻が存在する可能性がある。

出土状況から原位置を大きく移動していないと思われる遺物には、大型の須恵器鉢（91－6）と竈（92）がある。これらの出土地付近床面には火を受けた痕跡があり、加工段4で煮炊きが行われていたと考えられる。半球形を呈し取手の付く大型の須恵器鉢は近年になって出土量が増加しており、迎行遺跡（松江市）[13]・竹ノ崎遺跡（宍道町）[11]等で出土例がある。外面に平行タタキを施し内面に同心円文の当て具痕を持つこの鉢は、胴部の破片では甕と区別が付かないため、さらに多くが出土していた可能性がある。煮炊具としての須恵器の耐用性については疑問もあるが、いずれも被熱痕が見られ、竈などと供伴することから火にかけて使用されたことは否定しがたい。岩屋遺跡Ⅱ区から出土する他の土器には、8世紀中頃を中心とする須恵器類と、平安時代と考えられる上師器類の概ね2時期の土器群が見られるが、91－6のタタキ痕は古墳時代の甕と同様の平行タタキで、10～11世紀の須恵器大型品のタタキと異なるように思える。移動式竈の存続期間を考えても、8世紀中頃を中心とする須恵器群に伴うものと考えられる。これらが出土した加工段3・4が玉作工房の一部と考えられることから、岩屋遺跡の平玉生産は8世紀中頃を中心に行われていたものと考えられる。

平玉について　岩屋遺跡Ⅱ区での玉生産は、穿孔しない平玉が中心となっており、使用する石材は碧玉・黒色泥岩・石英にほぼ集約されている。石材の性質の違いからその数量を剥片の点数を計測することは意味が薄いと判断し、総重量を計測することとした。それによると、岩屋遺跡Ⅱ区全体で碧玉は6.872kg、黒色泥岩は5.194kgを測る。石英については、小さな剥片の場合水晶との区別が付かないために両者を同じものとして計測しているが、その総重量は29.984kgを測り、全体の約7割を占める。この約30kg程の石英・水晶の内、水晶と呼べるものは見た目には1割も含まれておらず、この結果からは岩屋遺跡Ⅱ区での玉生産が石英を中心に行われていたと判断できる。しかしながら、石英製の未成品は不定型なチップの割合が高く、他の石材に比べ加工し難かったと考えられることから、石材毎の比率の大小は破損品の多少に起因するものと想像され、必ずしも石英製平玉の生産量が多かったとは言えない可能性がある。岩屋遺跡Ⅱ区での平玉製作工程は、①石核から板状の剥片素材を剥り出すことを指向し、②薄くすることよりも平面円形に加工することを目指した調整剥離を行い、③研磨によって成形し、④最終段階で研磨により周囲の面取りを行っているが、各工程の細部は厳密ではない。遺構の状況からは、大規模で組織的な玉生産は考えにくく、少人数で行われていたものと想像される。

出雲地方における奈良・平安時代の玉作関連遺跡として知られている遺跡は少ない。六反田遺跡（玉湯町）[15]からは碧玉と水晶の剥片が採集されているが、表採資料であり発掘調査は行われていない。渋山池遺跡（東出雲町）の平安時代の廃棄土壙SK30[16]からは勾玉の未成品が出土しているが、砥石や剥片などの玉作関連遺物を伴っておらず、疑問が残るものとなっている。一方、出雲国庁付近からは多量の水晶チップが出土[17]しており、奈良・平安時代の玉作を行っていた可能性があり、今後の調査を期待されるほか、鉈喰遺跡（玉湯町）[18]は8世紀後半から9世紀の玉作に関わる役所機能を持つ施設が存在した可能性が指摘されている。平玉を出土する消費地遺跡は近年その数を増しつつある。時期は大きく下るが、渋山池遺跡（東出雲町）の土壙墓SK28からは碁石[19]と考えられる平玉3点が出土している。その内訳は、碧玉製の加工された平玉と頁岩（黒色泥岩？）・石英の自然石と考えられるものである。また、馬場遺跡（二刀屋町）の平安時代の木棺墓[20]からは、大刀や土器類と共に40点にも及ぶ平玉が出土した。この両者はいずれも墓であるが、古代寺院

と考えられる来美廃寺からも石英製平玉1点[21]が出土している。来美廃寺出土の平玉は、地鎮具の可能性も否定できないが、水晶ではなく白濁した石英製のものであり碁石か双六の駒と思われる。これらのことから、平安時代後半台に平玉を墓に副葬する風習がありそうであるが、数が少なく白然石も含まれていることから、岩屋遺跡の玉生産と直結して考えるには躊躇するものである。むしろ後述するように、史料との関連性から見れば、岩屋遺跡Ⅱ区での平玉生産は碁石と関わらせて理解すべきかもしれない。

史料との関連性　『延喜式』には、出雲から朝廷へ献上される玉として、出雲国造就任時の神寿詞奏上儀礼において国造がもたらす「玉六十八枚」[22]と、大嘗祭・臨時祭用に意宇郡神戸の玉作氏が毎年制作して進上する「富岐玉六十連」[23]が規定されている。このほか、『出雲国計会帳』などによって、別に水精の進上などもあったことが知られている。そもそも律令の規定では、雑令知山沢条に「凡そ山沢に異宝、異木、及び金、玉、銀、彩色、雑物有りといふ処知らば、国用に供するに堪へば、皆太政官に申して奏聞せよ」とあって、国用に用いるような玉を産出する山沢は、太政官に把握されることになっていた。また、同じく賦役令貢献物条は、珠・玉を含む当土産の貢献物が中央に送られる場合、布の価に准じて、官物を使って交易して充てるように規定していて[24]、『令集解』の同条古記と穴記は官物を郡稲と説明する。先の『出雲国計会帳』の進上された水精もこれと関連する可能性がある。したがって、出雲においても、玉の材料を産出する地域はすでに国家に把握されていた[25]はずであり、また律令国家の国郡制のシステムに依拠し、進上分の玉が官物によって確保される場合もあったことが窺われる。

このように8世紀以降の出雲の玉生産が、律令国家と密接な関係にあったことは疑いようのない事実であり、その側面は、勾玉などに加え多くの平玉を出土した蛇喰遺跡が、8世紀末から9世紀代の玉の生産・集積・管理などを行った公的機関ではないかと推定[26]されているように、平玉生産とも結びつくものである。しかし一方で、出雲の平玉の場合、史料にみえる朝廷への進上物と直結した生産を前提としたものであったとは必ずしも言えないことにも留意すべきであろう。

『延喜式』神祇三臨時祭式奏神寿詞条によると神寿詞奏上の際の「玉六十八枚」は「赤水精」8枚、「白水精」16枚、「青石玉」44枚で構成されることになっていたが、赤水精を赤瑪瑙、白水晶を白瑪瑙あるいは石英・水晶、青石玉を碧玉と推定[27]するとして、岩屋遺跡には瑪瑙製の平玉は一点も出土していない。また、水晶・石英製の平玉未成品が圧倒的に多いことも、6割以上を「青石玉」で占める「玉六十八枚」とその比率を異にする。こうした出土傾向は蛇喰遺跡でも同様である。そして何よりも、神寿詞奏上儀礼は出雲国造の交替に際し行われるものであって、大量の平玉未成品の存在自体をこうした臨時の国家祭祀によって説明することはできないであろう。

また「富岐玉六十連」は、毎年制作されるという点においては、その恒常的生産がある程度の量の玉の未製品を生じさせる可能性を持つものであるが、これらが「連」で数えられてるように、一連が数珠状に玉を連ねた形状で進上されるものであったと想定される。ところが、平玉には穿孔の痕跡がないから、これに平玉をあてはめるのは適当でない。さらに、『出雲国計会帳』などにみえる水精玉の場合は、碧玉製や黒色泥岩製の平玉の存在が説明できない。

以上のように、当遺跡などで出土する出雲産の平玉には、史料にみえる玉の進上との直接的関連性が認めがたいといわざるを得ないのである。

一方、史料に登場する様々な玉成品のなかで、大きさや形状が平玉と類似するものに、碁石や双

六玉があげられる。東大寺献物帳には「雑玉双六子六百六十九」という[28]記載があり、その内訳は水精35、琥珀35、黄瑠璃20、浅緑瑠璃15、緑瑠璃15、白碁子14、黒碁子15とされている。実際、東大寺正倉院は碁石や双六玉を今に伝えていて、その形状や大きさを確認すること[29]ができるが、それらは岩屋遺跡出土のものと大きく矛盾しない。そして、『出雲国風土記』島根郡条に玉結浜（美保関町玉江浦）に関して「碁石あり」と注記されているように、出雲もまた碁子を産していたとみられる。なお、この浜の砂礫が平玉用石材として持ち込まれた可能性も指摘されていて注目[30]される。しかも、僧尼令の作音楽条では僧尼の「碁琴は制する限に在らず」と規定し、『続日本紀』天平十年（738）七月丙子条は、左兵庫少属従八位下の大伴宿禰子虫と右兵庫頭外従五位下中臣宮処連東人の碁を囲む場面を描いたりと、碁は八世紀代から僧尼や官人たちの間で一般的に行われるものであった。『常陸国風土記』多珂郡条も小貝浜で採れる碁石を「いわゆる常陸国に有る麗しき碁子は、唯是の浜のみなり」と称しており、碁石がすでに奈良時代において逆地をもって語られるほど流通していた状況を窺わせる。したがって、出雲でも碁石を産している以上、当遺跡の比較的大量で、かつ水晶・石英と碧玉・黒色泥岩という対照色で構成される平玉生産を、8世紀の碁の流行とかかわらせて理解することに大きな矛盾はないと考えられる。

このように、史料に限定してみる限り、8世紀の出雲の平玉生産は碁と関連させて理解するのが最も妥当であると考えられるが、それとは別に、平玉には興福寺金堂須弥壇出土の例[31]に代表されるように、史料では直接確認できない祭祀とかかわる用例も存在する。時期が新しくなるものの、近年、飯石郡三刀屋町の馬場遺跡では平安期の墳墓への平玉埋納[32]の例も報告されており、祭祀とのかかわる平玉使用の用例は今後も増加する可能性がある。しかし、今のところこれら祭祀具としての平玉に碧玉が使用された例は知られていないことから、岩屋遺跡の平玉を祭祀のみと関連させて解釈することは問題が残る。ただし、水晶・石英製の平玉未成品が碧玉・黒色泥岩制平玉未成品よりも圧倒的に多い事実から、水晶・石英製の平玉に関してはその一部に祭祀用としての生産があったことを想定することは可能性かもしれない。

いずれにしても、以上のような想定されうる平玉の用途では、生産に関して朝廷進上が前提とされる史資料的根拠がなく、朝廷への進上、分配とは別の流通の可能性を考える必要が出てくる。この場合、今後は平玉の流通の在り方の調査とともに、蛇喰遺跡によって想定された平玉生産の公的関与についての目的そのものが、改めて問われなければならないことになろう。

小結　以上、平玉を中心とした岩屋遺跡の玉作は8世紀半ばを中心とするものであったこと、また作業場では食事の供給などが行われた可能性があるが、玉作工房自体は極めて簡素な作りで、上屋を備えていたかどうかも疑問であること、また平玉は碁石の可能性が高く、一部祭祀具としての利用も想定されうることを述べてきた。8世紀以降の出雲の玉作が、律令国家と深い関係を持ちながら、平玉生産のように朝廷への進上を必ずしも前提としないものを含んでいたとするならば、玉生産そのもののこうした多元性を解明することは、出雲の玉作の問題にとどまらず、史料では知られない律令国家の流通経済の実態を解明する大きな手掛かりを得ることにもつながるであろう。

第３節　岩屋遺跡の旧石器

岩屋遺跡Ⅱ区からはナイフ形石器2点が出土している。この内110－１の石材はサヌカイトの可能性が高く、瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器と考えられるものである。また110－２は玉湯町内でも産出する瑪瑙による石器で、瑪瑙や玉髄製の石器は玉湯町やその周辺で多くが知られるようになった。

現在までに出雲地方で旧石器時代の遺跡は約20例が知られている。この内、瀬戸内技法による可能性があるものにカンボウ遺跡（安来市）の安山岩製削器[33]、石台遺跡（松江市）のナイフ形石器様の石器[34]、古曽志平廻田遺跡（松江市）のナイフ形石器・台形様石器[35]が知られている。これらの石器は、安山岩によるものが大半で、石核や剥片など製作に関わる遺物を伴出しておらず、製品だけが持ち込まれた可能性は否定できないが、いずれにしてもAT降灰以降に瀬戸内地域との活発な交流があったものと考えられる。

また、瑪瑙や玉髄と言った玉湯町周辺で産出する石材を使用した旧石器時代の石器としては、廻田遺跡（松江市）[36]・堤平遺跡（宍道町）のナイフ形石器[37]、空山遺跡（八雲村）の石核[38]、首谷遺跡（宍道町）の細石核[39]、杉谷遺跡（玉湯町）の湧別技法によるスポール・細石刃[40]、下黒田遺跡（松江市）の玉髄製剥片の接合資料等[41]が知られるようになった。中でも古曽志清水遺跡の玉髄・瑪瑙製石器は、それに使用される技法が東北地方日本海側との関連を示す可能性があり注目[42]されている。古曽志清水遺跡の石器群は、その形態や技法からAT上位と考えられている一方、杉谷遺跡の湧別技法は旧石器時代終末のものであり、出雲地方では後期旧石器時代を通じて玉髄・瑪瑙を石器石材として使用することが一般的であったかのような印象を受ける。

岩屋遺跡Ⅱ区出土資料は、サヌカイト製の横長剥片によるナイフ形石器は恩原遺跡での検討[43]よりATより上位であるものと思われる。瑪瑙製のナイフ形石器は別に出土しており、特異な形態であり時期は不明である。

第４節　平床Ⅱ遺跡の玉作について

１．玉作関連遺物について

平床Ⅱ遺跡から出土した石材のうち、玉未成品と認識した遺物の総重量は約１kgである。主要な石材は水晶・石英、めのう、碧玉の３種類である。

石材ごとの比率を見ると、重量、個数ともめのうが半数以上を占める。特にめのう製の勾玉は多く、勾玉の個数全体の70%を越える。水晶・石英と碧玉に関しては、個数比では水晶・石英が高く、重量比でも石核を除くと碧玉の比率は14%程度まで下がる。水晶・石英については６種類の玉が出土しており、出土点数が少ないためある程度の傾向をうかがえるに過ぎないが、勾玉が12点と最も多く、丸玉が９点でそれに次ぐ。碧玉は、４種類の玉が出土し、勾玉12点のほか、平玉が10点確認されている。完形品と見られる棗玉のほか、管玉の未成品が１点出土しているが、管玉未成品はこの遺跡では唯一のものである。

また、玉の種別から見ると、勾玉が84点出土し、出土数全体の３／２を占め、平玉20点、丸玉11点以外は１～４点と極端に少なくなる。めのう製勾玉が卓越しているのは先に述べたとおりであるが、平玉ではⅡ区SB－01から未成品７点が出土している。完成品ではないが、いずれもほぼ平玉の形を成すもので、工程的には未成品であるが成品として使用された可能性が考えられる。また、

表10　平床Ⅱ遺跡　玉未成品構成表

		勾玉	平玉	丸玉	白玉	切子玉	三輪玉	小玉	棗玉	管玉	石核	計(%)
めのう	重量	572.59	17.28	1.97								591.84(58.17)
	個数	60	2	1								63(50.00)
水晶・石英	重量	112.9	22.05	41.01	7.16	2.48	18.65					204.25(20.07)
	個数	12	6	9	4	1	2					34(26.98)
碧玉	重量	98.32	33.81						1.1	8.17	73.18	214.58(21.09)
	個数	12	10						1	1	1	25(19.84)
貝岩	重量		3.34									3.34(0.33)
	個数		1									1(0.79)
不明	重量		2.51	0.66				0.19				3.36(0.33)
	個数		1	1				1				3(2.38)
計	重量	783.81	78.99	43.64	7.16	2.48	18.65	0.19	1.1	8.17	73.18	1017.37
	重量(%)	77.04	7.76	4.29	0.7	0.24	1.83	0.02	0.11	0.08	7.19	
	個数	84	20	11	4	1	2	1	1	1	1	126
	個数(%)	66.66	15.87	8.73	3.17	0.79	1.58	0.79	0.79	0.79	0.79	

これらはいずれも穿孔されておらず、用途としては碁石などが想定されており[44]、平床Ⅱ遺跡出土例も同様なものであろう。注意されるのは三輪玉の未成品が2点出土していることである。島根県内では三輪玉の出土例自体が少なく、島田池遺跡（八束郡東出雲町）の横穴墓[45]など完形品の出土例が認められるが、今回の出土例は玉作遺跡から未成品の状態で検出した点で貴重なものである。

以上の状況から、平床Ⅱ遺跡ではめのう製の玉、特に勾玉を中心に水晶・石英、碧玉を使用した多様な玉の生産を行っていたことがうかがえる。

砥石については、平床Ⅱ遺跡では、外磨き砥石（筋砥石）の明確なものが検出されていない。結晶片岩製のもので、磨滅によるわずかな凹面が認められるものは存在するが、勾玉外面の曲面に対応する筋状のくぼみをもつものはない。松江市福富Ⅰ遺跡においては、結晶片岩製の筋砥石を想定している[46]が、平床Ⅱ遺跡の場合、結晶片岩製の砥石についても筋砥石のような使用痕は認められない。勾玉未成品では一次研磨品、仕上げ研磨品とも出土しているので、平床Ⅱ遺跡でも研磨工程を行っていることは確実で、工程による遺跡間の分業ということも考えにくい。運搬可能な筋砥石により研磨を行い、他の遺跡へ搬出されたと考えるべきであろう。

なおⅡ区SB－01をはじめ、複数の遺構から砥石の小片や、砥石としての使用を意図した珪化木が出土しているが、いずれも小片で点数も少ない。これらについては後述したい。

2．玉の製作工程について

玉の製作工程の分類は、前述したとおり福富Ⅰ遺跡に準じた。分類の結果ある程度工程が追えるものについて、概略を述べる。

めのう製品　石核を抽出できなかったが、素材剥片、調整剥片、敲打整形品、一次研磨品、仕上げ研磨品のそれぞれの未製品が出土しており、①形割工程②側面打裂工程③敲打整形・一次研磨・穿孔工程④仕上げ工程が行われたことがわかる。また、敲打整形がめのうにも行われている例が確認された（158－6など）。敲打整形は、水晶においては一次研磨のかわりとなる調整[47]との指摘があるが、めのうと水晶を使用するこの遺跡では、めのうにも敲打整形が流用される形で用いられたのではないだろうか。また、③の穿孔工程については、調整剥片に穿孔が行われているものがあり、この時点で孔が貫通するものとしないものの両方が存在する。一次研磨の段階で穿孔を行うと言う説には疑問が呈されているが[48]、この遺跡ではそれを補強する資料が確認されただけではなく、158－3のように調整剥離完了の前に穿孔が開始された可能性もうかがわせる。なお、勾玉の調整

剥片で、A．平面形を長方形に整形するもの（179－3など）、B．平面形を半月形に整形するもの（158－3）の2種類が認められるが、平面長方形のものから半月形に再度整形することは考えにくく、何らかの理由で2種類の整形が行われたと考えられる。

水晶・石英製品　素材剥片、敲打整形品、調整剥片、仕上げ研磨品が出土している。臼玉、二輪玉などは出土点数が少なく、玉の種別による製作工程の違いは存在する可能性があるが、全ての種類の玉に敲打整形が行われている。穿孔は敲打整形品にはほとんど施されているが、調整剥離段階で穿孔の有無を確認できる資料がなく不明である。

碧玉製品　基本的にはめのう製勾玉と同一の工程をたどるが、敲打整形が認められる資料は存在しない。穿孔が行われる段階については、調整剥片に孔が貫通しているものが認められる一方、仕上げ研磨品で穿孔を開始したものの、貫通させず放棄されたものが存在するなどさまざまである。以上のことから、平床Ⅱ遺跡における玉の製作工程は、全体的には過去の研究成果を追認するものである。その一方、製作工程は固定化したものではなく、穿孔の時期やめのうに見られる敲打整形など、細部においては柔軟に行われている一例を示したといえるのではないだろうか。

3．玉作関連遺構について

平床Ⅱ遺跡では、竪穴住居跡2、掘立柱建物跡8ほかが検出され、そのほとんどから玉の未成品や砥石が出土したほか、Ⅲ区を中心に遺構外からも玉作関連遺物が出土している。

これら玉作関連遺物が出土した遺構のうち、確実に玉の生産を行ったと言えるのはⅢ区SB－01・SI－01である。この2つの遺構からは、未成品、砥石のほか水晶・石英などの小さな剥片（チップ）がまとまって出土しているほか、SB－01からはハンマーも出土しており、玉の製作が行われたことは間違いない。

ただ、遺構の状況から見ると、玉作工房に多く見られるいわゆる「工作用ピット」は、竪穴住居であるⅢ区SI－01からも検出できなかった。Ⅲ区SB－01についても、柱穴の状況など不明な点は多いが、通常の掘立柱建物と異なる構造は確認できない。Ⅲ区SI－01は、中央ピットが極めて浅く、焼土をもつ点は注目されるが、これも一般的な竪穴住居の範疇で捉えうるもので、床面に掘りこまれているピットはいずれも柱穴とみられ、「工作用ピット」とは認められない。

逆に遺構の状況から注目されるのは、1区SI－01である。この遺構は北壁にSK－02が掘り込まれるが、この土坑には白黄色粘土が厚く堆積している。竪穴住居を玉作工房としている場合、壁際に「工作用ピット」をもつ例は多いが、大原遺跡（安来市）[49]などでは、工作用ピットの底部に粘土が貼られている例が見られ、水を使う作業を行うために目張りに使ったものとされている。土坑の位置や粘土の堆積状況などに相違点はあるものの、SK－02はSI－01に付随する工作用ピットと考えられる。

このほかの遺構からは、玉未成品のほかは砥石や比較的大きな剥片が数点程度認められるものが多く、チップは確認されていない。例を挙げると、中世の建物跡と見られるⅡ区SB－01では、一次研磨～仕上げ研磨段階の平玉7点と珪化木が出土している。珪化木は、砥石としての使用を意図したことも考えられるが、使用痕が不明確である。また、碁石などの用途を想定するならば、これらの半玉も完成品として取り扱われたことが充分に考えられることから、Ⅱ区SB－01は玉作工房ではなく、完成品としての玉を保管、使用した場所であると考えておきたい。

第５節　平床Ⅱ遺跡の中世遺構・遺物について

この遺跡では、中世の土師器を出土する掘立柱建物跡や溝状遺構が多く確認された。古墳時代の須恵器などが同時に出土した遺構もあり、必ずしも一括性は高くないが、Ⅱ区SB－02などでは土師器に白磁が共伴し、土師器の年代が特定できる資料となった。島根県内においては、古代末以降の土器については、近年出雲平野を中心に出土例が増加し、これらの資料を基にした編年案も提示されるようになった[50]。平床Ⅱ遺跡出土の土器がどのように位置づけられるのかは、今後の資料の増加を待って検討したい。

また、Ⅱ区SX－01は、底面出土の土器から12世紀頃の遺構と見られるが、土坑内に多くの礫が置かれ、底面近くから炭化物の層を検出しており、火葬墓の可能性がある。山陰の中世墓については集成・検討が行われているが[51]、これによると12世紀代には山陰でも火葬・土葬を採用した中世的な墓が見られるとされる。調査例が多い鳥取県東部では、14世紀～15世紀の中世墓において土葬墓、火葬墓、蔵骨器をもつものの３種類が確認され[52]、墓坑周囲に溝を巡らすものも西桂見遺跡などで検出されており[53]、形態的にはⅡ区SX－01を火葬墓と考えて大きな問題はないだろう。SX－01出土の土器の中にも時期差があり、鳥取の諸例と比較すると、時期的にかなり先行することになるため、断定はできないが、12世紀代の火葬墓となる可能性は指摘できるのではないだろうか。

註１　丹羽野裕『岡田薬師古墳調査報告書』島根県教育委員会1986

註２　布志名の判官山古墳群の３基、樫の木古墳群の２基、玉造の鳥場古墳群の２基、林村本郷の小畑古墳群の５基、林古墳群の１基が知られている。このうち後期古墳に該当することが知られるのは鳥場と林のみである。

註３　玉湯町教育委員会のご厚意により、玉湯町保管の実測図を掲載させていただいた。ご配慮いただいた玉湯町立出雲玉作資料館、勝部衛館長、片岡詩子副館長を始め、関係の方々に対し感謝いたします。林43号墳の概略については玉湯町教育委員会発行のパンフレット「林古墳群第43号古墳」を参照した。

註４　島根県教育委員会『出雲岡田山古墳』　1987年

註５　石棺式石室については出雲考古学研究会『石棺式石室の研究―出雲地方を中心とする切石造り横穴式石室の検討―』《古代の出雲を考える》1987年参照。

註６　本報告書所収の井上晃孝「玉湯町岩屋古墳群出土人骨」、田中良之「岩屋遺跡出土人骨の親族関係」を参照。

註７　田中良之前掲註６

註８　１号石棺内の男性骨は棺内の最終埋葬者であるにもかかわらず、腐乱状態で人為的にねじられ、上半身と下半身が逆転位となったと推定される（井上晃孝前掲注６）

註９　中原斉「古墳の調査」『来宗像遺跡』財団法人島根県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所1985年

註10　島根県八束郡玉湯町教育委員会『蛇喰遺跡』　1999年

註11　『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会　1984年

註12　坪井清足・町田章「遺物」『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会　1970年

註13　「進行遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅱ』　2000年

註14 『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』島根県教育委員会　2001年

註15 「六反田遺跡」『島根県生産遺跡分布調査報告書』

註16 『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』島根県教育委員会　1997年

註17 『出雲国庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会　1970年

註18 前掲書註10

註19 前掲書註16

註20 「馬場遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』島根県教育委員会　2000年

註21 「来美廃寺」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』島根県教育委員会　2000年

註22 『延喜式』神祇三臨時祭式奏神寿詞条

註23 『延喜式』神祇三臨時祭式富岐玉条

註24 山里純一『律令地方財政史の研究』第三編第一章吉川弘文館1991年

註25 『出雲国風土記』意宇郡条は伯太の長江山に水精を産することを記す。

註26 片岡詩子「まとめ」前掲注9

註27 加藤義成「文献にみる玉作について」『松江考古』二1977年は、赤水精を赤瑪瑙、白水精を白瑪瑙、青石玉を青瑪瑙（碧玉）と解釈する。

註28 『大日本古文書』4－128

註29 奈良国立博物館『正倉院展』(昭和六一年・平成五年)を参照すると、北倉の碁石は染象牙・石英・蛇紋岩製などがあり、径は約1.5～1.6cm、厚さは約0.7～0.8cm、北倉の双六玉は水晶・琥珀・瑠璃製で直径約1.4cm、厚さ約0.7cm程度となっている。

註30 片岡詩子「蛇喰遺跡出土の玉について」前掲注9

註31 国宝に指定されている興福寺金堂須弥壇出土の平玉・面取玉は、現在、東京国立博物館に所蔵されている。そのうち、水晶・琥珀・ガラス制のものを同博物館工芸課室長の原田一敏氏の御厚意で実見させていただいた。実見したそれらの直径は水晶製平玉・面取玉が1～2cm、琥珀製平玉が1.5cm、ガラス製平玉が1.2cmほどで、形や大きさは県内出土の平玉と大きく矛盾するものではない。

註32 中川寧「馬場遺跡」『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ』島根県教育委員会　2000年

註33 『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』島根県教育委員会　1994年

註34 『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』島根県教育委員会　1989年

註35 『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会　1989年

註36 『廻田遺跡・廻田古墳』松江市教育委員会　1988年

註37 丹羽野裕「堤平遺跡」『宍道町史史料編』宍道町史編纂委員会　1999年

註38 「空山遺跡」『古代の出雲を考える3』出雲考古学研究会　1983年

註39 丹羽野裕「島根県における旧石器時代研究の現状と課題」『島根考古学会誌第8集』　1991年

註40 丹羽野裕「1999年の島根県における考古学の動向「旧石器時代」」『島根考古学会誌第17集』　2000年

註41 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅵ』島根県教育委員会　1989年

註42 丹羽野裕「古曽志遺跡群出土の旧石器」『古曽志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会

1989年

註43　稲田孝司「第８章恩原２遺跡発掘調査成果の総括恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団　1996年

註44　前掲書註10

註45　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『島田池遺跡・鹸貫遺跡』　1997

註46　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳』　1997

註47　前掲書註46

註48　前掲書註46

註49　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『臼コクリ遺跡・大原遺跡』　1994

註50　建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会『蔵小路西遺跡』1999など

註51　南前孝明「山陰の中世墓」『季刊文化財』第84号　1996

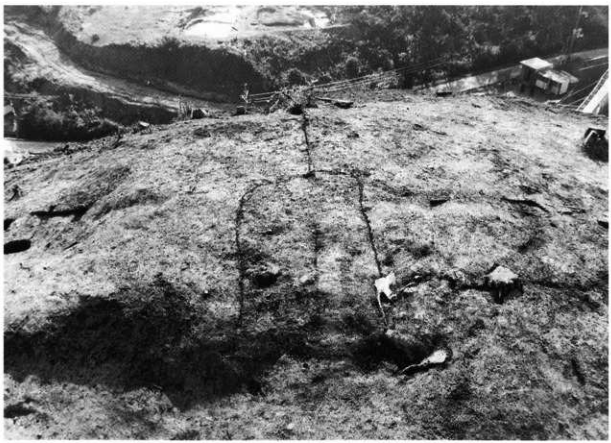
註52　鳥取県教育委員会『布施鶴指奥墳墓群試掘調査報告書』　1992

註53　鳥取県教育文化財団『西桂見遺跡・倉見古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書46　1996

岩屋遺跡遠景（1号墳から）

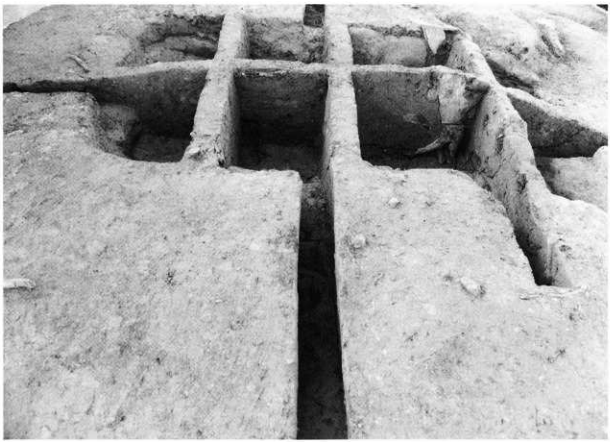
岩屋遺跡Ⅰ区1号墳発掘前（西から）

岩屋遺跡Ⅰ区１号墳表土層除去後（西から）

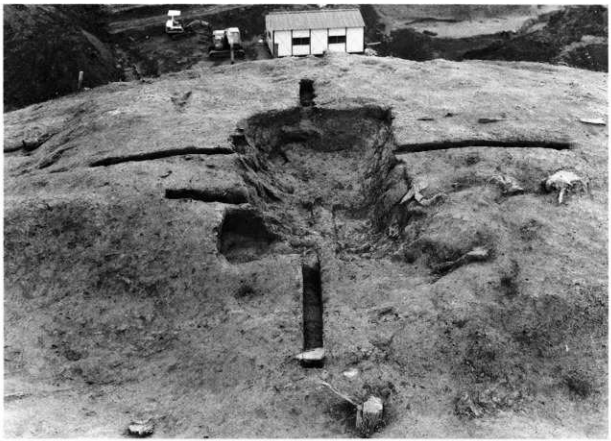


岩屋遺跡Ⅰ区１号墳主体部検出状況（西から）

岩屋遺跡Ⅰ区１号墳主体部土層堆積状況（南東から）



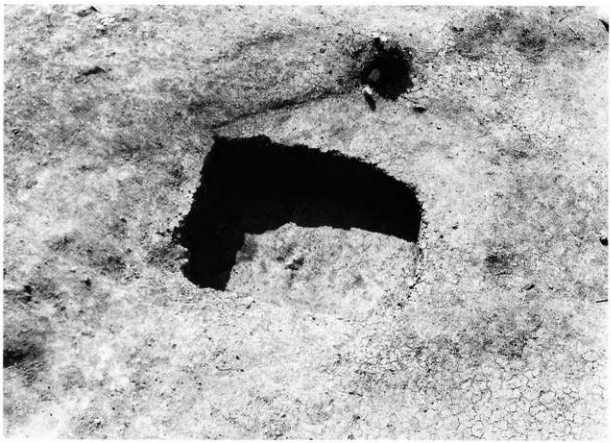
岩屋遺跡Ⅰ区１号墳主体部土層堆積状況（北東から）



岩屋遺跡Ⅰ区１号墳主体部完掘状況（北西から）

岩屋遺跡Ⅰ区SK06土層堆積状況（北西から）

岩屋遺跡Ⅰ区SK06遺物出土状況（東から）



岩屋遺跡Ⅰ区SK06完掘状況（北から）

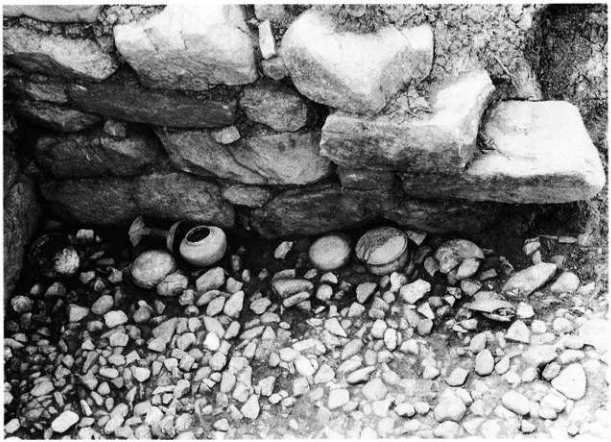
岩屋遺跡Ⅰ区2号墳発掘前（西から）

岩屋遺跡Ⅰ区2号墳石室崩落状況（西から）

岩屋遺跡Ⅰ区２号墳表土層・石室内堆積土除去後（西から）

岩屋遺跡Ⅰ区２号墳石室内遺物出土状況

岩屋遺跡Ⅰ区２号墳石室内遺物出土状況（石室北東部）



岩屋遺跡Ⅰ区２号墳石室内遺物出土状況（石室北側）